草太とホーリーエンジェモン　前編

0.プロローグ

日本中どこにでもあるような地方都市。それなりの高さのビル。人の行き来が絶えることのない駅前ロータリー。
夕暮れが街を照らし、家に帰る人、居酒屋を探しぶらつくサラリーマングループ、行き交う人に濃い影を映す。
何にもないただの日常である。しかし平和が破られるのは突然である。
音もなく大穴が空に開き、そこから人の世界にあり得ざる巨体が現れる。

何百年と歳を経た大樹を思わせる体表。西洋の竜を彷彿とさせる四足に背を飾る翼。赤黒い鬣がゆらめいている。
そして頭部から体にかけて黒々としたタトゥーが覗く。その体の節々からは虫が溢れ、タトゥーからは黒い靄が染み出している。

”エントモン！　全身が腐食した樹木で構成された植物型デジモン！　溢れるほどに詰まった大量の虫を筋肉として動いており、必殺技は突き出した牙で敵を貫くドライアドスティンガー！”

空に浮かび上がるその体が羽ばたく度に腐食した樹皮が落ちる。溢れだした虫たちは瘴気と化してエントモンの体を包んでいく。黒いタトゥーはパンドラモンによる支配を受けている証だ。しかし、その目は正気を保ったまま悪意に濡れている。
悪意の赴くままに、瘴気と靄があたりに立ち込めていく。その矛先は人へ向けられる。
力ずくの破壊音が不協和音となって一帯を恐怖に染め上げる。

平和を脅かす暗闇。影すら覆いつくす暗黒に、誰もが怯え、竦み、恐怖に体を震わせる。逃げ惑う人々を目下に見下ろし、うれし気に笑うエントモン。破滅をもたらす悪意が、街を絶望に染め上げていく。

だが、それでも現れる光がある。

「まとめて吹き飛ばせ、ホーリーエンジェモン！」
「黙ってろ、今やる！！」

どこからか、力ある言葉が響く。それに応える声と共に、光をまとう風が黒い靄を吹き飛ばしていく。
切り裂かれていく瘴気。異常事態の連続に怯える人々も、その風に顔を上げる。
そして思う。一体この風、光の先には何があるのかと。

その答えは空にあった。
光をまとい、輝くばかりの白い羽を広げる高笑いを響かせるその姿。まさに大天使というべき存

在があった。

　"ホーリーエンジェモン。法の執行官たる大天使型デジモン"

　エントモンの巨体からすればせいぜい1/3程度の姿。それでも陰ることのないその光は人々に希望を与える。
　その足元には一人の少年がいる。青いパーカーにジーンズ。右手はポケットに突っ込んだまま、左手にはスマートフォン。
　どこにでもいるような少年。だが、その目にはただ強い意志がのぞく。
　スマートフォンからは天使と同じ光が発せられており、少年自身もうっすらと光に包まれている。

「さっさと終わらせてもらう。夕飯がまだなのでな」
「作るのは俺だぞ」

　少年――長峰草太――の左手、スマートフォンが強く輝き、光の文字が浮かび上がる。少年は右手をポケットから出して、慣れた手つきで光に触れる。トーンと操作音が鳴ると、呼応するように天使の輝きが増していく。
　ホーリーエンジェモンの右腕から青白い光が伸びる。選ばれしものだけが持つことを許される聖なる剣、エクスキャリバーだ。
　邪悪なデジモンを討つために鍛え上げられた光の剣。青い清浄なる光は悪を断つ至高の一振りとなる。

　誰もが空を見上げる。おぞましき黒い靄の竜。対するは輝き放つ大天使。まるで神話を思わせる一幕。人々の心に浮かんでいた恐れや体の震えは止まり、ただただ光を見つめている。もうその目に恐怖はなくなっていた。

　エントモンの羽ばたきと共にまき散らされる無数の小さな虫たち。当たれば相手の肉体を枯れ果てさせる即死級の攻撃だが、エクスキャリバーの一振りで瞬時に打ち払われる。邪悪を打ち払う聖剣は伊達ではない。触れずとも、その剣風は瑣末な虫程度を問題にしない。
　どちらも完全体であり、レベルは同格。エントモンはゾンビタトゥーによる強化があり、ホーリーエンジェモンには邪悪への特攻がある。どちらも防御をたやすく打ち破る攻撃を有する以上、勝負が長引くことはあり得ない。
　様子見はすでに終わり、次なる一撃で全てが決まる。
　求められるのは純粋な力。ただ速く強い一撃を叩き込む。それがデジモンの戦いである。そして、そこに一石を投じるのが契約者たる人間、草太の役目である。

　スマホを通じて草太はホーリーエンジェモンの力を解放する。その繋がりは2人を繋ぐだけではなく、互いの強い意思のもとに共振すら起こす。オーバーフローした光が、草太へと逆流するように溢れるのだ。
　だとしても、ただの人間程度が聖なる力を持ったところで、完全体であるエントモンには脅威とならない。

ならば草太は見ているだけか。そうではない。こと勝負においては見ているだけで得られるものなどない。一瞬でも気を逸らすことのできる手段があるのだ。勝ち筋を少しでも引き寄せる。そのためにできることをやる。だから草太はホーリーエンジェモンと共に立つのだ。
草太がいる道路、その舗装路はエントモンによってぐちゃぐちゃに破壊されている。蜘蛛の巣のようにひび割れており、大小様々に分断されたアスファルト片が転がっている。
一つ手頃なサイズを拾って握りしめる。草太の体に溢れていた力が注ぎ込まれていく。

ホーリーエンジェモンからは草太が見えている。エントモンは草太を歯牙にも掛けない。
大きく一歩踏み出した勢いで、全力のもと握りしめたアスファルト片――石ころを空へと投げつける。ホーリーエンジェモンとエントモンを結ぶ一直線上に、見上げるほどの高さまで、光の尾を引いて石ころが上っていく。わずかばかりの力であるが、そこに宿す力はホーリーエンジェモンの力そのものでもある。
ホーリーエンジェモンはニヤリと笑う。口元を覆う金布でエントモンからは見えなかっただろうが。

石が放物線を描く中、ホーリーエンジェモンが構えをとる。呼応するようにエントモンが突撃を開始する。
カウンターを狙うホーリーエンジェモンと、それごと叩き潰そうというエントモン。
巨体に見合わぬ猛烈な速度でエントモンが空を駆ける。エントモンの必殺技、ドライアドスティンガーだ。
その巨大な牙を以てホーリーエンジェモンを串刺しにせんと、瞬時にトップスピードまで加速するエントモンだが、その瞬間に草太の投げ上げた石ころが強烈な光を発する。

一般に、高速移動中の視野は速くなればなるほど狭くなる。音を破るような突進であれば尚更だ。闇すら照らす爆発的な閃光がエントモンの狭くなった視界を染め上げる。
ホーリーエンジェモンが自らの力が宿った石を起爆させたのだ。もともと自分の力なのだから、その操作もお手の物。
対してエントモンは、突然視界を光で塗りつぶされたことでドライアドスティンガーを狙うどころではない。
それでも歴戦の完全体である。体格を考えれば掠るだけでも与えるダメージは十分と判断し、牙を傾けて接触面積を増やして突撃を続行する。身の丈ほどの牙が迫る中、ホーリーエンジェモンは4対の翼で悠々と空を舞う。ドライアドスティンガーをひらりとかわし、そのままエントモンの下に潜り込む。
そして振り下ろされるエクスキャリバー。エントモンの必殺技すら利用する一撃が、エントモンの顔面から尾の先まで、全てを両断していく。そして振り抜いたホーリーエンジェモンの背後で、両断されたエントモンの肉体がビルの外壁に激突する。
どごんと衝撃音が響くと、ズルズルと地面へと落下してもう一つ大きな音を立てた。

草太のスマートフォンに新たな通知が届く。ヘブンズゲートの使用申請だ。迷うことなく承認をタップする。するとホーリーエンジェモンがエクスキャリバーを空にかざす。その先、何もない中空に巨大な門が生成される。歯車の噛み合う音が響き、門が開く。猛烈な風が門に向かって流れ出す。

　その風はエントモンの巨体をも浮かび上がらせ、静かにエントモンを吸い込んでいった。

　それが戦いの終わりだった。静かに空に開いた門が消えた時には、天使も少年も姿を消しており、破壊の後だけが今そこにあった現実を伝えていた。

　＊＊＊

　現場をさっさと離れて帰り路をいく少年と天使。交わされる言葉には棘が入り混じって険のあるもの。
　それでも付かず離れず、二つの影は同じ道を行く。

　これはどこまでも独善的で身勝手な天使と、立ち止まった少年が再び走り出すまでの話だ。

　1.　これが日常

　この図々しいぐうたら天使が。
　その日少年の怒りは頂点に達した。

　少年の名は長峰草太。この春中学を卒業し、無事地元の高校へと入学した男子高生である。今でこそ遠ざかっているものの、かつては将来を期待されたサッカー少年であった。そして今は何の因果かデジモンとの共同生活中である。

　床に散らばるゴミ。食べ終わったカップ焼きそばにポテトチップスの空き袋。ペットボトルが転がり、ティッシュや紙袋が散乱している。読み終わった本は出しっぱなしで、いくつかはページが開いたままに床に投げ出されたままだ。やりかけのルービックキューブは一面もそろうことなく投げ出されている。
　しかも床には何か液体をこぼした跡。それを拭いただろうタオルはソファーにそのままかけられており、ソファーにも色が移っている。テレビは誰も見ていないのに大音量で流れるままだ。

　草太は割ときれい好きである。もともとサッカー一筋だったこともあり、物欲が薄かった。そのため部屋に物が増えることを好まない。せいぜい観葉植物が一鉢ある程度である。ちなみに小学校のころから何度も枯らしつつも育てており、今の個体は２年目だったりする。
　両親ともにまめなタイプでもあったため、必然的に散らかっている状態というのが少なく、整頓された状態で過ごすことに慣れている。
　それは高校入学を機に両親が県外赴任となってからも同じで、週に一度程度掃除をするのが習慣だった。

　それが乱れてきたのはホーリーエンジェモンが居候を始めてからだ。
　とにかくホーリーエンジェモンは典型的な片づけのできないタイプであった。
　どこからか拾ってきた木の実や紙で出来た手裏剣、片方だけの手袋、割れたマグカップとガラクタを持ち込んではそこらに放置する。使ったタオルは適当に投げ出す。食べ終わった食器は片さず、すぐにスナック菓子を食べ始める（しかもゴミは放置）。

　その都度片付けるように注意をしてきたが、今日の状態はひときわひどい。

「ホーリーエンジェモン！どこに行った！？ちょっとこっち来い！！」

　どうせ遠くには行ってないはず。休日の昼過ぎはだいたい屋根で日光浴などといってごろ寝をしていることが多い。草太の予想は当たり、窓から迷惑気な顔で部屋の中に入ってくる。苦情のつもりかいつもより羽の音が大きい。

”ホーリーエンジェモン！輝く８枚の銀翼を持った大天使型デジモン！！”

　ある目的のために草太と契約を行っている。完全体としての全力を振るうためには草太の協力が必要であり、草太の家に居候となった身である。その性格は傲岸不遜。見た目と裏腹の素行の悪さで、草太からは極潰しの居候扱いである。

「なんだうるさいぞ。いつから人を呼びつけるほど偉くなった？」
「だまれ鳥頭。この部屋を見て何か思うことはないのか！」
「…多少、散らかっているな。」
「多少？これを、お前は、多少というのか？」
「ちっ、どけておけばいいのだろう」

　そういうと床に散らかったものを足で壁に寄せる。ずりずりと何を気にすることなく、ゴミも本も何もかも一緒くただ。そうして壁際に寄せ終えたホーリーエンジェモンは心なしか満足げな表情である。
　あまりの雑な仕草に草太は二の句が継げない。

「フン、これで問題ないな。」
「問題しかねぇよ…。」

　掃除という概念自体が違いすぎた。こいつはゴミ屋敷にでも住んでいたのか？
　草太の常識に当てはまらないのがデジモンというものだが、人型を取っている以上生活様式に差があるとは思えない。つまりは、この羽の生えた阿呆特有の問題なのであろう。思えば初めて家に入れた時にも靴を脱ぐ素振りすらなかった。脱げるものではないらしいが、それでも人の家に入る時に汚れを落とそうという素振りすらなかった。文明を知らない野生児か、生まれついての大貴族でもなければこの無頓着さに説明がつかない。なお、野生児であろうというのが草太の見解である。
　だが、この我が家を野生児の最適環境にするわけにはいかない。文明は維持することに意味がある。たとえ一時の同居であっても郷に入れば郷に従えということだし、まともな掃除を叩き込む必要がある。

　さっさと部屋を出ようと窓に手を掛けるホーリーエンジェモンだが、その前に草太の手が金の髪を引っつかみ部屋に引き戻す。
　文句を言おうとする機先を制してこちらの言い分を叩き込む。

「これを掃除とは言わないんだよ！普段俺が掃除してるのを何だと思ってたんだお前は！
家で暮らす以上は汚れの放置なんざ許さねぇからな！
ゴミが出たらすぐにゴミ箱に捨てろ！読んだ本は本棚にしまえ！
その程度のことすらできないとか言わないだろうな？」

　やつの言動には付き合わず、主張だけをぶつける。できないのかと煽る。このものぐさな大天使を黙らせるにはこれに限る。
　しぶしぶ片付けを始める姿にため息がこぼれる。全く持って、草太からするととんだ厄介者でしかなかった。

***

　そして草太がホーリーエンジェモンに文句があるように、ホーリーエンジェモンにも草太に対して文句があった。

「何度言ったらわかる！米を炊くときは事前に水に浸しておけと言っただろう！見ろ、この痩せた炊きあがりを！本来ならもっとふっくらと炊き上がるはずだった…！！」
「大して変わらないだろ…。まずいわけじゃないんだから黙って食えよ」
「そうはいくか！お前の貧相な舌に合わせた調理では素材の味が死ぬ。まともに米も炊けないような半端ものめ、徹底的に教育してやる！！」

　鼻息荒く料理のさしすせそを言ってみろと草太に詰問していく。当然草太の答えはうろ覚えである。
　みりんはどこに入るんだ？味噌のみはさしすせそに入らんだろうと、ホーリーエンジェモンからすれば信じがたい落第生である。

　この大天使は殊の外食事にうるさい。そのため、こうやって草太が料理した食卓には盛大な文句が溢れかえる。
食べ盛りの少年にありがちなことだが、草太としてはまず必要なのは量である。よって、白いご飯と味の濃いおかずさえあれば大概は満足である。
　対してホーリーエンジェモンは普段の粗暴さはどこへやら、繊細な味付けへのこだわりや盛り付けにまでこだわりを見せる美食家っぷりを見せる。ほうき一つまともに扱えないくせに、包丁の構えかたから鍋の手入れまで妙に知識がある。
　当然調理への口出しも料理人さながらだ。味へのこだわりが薄い草太には全く分からない基準でのケチがつけられる。出汁の取り方がなっていないとか、火が通り過ぎているだの、食事の度に辛辣な評価をするのが常だった（なお、その時の出汁は顆粒出汁だった）。
　挙句調理中の草太に向ってああだこうだと口を出してくる。掃除はまともにやらないくせに、ニンジンの切り方ひとつにもやたらとこだわりがある。

　食えるんだからいいだろうと言うとそれこそ山のような罵声が飛ぶ。今時どこの家で一から出汁を取るというのか。

　なら自分で作れと言いたいところだが、キッチンに収まる体格ではないことは火を見るより明らかだ。ただでさえ3m近い背丈と筋肉質の身体の持ち主だ。更に仰々しい羽根が何枚もある。こればかりは仕方ない。

　ここまでで分かる通り、草太の料理の腕はできるだけ、である。両親が県外に赴任するにあたり、一通り料理は仕込まれてはいたが、大して興味のない料理の腕が上がるはずもない。ホーリーエンジェモンが来るまでは見るからに雑で彩りのない料理が並ぶのが常だった。
　ホーリーエンジェモンが居候となった初日に出した料理について、”これでは餌と変わらんな…”と、心底がっかりした声でつぶやかれている。草太としては料理になっているからいいだろと反論したが、あまりにガチトーンのつぶやきだったため、結構ショックであったのは秘密である。
　ともあれ、そこからはホーリーエンジェモンからの盛大な文句が続き、口を開けば罵声というひどい共同生活がスタートを切ったのだった。なお、料理の彩り問題についてはさすがに思うところがあったのか、ミニトマトが常備されるようになった。

　掃除や料理にお互いケチをつけつつも、お互いの意見にはそれなりに理があるのとは事実である。そのため、多少なりともすり合わせは進む。一切の遠慮がないことは、ある意味では強制的な分からせ合いである。つまり、お互いが初めに危惧したよりはまともな共同生活が形成されつつあった。

＊＊＊

　パンドラモンの捜索については実際のところ、ホーリーエンジェモンと一緒にリアライズしたテイルモンが行っている。
　テイルモンとは草太とも面識があるが、見た目にそぐわぬたおやかな態度が印象的なデジモンだった。こちらもリアルワールドへの影響を抑えるためにと力を抑えているらしい。元々はホーリーエンジェモンと同じく天使型デジモンとのこと。
　かなり疑わしいと草太は思っていたが。ホーリーエンジェモンにとっては先輩にあたる立場だというが、草太から見ればただの猫もどきである。あまり動物が好きではない草太としてはどう接したものか困惑気味である。

　そのテイルモンからは定期的に捜索状況の報告を受けている。その身の軽さを活かして至る所に忍び込んで情報収集しているようだ。時々脱線して噂話に1人で盛り上がったりしている。ホーリーエンジェモンといい、聖なるデジモンとやらも俗まみれである。
　ホーリーエンジェモンはといえば、草太が学校にいる間は自主的に街の見回りをしている。真昼間からパンドラモンが動くかは分からないものの、普段から周囲を確認することで違和感に気づきやすくなるというのがその理由だ。
　こと捜索において草太にできることは多くはないが、それでも何もしないというわけにはいかない。残念ながら情報収集が出来るほど顔が広いわけでもない。サッカーというつながり以外が極めて希薄なことに今更愕然とするレベルである。流石にクラスメイトの名前すら覚えていないのはまずいと危機感を覚えたのが最近なので、基本的に捜索という段階では役立たずの草太であった。
　その為、帰宅後にはホーリーエンジェモンと合流してパトロールに出かけている。元々草太に本来期待されている役割は、ホーリーエンジェモンのお目付け役であり、戦闘時の制限解除――普段

はホーリーエンジェモンの力は制限されている――だからだ。
　特にパンドラモンの活動が活発化するだろう、人の集まる時間帯には可能な限り草太がいた方が都合が良い。
そういう事情から、草太の役割としてはホーリーエンジェモンについてのパトロールが日々の日課となっている。

　力の制限については、デジモンがリアルワールドに与える影響を抑えるための対策だという。
　草太が遭遇したデジモンはまだ少ないが、どのデジモンであっても人にとっては大きな脅威である。レベルとしては低いはずの成長期でさえ、拳銃の比ではない殺傷能力を持っている。実際ホーリーエンジェモンの能力を解放した時の力は人の及ぶところではない。完全体というデジモン全体として上位の存在であり、かつ聖剣エクスキャリバーの持ち主である。最上位である究極体にこそ及ばないものの、邪悪なデジモンに対してはレベル差をも覆す特攻性すらある。
　ただ存在するだけでも聖なる光を見に纏う。力を制限している今でこそ、近所の信心深いおばあさん達に拝まれるだけで済んでいるが、一切の制限を解き放った時にどうなるのか。中身をよく知る草太でさえその神聖さに息を飲むことがある。だから草太としては、力の制限には賛成だった。
　その分ストッパー役である草太には負担がかかるわけだが、仕方のないことでもある。
　ホーリーエンジェモンとの契約はどうしようもない状況ではあったが、草太自身がやると決めたことでもある。自身の役割を放棄するつもりはなかった。
　だが不満もある。この申請と承認というシステム、スマホという最新機器を使っているくせに有効な距離が短い。おおむね学校の校庭程度の範囲である。でなければ申請と承認の通知が届かないのである。Bluetoothかよ、と改善を希望したい草太であった。

　そしてこの申請が草太にとって実に厄介だった。
　この大天使ホーリーエンジェモンは非常に大人げなく、独善的で間違いを認めようとしない頭の固い正義厨であった。その為、空き缶のポイ捨てを見かけたホーリーエンジェモンから申請が来る。
　信号の黄色で止まれず赤信号で進行する車を見れば申請が飛ぶ。
　自転車に乗りながらスマホに夢中な人間を見ても申請が入る。
　人が見ても眉を顰める所業ではあるが、聖剣を抜くのは明らかにやりすぎだ。ましてやヘブンズゲートを開いてどうしようというのか。
　草太はホーリーエンジェモンのお目付役でもある。だからその度に申請却下をするわけだが、納得いかないホーリーエンジェモンから申請連打が来たりする。
　確かに迷惑行為ではあるが、その程度のことで毎度全力を出されても困る。しかしホーリーエンジェモンとしては、
「治安を乱す行為だ。あの阿呆に正義を叩きこむ必要がある。」
といってはばからない。

　大概の場合草太が場を収めることになる。ホーリーエンジェモンは目立つ上に声も大きいので、注意をする前に相手が逃げ出すことも多い。明らかにガタイの良すぎる人間に近づきたがる人間などいない。詰め寄るホーリーエンジェモンから逃げ損ねた相手については、間に草太が入って宥めるというパターンだ。
　実際草太としてもモラルの欠けた人間など庇いたくはないが、ホーリーエンジェモンが人に怪我

をさせるよりはマシである。だからいい警官悪い警官よろしく、ホーリーエンジェモンを宥めつつ注意と反省を促すという流れになる。

「言えば聞いてくれることの方が多いんだから、無駄に威嚇するような真似をするんじゃねぇよ。なんにでもかみつくのはやめろ。」
「言われなければやめられないようなゴミには痛みが必要だろうが。体に教えてやれば忘れることもない。口先だけで物事が進むなどと、お花畑の論理を振りかざすのはやめろ。」

　口を開けば口論、手を出さないのはお互いの指先程度の良識による。それでもパトロール自体は散歩のようなもので、草太とホーリーエンジェモンそれぞれとしても気晴らしにはなっていた。
　ただし、それもホーリーエンジェモンが悪（独断による）を見つけるまでのことだが。
　溢れる正義感を行使したがるホーリーエンジェモンと、無用ないさかいを避けたい草太とでは意識が違いすぎた。
お互いへの文句を流しつつも、パトロールは続いて行った。

＊＊＊

　ところで、草太とホーリーエンジェモンが暮らすこの街は、ざっくり言えば台形の真ん中を川が分断するような形をしている。川を挟んで東側が住宅街、西側が繁華街となっており、さらに東西をまたぐように鉄道が引かれている。
　草太の家はその街のおおむね中央付近西側、川にほど近い高台にあった。
　家のそばには靴屋や本屋がまとまっている地方特有の広い駐車場を持つスーパーがあり、駅から遠いものの住むには便利な立地であった。
　そのほか主要な施設（草太にとってだが）といえば、川を挟んで向かい側の駅近くに高校がある。そのため、草太は毎日川沿いを北上するように高校へと通っている。

　この街をホーリーエンジェモンは毎日見回りしている。長峰家の窓からホーリーエンジェモンが飛び立っていく。まずは空へ舞い上がり、街全体を見まわす。そしてその日重点的にみるべき地域へと降り立っていく。
　ホーリーエンジェモンおよびテイルモンが重視しているのはやはり繁華街となる。パンドラモン自体が人の負の感情を取り込む特性があるため、まず人の多いエリアに潜んでいる可能性が高いという判断である。
　幸いなことにパンドラモンがリアライズした形跡は確認済みであり、即時街の境界を天使連により封鎖（デジモンの出入りを制限した領域とした）ため、この街からは出られない状況にある。実際にパンドラモンがもたらす災いの一つ、ゾンビタトゥーの入れられたデジモンが発生している。間違いなくこの街にいるからこそ、ホーリーエンジェモンとテイルモンは、しらみつぶしに街を捜索している。

　ホーリーエンジェモン単独のパトロールについては、飛べるデジモンならではの方法になる。そのため、草太と一緒では見られないものや場所に脚を伸ばすことにもなる。ビルの上に輝く看板や防災放送用のスピーカー、居心地悪げに煙を吹かす喫煙者の群れ。
　そのどれもがホーリーエンジェモンにとって新鮮であった。だが、ホーリーエンジェモンがとり

わけ気に入ったのはどこにでもあるようなただの公園だった。草太を伴うパトロールコースにも組み込まれており、草太は知らないが、ホーリーエンジェモンが1人の時にはこの公園で過ごすことも多かった。
　ブランコや滑り台、シーソーに半分埋まったタイヤ。平均台とベンチ。静かなのは朝の短い時間だけで、どこかの幼稚園から幼い子供が手押しのワゴンに乗せられてやってくと、とたんに騒がしくなる。
　さすがの大天使も子供が現れるとさっと姿を隠してそばから離れていく。
　ただ時折、ホーリーエンジェモンは静かに子供たちを見ていることがあった。

　一度だけ草太がその姿に問いかけをしたことがある。
「なんかあるのか？」
「いや、問題はない。」
　そういいつつも目線を外すことはなかった。大してホーリーエンジェモンに興味のない草太から見ても、何か思うところがあるのを察せられるほどに。

――パンドラモンの行方は知らず、そして事件のない日々が続いていた。

2．出会い

　そもそも草太とホーリーエンジェモンはなぜ、このように一緒に歩くことになったのか。
　このお互いにとってストレスの溜まる共同生活を説明するためには、しばし時間を巻き戻す必要がある。

　その日は、草太が夢を諦めた日、希望のなくなった日だった。そして、騒がしい毎日の始まりだった。

***

　その日草太はいつになく浮かれていた。
　中学の時に膝を痛めてから、長い間草太の膝を包んでいたサポーターを外していいと許可が出たからだ。前日の診察では医者からのゴーサインに何度もいいのかと確認をして看護師に笑われるほどであった。ドキドキしながら、遮るものが1枚なくなりすぅすぅする膝をさする。たった一枚のサポーターであっても、あるとないとでは大違いだ。膝に触れる学生服に心地よさを覚えながら登校した。
　高揚する気持ちを抑えながらも、その時を待つ。午後イチの授業は体育だ。しかも今の時期はサッカーだ。それがたまらなく楽しみで、それを悟られるのも恥ずかしく感じていつもより仏頂面でいた。待ちに待った体育に向けて体操服に着替えると、剥き出しの膝が見える。よく話すクラスメイトも、初めてサポーターを付けていない草太に納得顔だ。だからそんなに機嫌良かったんだなと、嬉しさが隠しきれていなかったらしい。昔は冷静な司令塔でポーカーフェイスだと言われたこともあるというのに！

　高校のグラウンドに明るい日差しが降り注ぐ。

　地方の高校らしく、校庭はサッカーと野球と陸上競技が同時にできるほど広い。そんなだだっ広い中を、同じ色の体操服に身を包んだ男子生徒たちが塊になって一つのボールを追い回している。ポジションも戦略もあったものではない。ギリギリゴールキーパーだけがポジションを守っているといえる。いつもはもう少し秩序だっているのだが、体育の教師が急用で席を外した先からこれである。

　草太は暴動染みた集団にまじりたくはなかったので、校庭の隅で少しだけボールを蹴ることにした。
　持ってきたボールを地面につく。ボール入れから少しでも綺麗で空気の入っているボールを持ってきた。何年も使われているものばかりなので傷だらけだが、今の草太には輝いて見えた。
　あまり人が来ない校庭の隅なので、ところどころ雑草が生えてきている。男子の野太い叫び声も遠く、校舎からの影でこの辺りだけ少しだけ暗く見えた。

　昔練習の前に行っていたウォーミングアップから始める。身体中を温めるように伸ばしていく。そしてそっとボールに触れる。足の裏を使ってグニグニと、足首の運動を兼ねてボールを回す。丸いボールをさらに丸くするように、コロコロとその場から動かず、足とボールだけを動かす。ひとしきりこねくり回して満足したら、次に壁に向かってのパス練習。蹴るのは久しぶりだからか、狙いが逸れて思ったよりも離れたところにボールが跳ね返っていく。地面の凸凹や雑草に遮られてコースが変わる。その度に追いかけて足元に戻す。ぎこちなかったボールさばきはみるみるこなれていく。
　たわいないボール遊びで、ただ遊ぶのならば十分な程に足はよく動いた。
　どれもが草太にとって馴染んだ感覚であり、すでに懐かしさすら感じられる感覚だった。足に吸い付くようだったボールはすぐに離れていく。ボールの軌道全てを見通せたはずの予測能力は、ボールを受け止めるのにも苦労する始末。
　寝ても覚めてもサッカーのことばかりを考えていた。なのに、あれほど明瞭に感じられたすべてが、どれもこれも致命的にずれて感じられる。
　日陰の中、対して走り回ってもいないのに汗が出てくる。少しずつ、芯から冷えていくような気がしている。

　一度足元にボールを止める。足の裏で触れるボールの感覚を確かめようと、ボールだけを見て足を動かしていく。踵から指先、母指球に土踏まず。ボールに触れる位置を変えていく。なのに、触れているボールの位置がイメージから、ずれる。
　一歩下がってから、ボールを壁に向かって蹴る。校舎の壁に付いている染み。そこに向かって何度もボールを蹴る。一球一球がサイコロを振ったみたいにランダムにブレる。頭の中にあるイメージに、身体が一致しない。
　なにより、ボールを蹴るたびに痛みの恐怖が臓腑をざわめかせた。クラブでの練習試合で起きた接触で、草太は人生で初めて骨身を貫く痛みを感じた。もう治ったはずの傷。消えたはずの痛み。それが再び草太を痛めつける。なんてことのない一蹴りが、ボールを蹴るほどに、痛みを想起させていく。
　痛みはないと分かっていても、もう大丈夫だと考えていても、恐怖が身体を硬くする。人間の体は心を無視して動かすことなどできないのだ。
　もう治っていると強く言い聞かせる。痛みがないのに膝を庇うのをやめられない。それを糺そう

とするせいで、さらにバランスが崩れていく。

　ボールの蹴り初めにあった表情など、とうになく。ただ追い詰められた表情だけが浮かんでいる。

　リフティングが得意だった。今はろくに続けることもできない。
　ワンタッチでのパスに自信があった。今はゆっくり動くボールですらコントロールできない。
　コーナーキックもフリーキックも、いつだって自分が蹴ってきた。セットプレイなら草太の独壇場だった。今ではみっともない姿を晒している。

　理性はだんだんと理解をし始めている。感情は理解を拒む。

　ボールを止めて、それから空いているゴールに向けて蹴り込む。理想のフォームから何もかも外れた、落ちぶれたシュート。痛みを恐れて縮こまる身体に力強さなどかけらもない。
　ボールは緩やかな弧を描き、二度三度と弾んでからゴールに転がっていった。

　その時に草太は思ってしまった。どんなにリハビリが辛くとも、思い浮かべることすら拒絶していたはずの考えを。
――もう、あの頃の感覚は戻らない。もう、戻れないのだと。

　授業の終わりの鐘が聞こえてきた。その後のことは草太はあまり覚えていない。

***

　学校が終わって、後は家に帰るだけ。でも草太には家に帰る気力がなかった。
　部屋にはサッカーボールがおいてある。ユニフォームに、トロフィー。もう戻らないものだ。せめてこの気持ちの置き所が見つかるまでは帰りたくなかった。

　だからだろう、いつもは通らない路地に気まぐれに入った。
　それまで何も耳に入らないくらいぼうっとしていたのに、初めての道だからか妙に気になる音を聞いてしまったからだ。
　何かがぶつかるような低い音が一つと、誰かの悲鳴を。
悲鳴など聞く機会などあるものではない。だから危機感もなく、訝しげに曲がり角を覗いた。
　そしてそこに怪人――牛の頭を持つ巨漢――に襲われる人を見た。

　草太が覗いた路地からは、その巨漢、ミノタルモンの背中が見えた。
　当然草太には気が付いていない。だから草太には君子危うきになんとやら、さっさと逃げることも出来た。
　たとえ着ぐるみであったとしても牛の頭をかぶっているような人間は何を考えているかわからないし、着ぐるみに見えない存在感に危機感を感じているのも事実だった。

　だが、草太はつい、襲われている人の顔を見てしまった。

　どこにでもいそうなサラリーマン。中年の男性で、少し髪が薄い。剃り忘れたのか、それとも伸びるのが早いのか、うっすらとひげが伸びていてだらしなさを感じる。仕事終わりなのだろう、ネクタイは緩められている。
　普通にすれ違ったならば目を留めることすらない、どこまでも普通のサラリーマン。
　存在さえ頭に残らずに過ぎ去っていく、全くかかわりのない人間。

　でもその顔は恐怖に歪んでいた。目尻からは涙がこぼれ、鼻水が垂れている。うずくまるように片腕を抑えながらも、目の前の脅威から目をそらすことすらできないほど、恐怖を顔に映している。

　それを見て、異形の怪人は石をすり潰すような音をたてて笑っている。腕にはうっすら砂が付いている。近くの壁に大きな陥没。先ほどの音はこの陥没ができたときのものだろう。理屈なしにそれができる力の持ち主であることを感じる。人一人を捻りつぶすことだってたやすいはずだ。

　そしてそれがこのサラリーマンに対して向けられている。

　怪人はゆっくりとサラリーマンへ近づいていく。ぶらぶらと鈍く光る左腕を揺らしている。
　下卑た笑いが続く。心底嬉しそうに、人を傷つけようとしている。

――あのサラリーマンは助からない。

　もしあの怪物がただのチンピラ程度だったら割って入ることぐらいはした。警察を呼んでもいいし、サラリーマン一人引きずって逃げることだってできる。
　でもそれは無駄だ。無駄に死者が増えるだけだ。それが分かってしまう。
　ここにいるのは人並みの高校生で、割ってはいれば潰れておしまい。引きずって逃がそうったって少し寿命が延びるだけ。
誰だって自分の命が一番大事だ。だから見捨てることは恥ではないし、ましてや悪になるわけもない。

　だから、そうしたのはただの意地で八つ当たりだった。
サラリーマンのくしゃくしゃの泣き顔が、さっきまでの自分のように思えた。このどうにもできない現実を、どうにかしてやりたかった。

　路地に転がる石と空き缶を静かに拾い、草太は石を牛頭の後頭部へ投げつけた。投げるのは専門ではないが、見事直撃。
　そして振り返った所に空き缶も投げつける。空き缶は右目付近に当たった後、地面に落ちて音をたてる。
　カランカランと路地に響く空き缶の音。振り返った牛頭の目が草太へと焦点を結ぶ。
　どうも牛頭は機嫌を悪くしたらしい。重低音の唸り声。完全にこちらをターゲットにしたようだ。

　視界の隅ではおじさんが呆気にとられて草太を見ている。まだ状況を理解していない顔。でも、もしかしたら助かるかもという希望、そして代わりに殺されるだろう草太への罪悪感が見えた。

　自分でもバカなことをしたという気持ちがあるからこそ、奮い立たせるように軽口をたたく。

「悪いけど、むしゃくしゃしてるんだ。ちょっと付き合ってくれよ。」

　牛頭であっても言葉は通じるらしい。たわいない挑発ではあったが、目の色が変わった。この生意気な人間をつぶしてやる。そういう顔をしている。

　振り返って全力で走る。膝が痛むかもしれない。また歩けなくなるかもしれない。草太は別にそれでもかまわなかった。ボールを蹴れないのならば、どちらであっても大差ない。むしゃくしゃしている、というよりは完全に自棄になっていた。

　路地を走って逃げる。後ろからはドスドスと響く足音。見なくても分かる、怒りの追撃だ。
　幸いにもあまり足は速くないようで、追いつかれる気配はない。左腕だけが金属でおおわれているのだ、まともにバランスを取って走れるわけがない。その読みが当たった形だ。
しかし、どこまで逃げればいいかはわからない。
　あの怪物を誰が止められるのか。お巡りさんには悪いが、拳銃程度で止められるイメージがわかない。
　自衛隊でも読んでもらうべきか。ただ少なくとも、少なくともあのサラリーマンがこの場を離れるまでは走らなければならない。

　そう考える草太だったが、ミノタルモンからするとお楽しみの時間を邪魔した挙句、不愉快な思いをさせてきたひ弱な人間である。
　この手で八つ裂きにする。足を潰し、腕をちぎる。泣き叫ぶ声を聞くのが待ち遠しい。
　どうせ疲れてすぐに動けなくなる。だからこの追いかけっこも愉快なものだ。
　そう考えるミノタルモンの首元には黒い刺青のような染みが急激に広がりつつあった。

　逃げても逃げても引き離せない。草太も当然気が付いていた。あの怪人はこちらが疲れて動けなくなるのを待っている。まだ体力は残っているし、幸いにも他の人が巻き込まれるような状況にはなっていない。だからどうにか逃げられる間に対策を考えるしかない。

　そう考える草太であったが、逃走劇の終わりは突然である。命がかかった追いかけっこはたやすく人の体力と集中力を削り取る。どちらもなければ注意力だって散漫になる。つまり、街路樹の根っこに突き上げられた道路に躓き、草太は転倒した。

　ごろごろと勢いそのままに転がり、それでも必死に体を起こす。
　ここぞとばかりに距離を詰めてきたミノタルモンは、三日月のように目を細めて口を歪める。
　見せびらかすように鋼の左手を揺らす。
　ゆっくりと近づいてくる。なんと嬉しそうな表情であることか。
　絶対的な強者が弱者を嬲る。幼子が虫の足をちぎるように、この怪物は自分を痛め付け、そして

殺す。

　これは楽に死ねないな。荒い息遣いのままそう思う。

　草太まであと一歩の位置でミノタルモンは足を止める。あえてゆっくりと鋼の左腕を掲げる。
　水の中に顔を突っ込んだようにごぼごぼとした聞き取りにくい声が発せられる。

「オマエ、グシャグシャ！！」

　その左腕が振り下ろされる寸前、白の影がミノタルモンを横から吹き飛ばしていった。
　哀れ吹き飛ばされたミノタルモンは民家の生け垣に突っ込んでいく。

　死の象徴と化した、暴力の塊。それが空のダンボールのように容易く吹き飛ばされていった。驚くべき状況ではあるが、さっさと逃げ出すべき状況にほかならず、せめて怪人の状態を確認することが必要だとはわかっていた。だが、怪人のことなど忘れたかのように、突如現れた”それ”から草太は目を離せなかった。

　地上から1m程度の高さに、空気を踏み固めるように立っている。
　神々しいほどの光を放つ白い翼。体を取り巻く金の帯がたなびく。しなやかでありながら力強さを感じさせる厚みのある肉体と、目元から頭を覆う仮面。

　ちょうどミノタルモンがいた場所にふわりと降り立つ姿は紛れもなく天使そのものだった。

　その天使が口を開く。

「所詮は畜生だな。おい、草に塗れてさぞ満足だろう？うまいか草は？」

　耳を疑う罵声が出る。透き通るような声、というので間違いはない。所作も美しく、上品ささえ感じさせる。だが、その口からは出る言葉のことごとくが、よくてチンピラだった。
　ミノタルモンは角を引っ掛けたのか、なかなか生け垣から出てこられない。吹き飛ばされ、一方的に浴びせられる罵声への怒りで頭が回っていないようにも見える。

　唖然とする草太へ天使が向き直る。目元はその仮面で見えないが、草太をじっと観察していることが分かった。

「……いいだろう。私は、貴様を選択しよう。」

　草太には訳が分からなかった。命の危機に天使の出現。挙句自分を選ぶという。

「おい、こいつに決めたぞ。テイルモン、出てきて証人になれ。」

　何をと問いただす前に、猫のようなねずみのような不可思議な生き物がてててと寄ってくる。

　そして見た目にそぐわない森厳な声で天使を嗜める。

「あなたが決めるだけでは契約はなりませんよ、ホーリーエンジェモン。大事なのはお互いの合意です。説明したでしょう？」
そして草太へ向き直り、ペコリと一礼してから話し出す。
「突然のことにさぞ驚かれているとは思いますが、まずは簡単に説明をさせてください。」

　この猫もどきによれば、草太は何らかの理由でこの天使（ホーリーエンジェモンというらしい）と契約することを求められている…？
　困惑する草太だが、お構いなしに話が続く。

「いま、この街は危険にさらされています。
あのミノタルモンのように、凶暴化させられたデジモンたちがこの街に送り込まれようとしています。
その危険性は分かりますね？」

　つい１分前には頭をかち割られるところだった以上、疑いはない。頷く草太にテイルモンは続ける。

「結構。ではどうするのか。
その答えが私たち、いえ、彼――ホーリーエンジェモンです。
この世界に送り込まれたデジモンたちを元のデジタルワールドへ送還すること。それが私たちの使命です。そしてそれを成すのがホーリーエンジェモンとなります。私はその補助ですね。
送り込まれたデジモンたちは、何者かによって強制的に凶暴化されています。あのミノタルモンの首元に、黒い刺青のような染みが見えますか？あれこそがデジモンを凶暴化させている原因です。
そしてこの凶暴化させる染み――ゾンビタトゥーと呼んでいますが、周囲にも感染する悪質なものです。ですから、速やかにあのタトゥーを浄化することが重要となるわけですね。」

　ここまではよろしいか？目で問われる。草太としても危険な状況は理解しており、今現在としても続いていることもわかっている。

「私たちがあなたにお願いしたい契約というのは、このホーリーエンジェモンの力を開放するための権限を持ってもらいたいということになります。
見ての通りデジモンというのはこの世界の存在と比べて、極めて異質な力を持っています。特にホーリーエンジェモンはその中でも上位の存在――完全体ですから、この世界に与える影響というものがどれだけのものになるのかが分かりません。
少しでも影響を抑えるために、戦闘時以外にはできる限り力を押さえておきたいわけです。
そしてもう一つ。この騒動には人間の関与が疑われているのです。ですから、この世界、リアルワールド側の協力が必要になると私たちは考えています。
それゆえに、この力の開放をする役目を、ホーリーエンジェモンが選んだ、あなたにお願いしたいのです。
引き受けていただけないでしょうか？」

　疑問はある。なぜ自分なのか。世界への影響とは何なのか。騒動の原因が人間だったとして、自分に何ができるというのか。草太の頭の中を疑問符が回る。
　しかし落ち着いて考える時間は誰からも与えられない。ミノタルモンがもがく音がどんどん大きくなっている。飛び出てくるまでの猶予はほとんどない。

　テイルモンの説明は我関せずとばかりによそを向いていたホーリーエンジェモンが、突然草太へと向き直り手を出してくる。

「デバイスを出せ。」
「ホーリーエンジェモン、今はスマホと言うのですよ？」
「…スマホを出せ。そいつを介して私と貴様との間にパスを繋ぐ。
私が必要と判断したときには、スマホに制限解除の申請が行く。貴様はそれを承認すればいい。
そこの牛頭でも分かる簡単な話だ。」

　牛頭と呼ばれたミノタルモンだが、無理やりに頭を植木から引き抜こうと暴れ続けている。手入れの行き届いていないがゆえに如何なく絡みついていた生垣だが、ミノタルモンのパワーに次第に引きちぎられ続けている。あれが再び暴れだしたら、草太どころかこの天使と猫であっても無事である保証はない。

　鳩尾に手のひらを当てる。静かに深く、息を全て吐き出す。細く鋭く息を吸う。
　いやがおうにも決断しなければならない。いつだって大事な決断は突然に発生するし、ゆっくり待ってくれる余裕があるわけでない。
　あのサラリーマンの顔が浮かぶ。誰だって死にたくはない。
　チラリと膝をみる。どれだけ自暴自棄になっていたとしても、死んでしまいたいわけではないのだ。

　ポケットからスマホを取り出す。手が震えないように力を込めて、スマホをホーリーエンジェモンへ向ける。
　ホーリーエンジェモンがスマホの画面に一度指を触れる。するとスマホが震える。画面を見れば、通知が表示されている。

”通知：管理者登録の実行について”

　なんとなく、草太にはこれが自分の運命を決める決断なのだろうという自覚があった。

　何事もなく平穏に暮らしていく自分。わけのわからない戦いに巻き込まれていく自分。今、その分水嶺に立っている。
　だが、もしも本当にこれが運命の分かれ道であったとしても。草太が本当に欲しかった選択肢はすでにない。
　だから草太は迷わなかった。

　通知を開き、管理者登録を実施する。名前の入力欄に手書きで名前を書く。決定ボタンをタップすれば、味気もなくシンプルな表示で完了のダイアログが表示された。

「長峰草太か。」

　名乗ってはいない。だからこの通知が文字通り自分の名前も知らせたのだろう。
　わけのわからない状況は続いている。だが、目の前のこの天使が自分の命綱であることはわかっている。
　ぐっと腹に力を込める。

「お前はホーリーエンジェモン、だな。」

　ブルブルと通知が連続する。
”新しい通知：管理者として登録されました”
”新しい通知 ホーリーエンジェモンとのパスが生成されました”

「いいだろう、貴様が私の契約者【パートナー】だ。
申請を飛ばしたぞ？まずは力の開放を承認しろ。」

　画面には早くも新しい申請が届いている。
”新しい通知：［最優先］戦闘申請、力の解放申請が届いています。承認しますか？”

　顔を上げる。ミノタルモンがようやく生け垣から頭を抜いて、より興奮している。すでに言葉もめちゃくちゃで口角から泡が吹き出ている。正気ではない。凶暴化させられている。その言葉が真に迫る。
　ホーリーエンジェモンがチラと草太を見た。

”yes”、”no”
　スマホにはそっけなく２つの単語が並んでいる。お前が決めろと、決めるのはお前だと、そう突きつけてくる。

“yes“を押す。

　画面には通知アプリの画面だけが映っている。問題なく承認されたのかを確認すべく草太は顔を上げる。
　草太の目前では、ホーリーエンジェモンが8枚の翼を広げている。翼の一枚一枚が力ある神秘の光を宿している。輝きは辺りを照らし、飛び立つホーリーエンジェモンに残光を残す。ただの一息でビルなど飛び越えるほどの中天へ、心地よい羽ばたきの音を響かせる。空にあるその姿は紛う事なき大天使の存在感！
　だが神聖なる姿と裏腹に、響き渡る高慢さを隠さない高笑い。

「やはり空はいい！リアルワールドというのもなかなか乙なものだな！

だが、お前はいらないな、ミノタルモン。大人しくするなら優しく首を切ってやるが、どうだ？」

　出てくる言葉にも神聖さは欠片もない。しいて言えば蛮族か。出会って間もない草太ですら薄っすら感じるほど、この大天使は異端児である。
　当然ミノタルモンが大人しくするはずもない。ホーリーエンジェモンに向かって威嚇を繰り返す。

「ははは、もう言葉も忘れたか！惨めなものだな！」

　微塵も慈悲を感じさせない言葉を放つと、ホーリーエンジェモンは瞬時にミノタルモンへ接近し、輝く拳を叩きつけた。一撃二撃と重い音が響く。ミノタルモンも負けてはいない。痛みを感じていないかのように即時反撃を繰り出す。しかしホーリーエンジェモンの翼は伊達ではない。ミノタルモンの鉄塊の如き左腕を紙一重で躱し、風を巻き起こしながらも軽やかに身を翻す。ふわりとしていながらも素早く動く翼は変幻自在に風を打っている。しなやかな翼は、ミノタルモンの一撃を防ぐことさえしてのける。
　そして繰り返し何度も、その拳をミノタルモンへ加えていく。
　ミノタルモンがホーリーエンジェモンに向き直るより速く、それでいて的確に弱みをつく。明らかに格が違う。見る間に弱っていくミノタルモンだが、それでもその凶暴性は衰える様を見せない。

「テイルモン、あいつの体、黒い染みがだんだん小さくなってないか…？」
「よく気が付きましたね。あれがデジモンを強制的に凶暴化させる悪意の塊、ゾンビタトゥーです。私たち天使型デジモンには、悪を浄化するための聖なる力が備わっています。あのように聖なる力を注ぎ込むことで、タトゥーの力を弱めているんです。
…本当はミノタルモンはおとなしいデジモンです。あんな風に暴れたりはしません。なのに、自分の意志すら捻じ曲げられて、無理やり凶暴化されているんです。だから、少しでも早く解放するために、ああして聖なる力を注ぎ込んでいるんです。」

　一方的に拳を振り上げるその姿は子供が壊れないおもちゃを見つけたときのそれに近い。

「…暴力に酔ってるようにしか見えないけど。」
　ぷいと顔を背け知らんぷり。
　この猫もどきは見た目よりやり手だ。

　そんなことを話していると、草太のスマホに新たな通知が届く。

”エクスキャリバーの使用申請が届いています。承認しますか？”

　気が付けばホーリーエンジェモンはミノタルモンから距離を取って、草太を見ている。さっさと承認しろということだろう。
　浄化が必要なのは間違いないし、戦いの素人が口を出す話でもない。
　だから草太はそのまま承認をタップした。

　ニヤリと嬉しげに口を歪めるホーリーエンジェモン。その右腕に静謐な青い光が集まっていく。暖かさよりも、冷たさを感じさせる光。その光は右腕の手甲を介して青白い剣を成す。確かめるように素振りを二度三度と振るう。

　ふわりと浮き上がり、そして力強い踏み込みと共に剣が振るわれ、ミノタルモンを縦に両断した。

　確かにその剣――聖剣エクスキャリバー――はミノタルモンの正中線を通り抜けていた。しかし、その体は両断される代わりに、大量の黒い靄を吹き出した。悪だけを断つのが聖剣たる由来でもある。
　しかしゾンビタトゥーに込められた悪意が黒い靄として噴出し広がっていく。そして靄はそれ自体に意思があるようにうねうねと動き始める。崩れ落ちるミノタルモンを尻目に、新たな戦いが始まった。
　靄は鞭のような形状となり、辺り一帯を打ち据える。さすがのホーリーエンジェモンも薄気味悪い靄相手には距離を取っている。

「おい草太！聞こえているな！いまからヘブンズゲートを開く。承認したらすぐに何かに掴まれ！無様に吸い込まれたとしても私は知らんぞ！」

　ホーリーエンジェモンの怒鳴り声と新たな通知。
“新しい通知：ヘブンズゲートの使用申請が届いています。承認しますか“

　靄が打ち据える範囲がだんだん広がっている。明らかな危機が増大していることに内心恐怖を覚える。
　草太には何が何やらわからない。だが、あの高慢な天使に守られた事実があり、悪意を撒き散らす相手を打ち据えようとしている。そしてそれの力の鍵を自分が握っている。
　それが分かるから、yesを押す。
　テイルモンが慌てながら草太の裾を引く。こちらと促されるままに近くの電信柱の影に身を隠す。テイルモンは図々しくも草太の腹に抱きついている。

「あいつ、何する気なんだ？　こんなに慌てないといけないことか？」
「ええ、慌てるべきタイミングですよ。あなたが承認し、あの子が使おうとしているのは、ヘブンズゲートという門です。本来はどことも知れない亜空間へ何もかも飛ばしてしまう技です。」
「待て、じゃああのミノタルモンはどうなる！　操られてるんだろう？！　あいつもまとめてそんな亜空間に飛ばしていいのかよ！」
「草太さん、落ち着いてください。本来ならと私は言いましたよ。」
「…なら今はどこに飛ばされることになってる？」
「今あの子が開くゲートは、デジタルワールドの中に私たち天使連が作り出した空間へと送られることになります。空間全域に最高位の聖なる力が充満された空間です。そこでミノタルモンとゾンビタトゥーを完全に浄化していくことになります。」
「要は病院送りみたいなもの？」

「というよりは、隔離施設ですね。靄を完全に浄化して、それから病院送りという流れになります。」
「なら別にこんな慌てて避難する必要ないんじゃないか？」
「では、わかりやすく例えで言いますね。送られる先は深海で、靄を潰した後にゆっくり浅瀬に引き上げます。これで慌てる理由がわかりますね？」
「わかった。しっかり掴まってろ。」

　胡乱な話をしている間にホーリーエンジェモンの準備は終わっていた。右腕をかざし、エクスキャリバー内に存在するホーリーリングに力を込める。何もない空間へ輝く光と共に円型の門が現れる。
　静かに開かれるヘブンズゲートだったが、その反応は劇的だった。
　まるでブラックホールが現れたかのように何もかも吸い込む勢いがある。
　門の向きは草太達とは反対向きに開かれているにも関わらず、電柱にしがみつかなければ引きずれらるだろうと感じる、強大な引力があった。当然門の正面にいる靄とミノタルモンはひとたまりもない。抗うことすらできず静かに吸い込まれていく。

　そして静かに門が閉じられる。あれほどの引力ではあったが、引き込まれたのは靄とミノタルモンだけ。落ち葉一つ動かすことなく、それだけが消えていた。

　これで終わりかと一息つく草太だったが、ホーリーエンジェモンはまだいうべきことがあるらしい。

「パンドラモン！そしてその協力者よ！どうせ聞こえているのだろう？
この私がお前達を天国に導いてやる！必ず見つけ出して二度と出られないよう叩き込んでやる！感謝しろ！！
せいぜい残り短い現世を怯えて過ごすのだな！」

　最後に高笑いを放つと、静かに門は消えていった。
　そしてそれが戦いの終わりだった。

***

　実際のところ、それからが大変だった。なにせこのチンピラめいた大天使の面倒を見る羽目になったからだ。

「よし、お前の家に案内しろ。」
「は、なんで？助けてくれたのには礼を言うけど、うちに来る意味が分からん！」

　一気に険悪になる空気に慌ててテイルモンが間に入る。

「草太さん、あなたとホーリーエンジェモンのパスはあまり遠くだと届かないんです。それに契約者となったあなたを敵が狙う可能性もあります。ですから、なるべく普段から近くで過ごしてもら

うと言うことでお願いします。」
「ふざけんな！聞いてないぞ！」

***

　結局草太が折れる形で共同生活が始まったのだった。
　尊大な口調で部屋の狭さや料理にダメ出ししてくるホーリーエンジェモン。掃除もできないダメ天使に無理やりでも教え込む草太。お互いがお互いに対して一切の気遣いをしないこと。自然と発生したこのルールだけが、この奇妙な共同生活を支えていた。

「お前居候になるんだからもっと家主に気を遣えよ。ていうか整頓くらい覚えろ。」
「貴様ごときになぜ私がへりくだらねばならん？むしろ天使を家に招けた幸運に感謝すべきだな。」
「は？食って寝るしかできない極潰しが偉そうな口きくじゃないか。」
「は？あおびょうたんが口だけは一丁前か？」

　影から二人を見守るテイルモン。さすがにペットは不可だったのだ。

「あの子たちに任せて大丈夫かしら…。」

草太とホーリーエンジェモン　後編

3.　大喧嘩

　ホーリーエンジェモンが住み着いてからというもの、草太の生活に大きな変化が現れた…というわけでもない。
　もともと草太は平日は学校に通い、家に帰ってからはリハビリがてらのウォーキングをするという生活だった。
　両親は県外へ赴任中なので自炊や掃除洗濯を行い、時々買い物に出かける。そういった繰り返しにホーリーエンジェモンが加わったところで生活パターンに大きな違いがなかったというわけである。
　ウォーキングがパトロールという名称に変わったのがせいぜいである。

　が、細かい部分で言うなら料理への要求や部屋の片付けという一人が二人になったことへの変更は当然あった。
　お互いがお互いを気遣い無用とみなしているため、喧嘩しない日がないレベルでいさかいを起こしていたが、それはお互いの妥協点の譲り合い（主に諦め）で決着がついていった。
　例えば料理は草太に時間のある夕ご飯だけはしっかり作る。朝や平日昼は適当な作り置きでホーリーエンジェモンが我慢する。掃除はできる限り自分のものは自分で片付けること。また、ホーリーエンジェモン用の拾ってきたものを置いていいスペースを設けることで解決した。要は子供部屋である。

どうもデジタルワールドにないものに興味がわいたらしく、草太からするとガラクタにしか見えないものを集めるという奇行（本人は趣味と言う）を始めたのだ。ぼろぼろの釣り竿、祭りのボンボン、松ぼっくりや紙飛行機に紙でできたメダル。どこから集めてきたかも定かではないが、たまに配置が変わっているので本人なりのこだわりがあるようだ。

ともあれ、お互いが特に生活でストレスを感じる部分にめどがついたことで、比較的穏やかな共同生活になりつつあった。

実際のところ、パンドラモン捜索自体は難航していたが、暴れるデジモン（タトゥー持ち）への対処と連携は思いのほか上手くいっていたことが大きい。さすがに現れるのはせいぜい成長期や成熟期でも比較的小さいデジモンが多かったということもあり、さっさとヘブンズゲートで送還できてしまっていた。むろん危険が少ないに越したことはないし、タトゥーから染み出る靄の凶悪さに変わりはない。が、あれほど煽られて共同生活までする羽目になった割には、上手くいっているというのが草太の感想だった。

***

日常生活としてパターンが定まり、関係性が落ち着いた。だからこそ、踏み込んでしまうこともある。

基本的にパンドラモンやゾンビタトゥー付きのデジモンの調査そのものについてはテイルモンが受け持ち、草太が積極的にかかわることはない。よって、草太の活動としては、ホーリーエンジェモンとのパトロールが主になる。
タトゥー持ちの出現についてはテイルモンの能力である程度地域の絞り込みができるということで、早期対処ができている。
それ故に、次の方針についてもめることになった。

ホーリーエンジェモンとしては捜索範囲をより広げたいと考えていたが、広げたところで戦闘に入れなければ意味がない。いかに完全体であるとはいえ力が制限されている以上は強めの成熟期程度の力しか発揮できない。そのため捜索時には草太の同行が必要になる。
しかしながら草太としては、身近なエリアの安全性を確保したいと考える。この街は草太の地元である。今でこそ疎遠になってはいるが、多くの友人が住むエリアだ。そのため、草太の方針としては地元重視となる。
どちらが正しいわけでも間違っているわけでもない、平行線をたどる意見の違いである。話に決着が着くわけもなく、ここ数日は二人の間の空気も関係性もぴりつくことになった。

ホーリーエンジェモンは共同生活を重ねた今になっても草太をつかみ損ねている。
普段の草太には能動的な意欲が感じられない。淡々と日々をこなし、情熱を向けるようなものがない。料理をしているときも、掃除をしているときも、そこにかける意志は希薄だ。
タトゥー持ちとの戦闘では暴走するデジモンの行動を的確に予想することがある。そういう時にホーリーエンジェモンへかける支持は明確で適切であった（そこが癪に障る部分でもある）。
意志の弱い人間だとは思わない。だが、自身の才覚をまともに振るう気がないように見えてい

る。時々物憂げにしている草太には何かしらの事情がある。ただ、それが何なのかはホーリーエンジェモンにはわからなかった。

　力がないから虐げられる。力あるものは弱者を顧みない。だから力が必要だった。
　セラフィモンが自分を見出したのは、生きるためにあがき続けた生命力――これも力だ――に期待を込めたからだと知っている。だからホーリーエンジェモンは自らのために正義という力を求め続けた。だから振るうべき力を放り出すような草太の無気力さはいらだちしか生まなかった。
　初めてリアライズしたあの時、草太がサラリーマンを助けた時の輝きに間違いはなかった。
　ホーリーエンジェモンから見れば死を待つだけの弱者を、同じ弱者でありながら見事に救って見せた。
　もしホーリーエンジェモンが行かなければ、草太自身が殺されて終わりだったはずだ。だが、それでもあのサラリーマンにかけられた死は払われた。間違いなく救われたものがいた。
　その事実は、本人にも気が付かない心の奥で、ホーリーエンジェモンの心を揺らした。
　だからホーリーエンジェモンは草太を契約者【パートナー】として選んだ。

――ホーリーエンジェモンはその理由が知りたかったのだ。

　だというのにこの体たらく。パンドラモン捜索のために行動範囲を広げたい。地元の安全を固めたい草太との方針の違い。むろん意見の違いによる衝突を起因とするフラストレーションはあった。だが、真にホーリーエンジェモンをいら立たせていたのは、草太のその無気力さだった。

　普段は立ち入ることのない草太の部屋を開ける。当然部屋の主がいぶかし気にホーリーエンジェモンに目線をやる。
　6畳ほどの洋室だ。南向きの日当たりのいい窓際にはベッドと箪笥が並ぶ。壁際には木製でがっしりとしたつくりの机が置かれている。草太はといえば、その机に向かって作業をしていたようだ。
　足を踏み入れる。

「なんだ珍しい。なにか用か？」

　問いかけの答えを待つまでもなく視線を机に戻し、書き物を再開している。ホーリーエンジェモンの様子を気に掛けるそぶりもない。
だからホーリーエンジェモンも全く気にせずに箪笥に近づいた。そこには埃をかぶったトロフィーが並んでいる。
　写真立てには同じ服装の少年が並んで、泥だらけの顔に笑顔を浮かべている。当然草太の姿もそこにある。
　今より幼く、だが力強い笑顔だ。トロフィーは大小いくつか。金色がくすんで輝きもない。それでも栄光の証として存在している。これらの栄誉を掴み取ったのが草太であると、今の淀んだ姿からは想像できない。サッカーという競技を草太はしていたらしい。サッカーとやらが何かをホーリーエンジェモンは知らないが、トロフィーはその時のもので、それが並べられる程度には実力があったのだろう。
　ふと部屋を見渡す。写真にも、トロフィーにもボールがある。だが、この部屋には見当たらな

い。と、隙間に目が留まる。箪笥とベッドの間には、黒と白のボールが転がっている。
　空気が抜けてへこみが目立つ。サッカーボール、ホーリーエンジェモンにもその程度の知識はある。つまり、草太はサッカーを辞めたと、そういうことなのだろう。

　できることをやらない。それは”力を持つ者の傲慢”であるとホーリーエンジェモンは考える。
　ホーリーエンジェモンの価値観に従えば、力は正義であり、身を守るための生存権に等しい。だからホーリーエンジェモンは理由を問うことはしない。
　やめざるを得ない理由など死以外にないはずだからだ。力を放棄する理由に正当なものなどない。そうでなければ生きていけないのがデジタルワールドの理である。

　気にしないといえ、背後でごそごそと物色されていい気分のわけもない。
　草太が振り返ると、ちょうどへこんだサッカーボールが持ち上げられたところであった。

　手入れのされていない、埃にまみれてへこんだサッカーボール。普通のボールより一回り小さい、5歳の草太が初めて買ってもらったサッカーボールだ。
　ホーリーエンジェモンに片手でつかまれて、まるで食べられた後のスイカの皮みたいに平たく見える。かつての自分の宝物。それが埃にまみれて潰れている。

***

　――サッカーを諦めた日のことを、今でも夢に見る。
　ボールをいくら蹴っても狙った所にいかない夢だ。ボールを蹴るたびに膝が捻れて、ついにはボールにかすりもしなくなる夢だ。焦る思いとは裏腹に、膝から下がどんどん伸びていって、しまいには紐みたいに伸び切って力すら入らなくなる。
　夢の中の草太は、もう蹴る意味がないなと動かなくなる。すると幼い草太が現れて言うのだ。
　”サッカー選手になるだろう？”と。
　草太はその目を直視することができない。ただ黙って立ち尽くす。そうして目を覚ます。

***

　だから、棚から落ちて目の届かないところに転がったボールを、草太はそのままにしていた。
　捨てることもできず、再び手に取ることもできない。諦めた未練がボールを通して自らを苛む。かつて草太の胸を熱く焦がしていた夢の象徴。

　誰しもが触れられたくない痛み、それを無造作に放り投げてホーリーエンジェモンがあげつらう。

「ずいぶん汚れた球だな。私物の管理もできないのか。普段私に偉そうに言っておきながらこれではな。」

　言い終わる前にボールを奪い取られる。

「人の、人のものに勝手に触れるなって、教わらなかったのか…？」
「…それがそんなに大事か。言っておくが、それはもうゴミだ。手入れをされずに放っておかれたものはな、ゴミというのだ。」
「お前に何が分かるッ！」
「知らんなぁ。貴様がゴミにしたもののことなど。」

　わざとらしく、ゆっくりと部屋を見まわす。壁に飾られたメダルやトロフィー、写真が埃を被っている。

「できることを放り出してずいぶんいい身分だな。そのくせ言い訳がましく見えないところに隠して一安心か。
それではただ生きているのと変わらんな。貴様は、どうせ少しの挫折を大げさに傷ついたと喚いて投げ出したのだろう？で、まともに向き合うのが怖くなったと？ ああそうだな、どんな言い訳で辞めることにしたのか、私が聞いてやろうじゃないか。」

「ッ……！ 」

　怒りに我を忘れるなどというが、それは嘘だな。あまりの怒りにそんなことすら考える余裕があった。
　激情は静かに溢れ、怒りのままに言うべきではない言葉を選ぶ。

「……お前、本当に人じゃないんだな。」

　怒りを目に残したまま、一呼吸の後に草太がつぶやく。

「何を言っている？私こそが正義の象徴、聖なるものの導、大天使だ。今更だろうが。」
「笑わせるなよ。何が天使だ。何が正義だ。お前の正義の薄っぺらさには本当に嫌気がさす。気づいてるんだろ？
お前の言葉で喜んだ奴がいるか？お前の言う正義を正しいって言うやつがいたか？
いないよな。どうせ、今までもいなかったろ？
そりゃそうだよな。人の気持ちもわからない、押し付けがましい独りよがりでしかないもんな。
…お前なんかが、自己満足の正義とやらで口出ししてるんじゃねぇよ！！」
「薄っぺらいだと…？私の正義を、貴様が否定するなっ！！」

　お互いの傷をえぐり合う言葉を投げつける。一度タガが外れたなら、あとは燃え尽きるまで止まることなどない。

　本当に契約者が誰でもいいのであれば、その正義に従わない相手を選ぶことはなかった。
　その志がただの自己満足であったなら、その戦いに手を貸すこともなかった。

　つまるところ、どんなにいさかいが絶えなかったとしても、心根が映すものがある。互いの心を支えるものを信じていた。だからこそ、本当に言われたくない言葉が傷を作る。

「出ていけ！もう顔を見せるな！」
「ああ、そうさせて貰う！せいぜい安物の悲劇に酔ってるがいい！」

　感情の赴くままに叩きつけあった言葉の終わりは決別である。
　窓から飛び立つホーリーエンジェモンは、普段の警戒心もかなぐり捨てて一直線に離れていく。
　いらだちに強く机をたたく草太。弱音を押し殺すように歯を食いしばる。

　ささやかながらにつながっていた信頼関係は、このようにして断ち切られた。

4.不穏な空気

　影が深くなる夕暮れ、雑居ビルの屋上に人影が一つ。その人影が空に手をかざして大きく円を描く。人ではあるが、人間の動きではない。人の持つ揺らぎがまるでない見られない、機械のような動きで腕が振るわれる。
　腕の動きに呼応するように空に光の線が浮かぶ。円の内側は黒く腐り落ちるかのようにボロボロと崩れていく。まるで空に落とし穴が開いたかのよう。次々と空に穴が生み出される。
そしてその落とし穴からは、巨大な毒虫が顕現する。
　片手に乗せられた小箱が嬉し気に震える。

　現れた毒虫――フライモンが次々と開く穴から現れる。フライモンを呼び出した穴はあっという間に塞がれていく。

　そして片手の小箱――パンドラモンが、わずかに開く。フライモンの一群に向けて、爪の先ほどの針が射出される。針はフライモンたちの身体に吸い込まれ、刺さった場所に薄っすらと黒い染みを作り出した。

　ケラケラとパンドラモンは笑う。傍らの人影、少女はまるでマネキンのように身じろぎもしない。ただ首元から黒いタトゥーが覗いている。

　そしてパンドラモンが笑い止むと、パンドラモンの開いた隙間から靄が溢れ出して二人を包んでいく。靄が薄れたあとに残るのは、デジタルワールドから呼び出され、災いを植え付けられたフライモンの一群だけだった。

***

　突如空に開いた穴。気がついた人から、違和感が共有されていく。そして現れた巨大な毒虫をあっけにとられながら見上げている。いくつもの影が地上に影を落とす。
　人は今が続くことを無自覚に信じている。でも現実はそうではない。まだ、彼らは気が付いていない。デジモンという存在が暴れだしたときの脅威を。その身の内に自分たちがいることに。

　フライモンに打ち込まれた黒い染み”ゾンビタトゥー”は暴力性を増幅させる。それは誰に向けら

れるものか。当然より弱い者へ。つまり、誰もが死の境にいるということを。

　フライモンが羽ばたき始める。一匹がすぐに二匹に。三匹四匹とその場のフライモン全てから、歪んだ不協和音が撒き散らされる。
　ここに至って危機感を覚え始めたのではもう遅い。

　”フライモン！成熟期の昆虫型デジモン！必殺技はしっぽの毒針を飛ばすデッドリースティング！”

　耳障りな高周波をたてながら高速で飛び回るフライモンの群れ。時折ビルや電線にぶつかりながらも、あたりを把握するように、少しずつ飛び回る範囲を広げていく。
　行動範囲が広がるにつれて動きが大胆に変わっていく。紫の羽がだんだんとぶれるように速さを増していく。ハウリングノイズが響き渡り、フライモンから離れようとした人間たちが耳を抑えてうずくまる。
　強烈なノイズに平衡感覚を失い立ち上がることができない。明確な脅威があるというのに、逃げることすら出来ない。恐怖におびえる声すら聞き苦しいノイズにつぶされている。

　そして連続的に、断続的に羽ばたきでノイズを撒き散らかす。雑音、無音、雑音が繰り返し響く。次第にハウリングノイズが広がっていく。そしてノイズが大きくなるほどに黒い染み―ゾンビタトゥーがフライモンの体を覆っていき、次第に黒い靄として拡散されていく。

***

　うずくまる人を靄が包む。呼吸に合わせて体内に入り込んでいく。震える人々にはそれに気づく余裕すらない。
　一面に深まる靄は濃度を増していき、夜に沈んだよりも深く、黒く染められていく。

　耳がおかしくなるほどの不協和音に真っ黒な視界。動くことすらままならず、恐怖は膨れ上がっていく。
　なぜこの場に居合わせてしまったのかという嘆き。その人の負の感情が靄にしみこんでいく。

　怖いならば、誰かに押し付けてしまえばいい。恐怖を塗りつぶす狂気を誘うささやき。震えているから恐ろしいのだ。力を振るえば怖くなどなくなる。敵はどこにでもいるぞ。さあその拳を柔らかい肉に叩きつけろ。
　靄を通してパンドラモンはささやく。
　靄から受け取る負の感情を受け、パンドラモンは静かに笑う。

　そんな狂気を振りまく街へ、ただ一人飛び込もうとする少年がいた。

***

　フライモンに見つかれば命の保証はない。靄に包まれてもアウト。

　だから物陰を選んで静かに、そして速やかに。眼差しは強く、何かを探すようにあたりを確認している。

　突然部屋に飛び込んできたテイルモンから状況を聞いて飛び出してきたのが先程のこと。何故来たのか。その理由さえ後回しだ。

　何のために危険を冒しているのか。
　―あのくだらない正義厨のために動く必要はない。
　自分が行ったところで変わるものがあるのか。
　―たかが高校生に変えられる現実なんてない。
　別の契約者を見つければ何とかするだろう。
　―あの大天使は、別に自分を必要としているわけではない。
　少年の頭を渦巻く疑問疑念臆病風。

　そもそも自分と奴は盛大に喧嘩別れをしたばかりだ。お互いの一番弱い部分を鋭い言葉で傷つけあい、怒りのままに絶縁宣言を叩きつけあった。
　ホーリーエンジェモンは人間ではないし、この世界を守るいわれもない。
　だから奴がこの事態に動いている保証だってないのだ。さっさと見限ってデジタルワールドとやらに帰っているかもしれない。
　それかパンドラモンを見つけることを優先している可能性だってある。動いているときが一番見つけやすいのなんて誰だってわかることだ。

　――それでも奴が悪意を見逃すことはない。草太はそう確信している。
　確かに奴の正義は独善的で、その横暴さが誰かを笑顔にするとは思えない。
　――でも、救われる人がいる。事実救われたのだ、自分は。
　死の一歩手前、ただただおびえるだけだった自分を、やつは確かに助けてくれた。

　その後だってそうだ。どんなに独善的に見えたとしても、ルールこそが人を守るものだってことを奴は信じているのだ。だから些細なルール違反も見逃さない。その先に守るべきものを見ているからだ。
　デジモンが暴れだした時、たとえどんな危険なデジモンであろうと、どんな恐ろしい攻撃が来ると分かっていても、やつは人の前に立つ。
　どんなに口ではふざけたことを言っていても、チンピラじみた挙動で罵声を喚いていたとしても、ホーリーエンジェモンがその後ろに攻撃を許したことはない。自らを盾とすることすら厭わない姿がそこにあった。

　だから草太は信じる。
　阿呆な理屈で振るわれる力だとしても、恐怖に震える人が救われるのならば、それを正義と呼んだっていいはずだ。
　誰からも疎まれる自己満足だったとしても、人を痛みから解放できる力なら、それが正義だっていいはずだ。
　痛みは容易く人の心を折る。折られた心が死を呼ぶことだってある。ならば折られる前に助ける

しかないのだ。

　そう思ったからこそホーリーエンジェモンとの契約を受けた。
　どんなに嫌な奴であっても、それが分かるから自分は走るのだ。

5.合流まで

　街中に悲鳴が広がっていく。タトゥーの暴力衝動に支配されたフライモンの群れは、うずくまる人々を傷つけ始める。殺すのではなくいたぶる。
　やろうと思えば人など一噛みで引きちぎれるだろうに、嗜虐性を増幅されたフライモンは、一方的に人を傷つけ笑っている。

　ビルの影、街路樹や植え込みに身を隠しながら草太はホーリーエンジェモンを探す。
　頼りのパス――ホーリーエンジェモンとの契約の証だ――はまだ切れていない。つながってもいないが。
　頼りにならないと舌を打つ。

　今この街で凶暴化したフライモンをなんとかできるのはホーリーエンジェモンだけだ。あのうっとおしい羽音で普通の人間は立つことすらままならない。
　しかしホーリーエンジェモンが全力を振るうためには草太の制限解除が必要だ。
　まずはホーリーエンジェモンを見つけ出さなくてはこの混乱を沈めることはできない。

　――奴はどこにいる？

　草太は考える。
　街中で悲鳴が上がったなら、ホーリーエンジェモンはどうするか。
　間違いなくおっとり刀で駆け付けるだろう。だが制限状態では守ることのできるものは限られる。
　あきれるほどのアホではあるが、取捨選択を間違えるほどではない。

　逆にフライモンは、どのような相手を狙うのか。ゾンビタトゥーで暴力衝動にかられた毒虫が狙うものの中に、ホーリーエンジェモンが執着するものはあるか。
　理性をなくしたからこそ、脅威など一つもないはずの弱いものを狙うはずだ。事実、うずくまる無力な人々を傷つけている。

　それだけか？

　フライモンは悪意や嗜虐性を増幅されている。要はすごい嫌な性格になっている訳だ。
　嫌な奴は弱い者いじめはしても強いものに喧嘩を売ることはしないはずだ。
　……なら、強いものが弱くなっていたらどうか？
　今のホーリーエンジェモンは見た目だけで、通常よりもはるかに弱い状態だ。力に制限がかかっているのだから。フライモンは自分より上の存在をいたぶる機会を逃しはしないだろう。

　ましてやパンドラモンの支配下にあるのだ。自分を捕まえにきた相手を逆に嬲れるならば最優先で狙われたっておかしくはない。フライモンがホーリーエンジェモンを見つけたのなら、徹底的に攻撃を加えるはずだ。

　ホーリーエンジェモンは自身が集中的に狙われるとして、フライモンから逃げるか？

　間違いなく逃げる。あの阿呆は正義の番人気取りだが、その本質は野生の猛獣に近い。意味もなく勝てない戦いをすることはしないはずだ。
　さっさと逃げ出して、それから陰湿な不意打ちでもするのが目に浮かぶ。
　だが、それはホーリーエンジェモンだけが狙われたらの話だ。

　いつか見た不可解な態度。パトロール中の公園でやつは子供を見ていた。
　転んで泣いた子供の元へ保護者が駆け付けるまでの一部始終を。子供の声が耳障りだというくせに、子供が泣き止むまでその場を離れようとしなかった。思えば公園に幼稚園、小学校。奴が選んだパトロールルートは子供のいる場所ばかり。

　――ああそうだ、きれいに折られた紙のメダルなんて、誰があの天使に贈るというのか。

　この辺りで一番子供が多いのは、公園そばの保育園だ。やつが好んで回るパトロールコース。
　今の時間帯なら、仕事が終わった大人たちが迎えに来るのを待っている子供たちがいる。かつては自分も通った保育園だ。間違いない。
　見つからないように静かに、そしてできる限りの速度で駆け出す。膝が痛むかもしれない、そんなことかけらも思い浮かばなかった。

＊＊＊

　国道をそれた小さい市道に入ると地域で一番大きい保育園がある。日当たりの良い大きな園庭にはいつも可愛らしい子どもたちのはしゃぐ声が聞こえていた。
　それが今はどうだ？不愉快な羽音と破壊音、泣き叫ぶ声。
　か弱い子供の悲鳴だ。近づくほどに強く、自分にも聞こえている。
　ならばその声が、やつに届かないはずがないのだ。あの傲慢極まりなく、頭も素行も最低で身勝手な屁理屈を振りかざす自称大天使。
　薄っぺらい正義をかざして人を従わせようとする、草太にとっての疫病神。
　だが、弱いものを守る正義の番人でもある。誰でもなく、草太がそれを知っている。

　園庭には泣き叫ぶ幼児たちと必死にかばう保育士がうずくまっている。親の迎えを待つ間、園庭は解放されているから、その状況で襲撃を受けたのだろう。
　そして一塊になった彼らを、ホーリーエンジェモンがかばい続けている。
　左手の盾は常に彼らを守るために向けられ、自らをかばうことはない。それどころか、自らの肉体すべて、背の翼までもをなげうって子供たちを守り続けていた。
　どれだけ打ち据えられようともその背中は揺るがず、決して倒れることがない。

　草太は叫ぶ。そして打てば響く返答は速やかに。

「待たせた！」
「遅い！承認しろ！！」

　即時申請が来る。表示される間すらもどかしい。

「承認！！やれ、ホーリーエンジェモン！！」

　二人をつないだパスを通じて、ホーリーエンジェモンの力が解放される！

　きらめく光が逆流するようにスマホまでも輝かせる。むろん、ホーリーエンジェモン自身が放つ光はその比ではない。
　解放されたホーリーエンジェモンが放つ存在感は圧力さえ覚える。傷ついた翼すら曇りのない白色を取り戻していく。4対8枚の翼を広げたその姿は、名実ともに大天使型デジモンの威容である。
　ふわりと浮き上がり、鬱憤を晴らすように羽ばたき散らす姿だけが、普段と変わらない柄の悪さを伝えている。

「さて、たかが羽虫程度が調子に乗ったものだな。一匹ずつ羽を引きちぎってくれよう」

　フライモン達は様子の変わったホーリーエンジェモンへ警戒心を向けて、距離を取っている。しかし、その程度の距離では不足している。
　翼の一打ちが生み出す推進力はフライモンの比ではない。音を纏う速度で一体のフライモンの上を取る。そうして繰り出されるのは、体全体を引き絞るような溜めからの打ち下ろしの右。フライモンが反応する暇すら与えずにその拳がフライモンの胴体を撃つ。
　激しい衝撃にまるでボールかなにかのごとく地面に叩きつけられるフライモン。顕れた力はエンジェモン時代の得意技、聖なる肉弾戦の代名詞、ヘブンズナックルである。

　地面へ落下したフライモンには目もくれず、草太にむけ次なる力を要求する。

「草太！申請！！」

　スマホが震える。見るまでもない。スマホから浮き上がるように輝く文字にはホーリーエンジェモンが誇る聖剣の使用申請が浮かぶ。

「エクスキャリバー承認！！」

　叩き返すように叫ぶ。

　光の聖剣がきらめく。右腕から伸びる青白い刀身は草太の身の丈ほど。ホーリーエンジェモンは胸元に手首を返し、刀身越しにフライモンの群れを覗く。

　下段に剣を構え、翼の一打ちでフライモンの眼前に飛び込む。フライモンが前足を振るうよりも速く身をかわしてフライモンの上を取る。曲芸のように上下さかさまに反転したまま、フライモンの体に刻み込まれたタトゥーだけを切り裂いていく。
　切り裂かれたタトゥーは黒い靄を噴出しながら、光に焼かれるかのように消えていく。

　タトゥーが消えることで暴力衝動から解放されたフライモンであったが、さすがにタトゥーとエクスキャリバーのダメージは大きく、ゆっくりと地面に着地していく。

　力を解放されたホーリーエンジェモンは、凶暴化したフライモンを歯牙にもかけない。成熟期と完全体にはそれほど大きな力の差がある。一体ずつ、確実にフライモンが浄化されていく。後から後から街中に散らばっていたフライモンが集まってくるものの、鎧袖一閃とばかりに聖剣が煌めき、そのことごとくを浄化していく。群れであったとしても力の差が埋まることはない。
　だからそれを覆そうと思うならば、無法に手を染めるしかない。

　黒い靄”ゾンビタトゥー”が明確な意思を持って蠢きだす。浄化される前のフライモン達からタトゥーから黒い靄に姿を変えて中空に集まっていく。悪意そのものを形にしたような漆黒の球が現れる。美しさすら感じさせるそれは、まだタトゥーを残したままの一体のフライモンを飲み込んでいく。触れた場所から靄がフライモンの体を引き寄せるように蠢く。まるでアリにたかられる蛾のように、毒々しい羽も警戒色そのままの体も黒い靄に包まれる。
　フライモン一匹を丸々飲み込んだ黒の球からは、フライモンの絶叫が聞こえてくる。ぶちぶちと何かがちぎれる音が響く。フライモンが靄の中で何かひどいことになっている。
　フライモンを取り込んだ靄の球からは、鞭となった靄が振り回され、ホーリーエンジェモンも手を出しあぐねる。
　そして、だんだんと球が小さく薄くなり、フライモンの姿が見えてくる。元の姿とはかけ離れた姿となって。

　ゾンビタトゥーを介して注ぎ込まれた力は、フライモンの肉体という器を無理広げ、強制的に巨大化させている。
　力による巨大化に耐えきれずにちぎれた肉体の隙間は、黒い靄が埋めている。遠目には身体中にひび割れたような黒い線が見える。そうして無理矢理に膨れ上がったフライモンの肉体は元の3倍を超えるほどの大きさとなってホーリーエンジェモンの前に現れた。

　生き物の強さは多くの場合、大きさだ。強い生き物は大きい。正面切っての争いでライオンは象に勝てない。絶対的な質量はまぎれもない力そのものである。
　それはデジタルモンスターであっても同じことだ。例外はあれど、成長期から成熟期、完全体に至るまで、より強く『大きく』なることこそを命題として進化し続けるのがデジモンである。
　本来であれば成熟期と完全体では埋めがたい力の差がある。多少の大きさを覆せる差だ。しかしそれを補うのがゾンビタトゥーである。パンドラモンがゾンビタトゥーを介して与えた力によって、フライモンの位階は完全体以上まで引き上げられている。

　巨大フライモン、いやその裏に潜む影、パンドラモンが笑う。

「シネ」

　巨大化したためにその動き自体は緩慢である。飛び続けることよりも悪意を優先した巨大フライモンがビルのアンテナを止まり木として、その巨体を下す。
　そして羽を高速で震わせていく。その巨大化した羽がもたらすハウリングノイズもより威力を増している。
　同時に放たれる黒く染まった鱗粉が一帯を染め上げるように広がっていく。

　気がつけば二人の背後では、守っていたはずの子どもたちが苦しそうにうずくまっている。
　フライモンが強大化したことにより、より多くの悪意を振りまく形態に変わったのだ。
　タトゥーの靄は尽きることなく振りまかれ、辺り一帯はより深い暗い闇に覆われていく。

　小さく柔らかな光が消えていく。無条件に信じていた未来が失われる絶望。

　ホーリーエンジェモンが慌てたように地上に降りてくる。草太には目もくれず、子供達の前に立つ。声をかけるでもなく、手を差し出すわけでもなく、ただ立ちすくむように。
　草太はホーリーエンジェモンとこの子供達がどんな関係なのかは知らない。ただの気まぐれで近寄ったら懐かれた。概ねそんなところだろうと思う。
　まだ何者でもない、何にでもなれる可能性の塊。
　ホーリーエンジェモンは戦うすべしか知らない。苦しむ子供にしてやれることを知らないのだ。ただ撫でてやるだけでも子供は安心するものなのに、それすらわからないのだ、この天使は。

　呆然とするホーリーエンジェモンをそのままにしては置けない。初めて見せた弱さをそのままにしておきたくはない。なにより、こいつなら苦しむ子供たちを救うことが出来るはずなのだ。

　ここに来るまで何十人もの人々がフライモンのハウリングノイズに苦しめられていた。耳をふさいでも防ぐことのできない苦しみを受け、立ち上がることさえできていなかった。そんな人々の中を、草太一人だけホーリーエンジェモンの元へと駆け抜けてくることが出来た。
　より強大となったハウリングノイズに苦しむことなく、今草太は立っている。そこに鍵がある。草太とホーリーエンジェモンは契約によって魂を直接接続するパスが生成されている。このパスを通じてホーリーエンジェモンの力が草太にも流れ込んでいる。邪悪を滅する聖なる光が草太の体を守っているのだ。だから草太はハウリングノイズに耐えられたし、毒の影響を受けていない。
　ならば手はある。草太にはホーリーエンジェモンの可能性が見えている。
　草太を守る光などわずかなものである。草太自身が今まで意識すらしなかったものだ。ただ繋がっているだけで伝わってくる光でも、悪意の毒に対することが出来るのならば、大本であるホーリーエンジェモンならば毒も靄もすべて吹き飛ばすことが出来ると。そして、その力があればどれだけの命を守れるかを。

　立ちすくむホーリーエンジェモンの背中に手を当てる。

「俺が今ここに立っていられる理由を考えてみろ。」

「――ッ、消せるのか…？」
「分かったならボケっとしてんな！さっさと毒を消し飛ばせば済むだろうがッ！！」
「……貴様に言われるのは癪だな。まあいい。ならば見ているがいい、私の力を。」

　ホーリーエンジェモンの4対の翼に光が集う。羽根一枚一枚に宿るは猛き光である。
　瞬時に高く舞い上がり、その翼が力のある風を起こす。静かに広がっていくその風は、聖なる光を運ぶ優しくも苛烈な暴風となる。街中にまき散らかされた毒鱗粉が光に溶けて吹き消されていく。
　毒に苦しむ人々の顔が風を受けて穏やかな呼吸に変わっていく。草太の後ろにうずくまる子供たちの泣き声も小さくなる。ホーリーエンジェモンはそれを横目でしっかと見つめている。
　鱗粉をあらかた吹き消したホーリーエンジェモンが草太の元へと戻ってくる。毒をまとめて吹き飛ばされたフライモンは再び宙へと浮かび上がり、二人を警戒している。

　二人は、合わせたかのように巨大フライモンへと同時に向き直る。
　草太からホーリーエンジェモンへ。ホーリーエンジェモンから草太へ。二人をつなぐパスが伝えるのは力だけではない。

　弱いものを守ること。”泣き声を少しでも早く止めたい”
　暴れさせられているデジモンを救うこと。”暴力をさせている奴に腹が立つ”

　フライモンは大人しいデジモンであることをホーリーエンジェモンは知っている。目の前の巨大なフライモンが上げた悲鳴を草太は聞いている。

　自身の欲望のために人を傷つけること。

　草太はそれが許せないと思う。たかが一つの傷が夢を奪うことだってある。
　ホーリーエンジェモンは、それこそを”悪”と断ずる。弱さが生む悲劇を知るがゆえに。

　性格、心情、生まれも種族も、世界さえ異なる二人だが、悪へ立ち向かう意志、その一点だけは違えることがない。
　ならば弱い心に手を差し伸べること。未来を穢すものに立ち向かうこと。つまり、それが今この場における二人にとっての正義である。

「草太。」
「ああ。」

　猛き意志が同じ焦点を結ぶとき、二人の魂が共鳴する。

　共に立つ二人の体からは黄金の光が溢れ出す。ホーリーエンジェモンの力が、草太との共鳴によってかつてないほどの高まりを見せる。

　半身になって左手のスマートフォンを、巨大フライモンへと向ける。

　背中越しに、ホーリーエンジェモンの右手のエクスキャリバーが向けられているのが見えた。

「全力を振え、ホーリーエンジェモン！！」

　その力を向けるべき悪を示す。

「言われるまでもない、奴は微塵も残さん！！」

　溢れる光が悪を討たんと気炎を上げ、空高く飛び上がる。

　黄金の光を纏う４対の翼が震え、爆発的な光が広がる。その光は朝焼けにも似て、街を埋め尽くす靄を切り裂くように焼き払う。暗がりを打ち破るその光は、靄がもたらす暗闇のことごとくを駆逐し、月を掲げる優しい夜の色を取り戻していく。フライモンがもたらした破壊や痛みに苦しむ人々すら、その光に恐怖を忘れた。
　吹き荒れた光は陰ることなく、ホーリーエンジェモンへと焦点を合わせて行く。曙光を束ねたがごとし黄金の輝きが、ホーリーエンジェモンの右腕で形を成す。
　エクスキャリバー、その刀身は優しく柔らかな黄金の光そのものとなった。
　見るだけで温かくなるような、太陽にも似た穏やかな光。
　そしてそれは、幾万の悪を焼き尽くす苛烈な光でもある。

「エクスキャリバー」

　その剣の銘がつぶやかれる。

「さあ、正義の時間だ。フライモン、お前にこびりついたクソを今払ってやろう」

　どこまでも高慢で、上から物を言う、変わらない姿。
　むろん答えが返るはずもなく、巨大フライモンからは三度強烈なハウリングノイズが強烈な毒針と共にが射出される。ハウリングノイズで身動きを止め、わずかでも付着すれば骨までも溶かす猛毒を確実に当てる。フライモンの必勝パターンがホーリーエンジェモンを狙う。避けることが可能でも、その背後には草太と子供たちが位置する。
　正義を標榜する輩にはこの手が一番効く。フライモンを操るパンドラモンは、デジタルワールドの天使型デジモン達に敗れとらわれたとはいえ、災いを元にさんざん暴れまわったデジモンである。天使型デジモンの弱みをよく知っていた。
　だから、知らなかったのはデジモンと人が共に戦う強さである。

　ホーリーエンジェモンが左手を前にかざす。まるで大砲のように猛烈な勢いで飛ばされた毒針は、ただそれだけでまがまがしい毒液が浄化され、一滴たりとも地に落ちることすらなく消えていく。物理法則すら捻じ曲げる光の力。
　本来デジモン自身が操ることのできる力は、そのデジモンのレベルによって大枠が決まる。いかな完全体であっても、靄によって強制的に位階をあげられたフライモンの毒針を浄化などできるはずもない。

しかし、人とデジモンが心を一つにした時の力はいかなる悪意も吹き飛ばす光を生み出す。

フライモンへ向けた左手をそのままに、弓を引くかのように半身になってエクスキャリバーの切っ先をフライモンへと向ける。そして体中の力全てを剣に乗せて突貫する。雷のような刺突が、まっすぐに巨大フライモンの体を苦しめるゾンビタトゥー、その中心を確かに貫く。
そして、エクスキャリバーの黄金はさらに輝きを増して、ゾンビタトゥーどころか、膨れ上がったフライモンの肉体を癒すように全身を黄金に染め上げた。

ホーリーエンジェモンがゆっくりとエクスキャリバーを引き抜くと、すべてのタトゥーが塵のようにくずれて消えていく。４対の翼が巻き起こす風が、その塵すら浄化し消し去っていく。
ボロボロと膨れ上がった肉体が剥がれ消えていく。元の大きさにしゅるしゅると戻っていき、そのまま地面に伏せるフライモン。
もうフライモン達に戦う術はない。戦いは終わりだ。
ゾンビタトゥーに操られたとはいえ、街や人を散々苦しめたフライモンをみんなが見ている。そもそも操られていたことを草太達以外誰も知らない。弱った姿をいいことに追撃しようと考える人がいてもおかしくはない。

「ホーリーエンジェモン、全部まとめて吸い込んでやれ」
「わかり切ったことを貴様が指図するな。さっさと承認だけしていろ！」

ヘブンズ・ゲートの申請を即座に承認する。通常は亜空間につなぐゲートではあるが、今回の任務として、天使連が作り出した隔離空間へと接続されている。ホーリーエンジェモンよりも更に高位の天使型デジモンたちが作り出した聖なる力に満ちた空間である。ゾンビタトゥーを瞬時に浄化し、傷ついたデジモンの治療にもなるだろう。もとより現世にこんな悪意に満ちた力を残しておくわけにはいかない。
見慣れた門が空に開き、街に残る靄と気絶したフライモン達が吸い込まれていく。

誰もがホーリーエンジェモンの輝く光を見上げていた。

***

バサリと空気を打つ音とともに、ふわりとホーリーエンジェモンが舞い降りる。黄金の輝きは消えていつもの姿だ。スマホをちらりと確認すると、申請時間が経過しましたと無個性なポップアップが開いている。

戦いが終わって後始末も済んだ。そうするともう話すことがない。
絶縁宣言まで飛び出した喧嘩の後である。忘れたことにするには短すぎる時間だ。お互いに気まずい。さりとて二人だったからこそ何とかなったこの状態。
どちらも自分が間違っていたとは思っていないし、謝りたいとは思っていない。だが、それでも踏み込みすぎた自覚があった。

「……もう少し速く来れなかったのか。おかげで翼が汚れたではないか」

「……お前が助けてーって情けなく叫んでたらもっと速く着いたさ」

　だから憎まれ口をたたかざるを得ない。引っ込みがつかなくなった阿呆が二人である。

　と、そこにおずおずと話しかけてくる人がいる。それまで守られ続けた保育士と園児である。
「あの、て、天使さん？私達を守ってくれてありがとうございましたっ！」
　勢いよく頭を下げられる。驚いた様子のホーリーエンジェモンに、追撃とばかりに園児たちの幼い礼が続く。草太からすればただのチンピラだが、見た目はまさに天使そのものである。ましてや身を粉にして守ってくれた実績がある。
　恐怖から開放された子供は無敵である。たちまち園児たちに囲まれるホーリーエンジェモンであった。

　あっという間に子供のおもちゃと化すホーリーエンジェモンに、巻き込まれまいと離れようとする草太だったが、草太にも保育士が頭を下げ始める。ありがとうありがとうと、自分の両親ほどの年齢のご婦人に頭を下げられて平然とできるほど肝は太くない。

「ちょっ、頭を上げてください！俺は別になんにもやってないですから！礼はアイツにやってください！」
「いえ、あなたが来てくれれば何とかなるって聞いてましたから。だからお礼を言わせてください。」
「いや、何にもやって…、聞いてる？」

　ホーリーエンジェモンと自分の関係性を知っているのはあとはテイルモンだけだ。であるのにも関わらず自分がくるのを待っていることを知っていた。そんなことをあのへそ曲がりがいうのだろうか。

「天使様は私達を守りながら、なんとかできる人が来るからそれまで耐えろって言っていたんです。」

　穏やかな瞳が、それが草太のことだと、そう信じていることを伝えてくる。
「だからあなたにもお礼を言わせて下さい。本当にありがとうございました。」

　そう言って頭を深々と下げる。草太にはもうなす術がない。ああ、だとか、いや、とかうにゃうにゃと言葉を濁してその場を離れる。保育士さんは不思議そうな顔をしてその姿を見送っている。

　速足で保育園を後にする。さっさとこの場を離れたい草太である。
　そして、同じく園児の群れから開放されたホーリーエンジェモンと期せずして隣り合う。

　草太はホーリーエンジェモンを信じてこの場に来た。
　ホーリーエンジェモンは草太を信じてこの場で耐え抜いた。
　お互いが、なぜそこまで互いを信じられたのかは分からない。大して長い付き合いでもない。性格も考えも何もかもかみ合わない。絶縁するほどの喧嘩もした。それでも、信じるにたる確信があ

った。それは、思ったより悪い気分ではなかった。だから。

「薄っぺらいってのは言いすぎた。――悪い。」
「理由があったということにしてやる。――泣き言は聞かんがな。」

5 エピローグ

「全く貴様は学習能力がないのか？味噌を入れたあとに沸騰させるバカがどこにいる！カスがっ！！」
「ぐっ、ちょっと沸かしすぎただけだろ！お前こそ掃除は終わったのか？終わるまで飯にはしないからな！」

　口を開けば罵声が飛ぶ。

「お前なんでも間でもエクスキャリバー申請してくるのやめろ！ピコンピコンうるさいんだよ！幼児でももっとまともな判断するぞ！」
「黙れ！私の目の前で悪が行われた以上、即刻やつに正義を叩き込まねばならん！さっさと承認しろ！！」
「たかが信号無視に過剰な戦力もちこむんじゃない！いかれてんのか！」

　仲良くする気がまるでない。

　二人のレベルの低い口げんかもここまでくれば筋金入りだ。様子を見に来たテイルモンがあきれている。
　喧嘩にため息をつきながら、一昔前の携帯電話で現状報告をしている。

「はい、こちらは何とか対応できています。パンドラモンの捜索についてはお任せください。代わりにデジタルゾンビ化の治療と対策はお願いします。」

　通話を切った後にもまた別の話題で喧嘩が始まっている。

「もう、仲がいいんだか悪いんだか・・・。」

　やさぐれ天使と鬱屈少年の戦いは続く！

　バディ2話

0.プロローグ

薄暗い雑居ビルに人影が一つ。直立不動のまま、身じろぎ一つしない。
見れば全身に真っ黒に染まっている。もし近くでその姿を見たならば、黒いタトゥーが幾重にもその肌に刻まれいることが分かるだろう。時々、黒いタトゥーは表皮を蠢いている様子に気づくこともできる。
人影の傍らに小さな小箱が置かれている。手のひらほどのサイズで、6面全てに口や目が描かれていて、ぎょろりと目があたりを眺めまわしている。
この小箱こそが、人影を操る主であり、この街へ今なお災いを振りまき続ける災厄の化身、パンドラモンだ。
人影からは黒い靄がしみだしている。タトゥーが蠢くたびに、人影からもうめき声が上がり、その苦悶の響きが靄を生み出している。靄は風になびく様子もなく静かに漂い、パンドモンへと吸い込まれていく。そのたびに、パンドラモンが嬉しげに目を細める。
人の苦しみを糧とする邪悪なデジモン。かつてデジタルワールドの聖なる天使型デジモンたちに封印されていた最悪のデジモンが、封印を抜け出しリアルワールドに現出している。
パンドラモンに囚われた人影――哀れな少女に出来ることはなにもない。苦しみも恐怖も、何もかもがパンドラモンの餌として奪われていく。
終わりのない苦しみに身を焼かれる少女の絶望はパンドラモンにとっては甘露そのものだ。

救いの光は届かない。ただただ少女の嘆きが深まっていくばかりだ。

1．そういう仕組みだったの？

明るい日差しがカーテンを照らすお昼時。長峰家にもお昼ご飯が食卓へ並べられていた。
つやつやのご飯にお味噌汁――今日は大根と豆腐、アジの塩焼きに漬物がいくつか。どれも出来上がったばかりで、いい香りが部屋に広がっている。
その食卓を囲むのは三人。家主である長峰草太と、その契約者であるホーリーエンジェモン、そしてパンドラモン捜索を行っているテイルモンだ。
草太がホーリーエンジェモンの厳しく鬱陶しい指導の元に作り上げた料理は、盛り付けにまで気を使っており見栄えもいい。ホーリーエンジェモンからすると落第ギリギリの手際ではあるが、それでもインスタントとレトルトに頼り切っていた当初からすると中々の上達振りである。

普段は草太とホーリーエンジェモンだけの食卓だが、今日はテイルモンを招いての食事会だ。パンドラモン捜索に向けて、作戦会議を兼ねて草太がテイルモンを食事に誘ったのである。
かなしいかな、テイルモンは一般的なテーブルでは手足が届かないため、椅子に座布団を重ねて即席で作った子供席に座っての食事である。

いただきますの声も揃って、早速食べ始める。
草太は初めに味噌汁を一口。出汁の取り方も手慣れたものだ。味噌の具合も丁度よい。手前みそながら上出来なのではなかろうか。内心これなら文句も出るまいと考えている。
が、なかなかうまくいかないのが料理初心者というものである。
さっそくテイルモンから声が上がる。

「あら、草太さん、このお漬物つながってしまってるわ。」

　猫パンチくらいしかできなそうな手ではあるが、テイルモンは器用に箸を使いこなす。天使型デジモンの一端たるもの、テーブルマナーも心得ているようだ。薄切りにしたはずのきゅうりが、見事につながったままテイルモンの箸にぶら下がっている。

「…ちょっと包丁の入れ方が浅かったな。まあうまくちぎって食べてくれ。」
「貴様はいつになったら包丁の使い方を覚えるんだ？」
「うるさいな、味に変わりはないんだから我慢しろよ。」

　気心もしれたテイルモンであっても客は客だ。内心上々と思っていただけに、ホーリーエンジェモンの指摘がグサリと刺さる。
　ため息をつくホーリーエンジェモンを尻目に、上手に箸で漬物を取り分けて口に運ぶテイルモンはこの上なく楽しげであった。

***

　元サッカー少年と傲慢天使に猫もどき。
　口を開けば売り言葉に買い言葉、罵倒が出ない日はない草太とホーリーエンジェモン。どこにでも入り込んで情報収集に勤しみながらも、主婦の噂話が気になるテイルモン。どうにも締まりのない三人であるが、この街をパンドラモンの脅威から救い続けている三人でもあった。

***

　食卓は静かに進む。基本的に草太とホーリーエンジェモンは仲良く話をする間柄ではないので、お互いの失点が目につかなければこんなものである。
　きれいにアジの塩焼きを骨だけにしていくホーリーエンジェモン。その雰囲気は普段のだらけた姿とは比較にならない真剣さである。
　食感が気に入ったのか、延々ときゅうりの漬物を食べ続けるテイルモン。立ち振舞も言葉遣いもたおやかさのあるテイルモンではあるが、美味しい美味しいと同じものを食べ続ける様は見た目相応だ。
　食事のさなかではあるが、草太が本題を切り出す。

「食べながらでもいいから聞いてくれ。最近の状況についてだ。」

　箸を止めることこそないが、二人の注意が草太に向く。

「多分だけど、パンドラモンは俺たちを探っている。実際に動ける戦力と行動範囲、対応能力をだ。」
「先に根拠を言え。」
「ここ最近出てきたデジモンを考えてみろ。」

　一口味噌汁で喉を湿らせる。

「ちょっと前にデカい木のドラゴンが出てきただろ。あいつは確か完全体だって言ってたよな？」
「そうですね。エントモンです。ホーリーエンジェモンと同格、いえ、同じ完全体でも上位のデジモンですね。」
「私の敵ではなかったがな。」
「それはパンドラモンに操られていたからでしょう？」

　無駄にマウントを取りに行くホーリーエンジェモンをテイルモンがたしなめる。この大天使は大体誰に対しても対抗心をむき出しにするので、まともに取り合うだけ時間の無駄だ。

「そこはどうでもいい。要は、用意することのできる中で、上位のデジモンを出してきたってことだ、大事なのは。
でもその力押しはホーリーエンジェモンに押し返されている。ただでさえ今までさんざん邪魔してきたのが俺たちだ。そのために虎の子まで出しても排除できなかったわけだろ。じゃあ次はどうするかって話になる。」
「確かにな。普通ならそうなる。だがパンドラモンの脳みそはそこまで上等に出来てるか？」
「それは知らん。テイルモン、確認するけど、その完全体より強いやつ、究極体？が出てくることはないとみていいんだな？」
「それは間違いありません。パンドラモンが脅威であることは確かですが、ゾンビタトゥーは完全体以上に対しては強制力がかなり落ちます。動かない相手にひたすらゾンビタトゥーを打ち込み続けるような条件でもない限りは、究極体が操られることはあり得ないでしょうね。」
「そうだといいがな。言っておくが、完全体のエントモンですらあのざまだぞ？」
「エントモンは究極体ではありませんよね？」
「分かった分かった。可能性としてはかなり薄いってことで理解しておく。」

　ここまででようやく前提である。いちいち混ぜっかえされるせいでなかなか話が進まない。
　まして食事中でもある。自然と話が途切れ、味噌汁をすする音、漬物を楽しむもの、おかわりをしに行くものとそれぞれに食事が進めていく。

「今まではデジモンの数を増やしたり、エントモンとかでかいデジモンを使ってきてたよな。でも昨日はやたらと小さいデジモンで逃げながらちまちま攻撃してきてた。明らかにこれまでとは毛色が違ってる。
俺たちより弱いやつを数だけ用意する意図はなんだ？今までの戦いからしても敵わないことは分かってたはずだ。
もし考えなしの行動でないのなら、これは試しだ。モルモットよろしくいろんなタイプのデジモンを嗾けて、俺たちがどこまでなら対処できるのかを調べている。俺はそう考えてる。」

　パンドラモン自体のことを草太はあまり良く知らない。その実力や悪意については、ホーリーエンジェモンとテイルモンからの伝聞である。長く封印されていたデジモンであり、それなりに弱っている可能性だってある。
　だが、弱く見積もるのが悪手であることは言うまでもない。ホーリーエンジェモンとテイルモン

の判断次第になるが、改めて草太は戦うべき相手のことを知る必要があると感じていた。
　これまで通りの、戦えるから戦うなどというスタンスでは致命的なミスが起きる。
　元とはいえ、将来を期待されるサッカー少年だったのだ。格上相手にガチガチの対策を決めて大金星を上げたことも、格下だと舐めてかかって無様に負けた経験だってある。だからこそ自身と相手の評価を正しく行う必要がある。

「弱いデジモン相手ならテイルモンも戦えるし、問題なかった。力押しもダメ、数で押すのもダメ。なら次はどんな手で来る？
パンドラモンは俺たちの弱点を探してる。だから少しでも対策を考える必要がある。違うか？」
「まずもって、貴様自身が最も大きな弱点だということを思い出すことだな。」

　ホーリーエンジェモンが立ち上がり、食器をまとめて流しに持っていく。

「そこは私たちがフォローするんですよ、ホーリーエンジェモン。草太さん、なるべくホーリーエンジェモンか私から離れないようにしてくださいね。」

　食器を重ねようとするテイルモンを制して草太が立ち上がる。さすがに客人に片付けなどさせられない。ソファーで待っててくれと言って片付けに入る。
　テイルモンはおとなしくソファーに向かい、上品な仕草で腰をおろす。柔らかさが気に入ったのか、肘掛けに手を当てて反発を楽しんでいるようだ。

「爪研ぎはするなよ。」
「するわけないでしょう　！私をなんだと思っているんですか！」

＊＊＊

　床にあぐらをかくホーリーエンジェモン。テイルモンの隣に腰を下ろす草太。ローデスクには麦茶が3つ。テイルモンのために茶漬けとして残っていた漬物も出す。

「弱点その一は俺か。ただ実際の所、パスからお前の力の余剰が来てる。フライモンの毒とかも効かなかったし、多少は粘れるんじゃないか？」
「浅はかだな。粘ったところで助けがいるのでは足手まといのままだろうが。」
「私も草太さんの考えは賛成できません。ホーリーエンジェモンの言うこともっともではありますが、そもそもとして私たちは草太さんを矢面に立たせたくはないのです。」
「だから隠れてこそこそ承認だけしてろって？」
「草太さんに助けられていることも、その助けなしにこれからを進められないことは分かっています。でも草太さんにはまず自分の安全を考えてほしいんです。」

　自分のこれまでの行動が、安全を度外視したものである自覚は合った。だから真摯に草太を心配するテイルモンに返す言葉がない。

「だがそうも言ってられんのは事実だ。のこのこと前に出てこられても役には立たんが、亀のよう

に引っ込まれても私が困る。
テイルモン、そもそもパスを延長は出来ないのか？ 例えば、別の場所に同時に出られた場合はつぶすのに時間がかかる。そいつがゆっくり歩いてくるのを待つわけだからな。」
「それとパスの届かないような空の上だな。なあ、パンドラモンが逃げられないように境界を作ってるとか言ってたけど、それは空の上でも有効なのか？　あとは地下も可能性としてはあるな。地面に出た場合についても教えてくれ。」
「ちょっ、ちょっとまってください！一度に2つも3つも言わないでください。
ええと、まずパスの延長については難しいです。私たちもどういう仕組みなのか正確に分かっているわけではないので。」
「「は？」」

　草太とホーリーエンジェモンから同時に声が上がる。流石に看過できない回答だ。

「待て、この承認システムはお前ら天使連が作ったんじゃないのか？」
「そんな仕組みもわからんシステムだとは聞いていないぞ！」

　またしても同時に詰め寄られてテイルモンはタジタジである。

「だから一つずつ…。分かりました！　ちゃんと答えますから、落ち着いて一つずつ聞いてください！」

「まず、この承認システムというのは、私たちが一から作り出したものではありません。これは選ばれし子どもたちとパートナーデジモンのデータを基にして再構築したシステムになんです。と、いうよりは出来る限りをコピーした模倣品ですね。
ええと、まず選ばれし子どもたちというのは、かつてデジタルワールドに危機が訪れた時に、パートナーとなったデジモンと共に世界を救った子どもたちのことです。
選ばれし子供たちとそのパートナーデジモンには特異な進化というものが見られました。成長期のデジモンが、選ばれし子供たちに呼応して一気に進化するというものです。天使連としては、この理由を解き明かしたいという研究目線での取り組みがこのシステムの始まりでした。」

　ちらりと草太を見る。この少年はそもそもデジタルワールドを見たこともなければ行ったこともない。興味のうすい話を続けるよりは、用件だけを説明する方がよさそうである。

「これは前提ですが、デジモンの進化というものは自然に行われる類のものではありません。特に成熟期から完全体、完全体から究極体なら尚更です。デジモンの進化というものは基本的に幾重にも重ねた戦いで練り上げられた力によって行われるものです。私もホーリーエンジェモンも、相応に戦いの経験を積んでたどり着いた姿なのですよ。
ですが、選ばれし子供達のパートナーデジモン達は、戦いを重ねこそすれ、普通では考えられない速度で進化をしていました。選ばれし子どもたちの危機や強い感情に反応して、一気に進化をしていたのです。
個体によっては一気に究極体まで進化したとも言われています。それでも平時には元の成長期として過ごしていたそうです。」

「見た目としてはともかく、中身は逆だな？ 私は進化するのではなく、元々の力を抑制されているのだからな。」
「そもそもとしてはリアルワールドへの影響を抑えることが第一でしたからね。それと、ホーリーエンジェモン、あなた自身の素行の問題でもありますからね！」
「…ちっ。」
「待て、他にも理由があったなら言っておいてくれ。下手に隠されて情報に齟齬が出ても困る。」

　テイルモンがチラとホーリーエンジェモンを伺う。が、今更草太からのホーリーエンジェモン評が変わることはないだろう。一人で納得して理由を告げる。

「知っての通りホーリーエンジェモンは荒っぽい上に、天使連からの指示も逆らいがちでした。今回のパンドラモン捜索についても、天使連としてはふさわしい人選になかなか悩んでいたようです。なにせホーリーエンジェモンは草太さんも知っての通り、かなりの札付きですからね。
それでもホーリーエンジェモン以外に適任はいませんでした。なので、どうにか首輪をつける必要があったわけです。リアルワールドで好き勝手暴れ放題になった場合への対策として。」
「…お前どれだけ信用されてないんだよ。いや、テイルモンは元々は完全体だって言ってたよな？ ホーリーエンジェモンもそうすればよかったんじゃないか？そうすれば元のシステムとも整合性取れるし。」
「私は元々そういうのが得意なだけで、誰もが進化や退化を簡単に出来るわけではないんです。だからこそ選ばれし子どもたちはすごかったわけですが。」
「そこは分かった。続きを頼む。そのパートナーデジモンが進化する云々についてだ。」
「まず、当然のことですけれど普通の成長期のデジモンが究極体に進化するだけの力、エネルギーを持っているわけがありません。そんな力があるならそもそも成長期のままでいる必要がありませんから。でも事実進化をしている。では、そのための進化エネルギーはどこにあるのか。
草太さんはどう思いますか？」

　そもそもとして草太はデジモンの進化を見たことがない。ここまでの話もややふんわりとした理解である。ただ、ホーリーエンジェモンをはじめ、これまで遭遇したデジモンは全て人を超越した力を持っていた。
　ただの人間にデジモンに与えられるほどの力があるとは思えない。選ばれし子供達という特殊な存在だとしてもだ。なら、進化するための力はデジモンから生まれることに間違いはないはずだ。デジモンと子供。このワンセットによって進化するための力が生み出される。セットが決まり条件は何か。相性が良ければいいのか？

「…人に力を貯めてるのか？ つまり、デジモンが普段生み出すエネルギーのうち、自然に発散して消えるような余剰分が人に流れて蓄えられていく。で、いざという時に人に溜まった力が逆流してデジモンに還る。選ばれし子供にためられたエネルギーが一気に注ぎ込まれるから、進化する条件を満たす。選ばれし子供になるのは、子供とデジモンのパスを生成するのに相性が絡むから。どうだ？」
「…お見事です。草太さんの言う通り、進化するのに必要なエネルギーが、選ばれし子どもたちに蓄えられていると天使連の技術者は考えたわけです。ただその仕組みの再現にはかなり苦労したようです。当然のことながら、選ばれし子供にも協力を仰いでのシステム構築ですが、不確定要素が

あまりにも多かったんですね。とはいえ曲がりなりにも余剰となる力を送るためのシステムとしては完成してましたから、今回ホーリーエンジェモンの暴走対策に採用されたというわけです。まあ、草太さんとホーリーエンジェモンが使うまではここまで機能するとは考えていなかったようですけども。」
「とんだモルモットだったわけか。」
「で、肝心の距離を伸ばすってのはどうなんだ？」
「…まあ、なんといいますか、再現できただけすごいシステムなんですよね。ふたりともそう思うでしょう？思いますよね？？」

　ホーリーエンジェモンが舌打ちをかます。草太も流石にため息を吐く。

「色々手を入れてもらってはいるんですが…。何分人とデジモンを繋ぐのは相性次第なところがあるみたいでして…。」
「なら、例えば俺と他の人、誰かを繋げて大容量のタンクにとかできないのか？」
「それは無理でしょうね。人同士の場合は力よりも意識の割合が大きくなりますから。全く別のことを考えている人を繋いでもノイズになるだけだと思います。人とデジモンだと、種族の差がフィルタの役割してくれるのでそのあたりの調整は必要ないみたいですけれどね。」
「ま、そんなにうまくはいかないか。」

　お茶うけにした漬物を口に放り込む。ポリポリと気持ちのいい音がする。釣られたようにテイルモンも箸を伸ばす。
　ちなみに漬物自体はホーリーエンジェモンが一本漬けしたものだ。食通気取りは伊達ではなく、いい塩梅に塩っ気が利いていてついつい食べ過ぎてしまう。

「実際のところ、もし上空から降りてこないデジモンが現れた場合、ホーリーエンジェモンが草太さんを抱えて飛ぶことになるんでしょうね。」

　漬物を食べる片手間にテイルモンが二人にとっての爆弾発言を放り込む。
　絵面を想像してぞっとする。ホーリーエンジェモンに抱えられるなどまっぴら御免だ。ホーリーエンジェモンも盛大に顔を顰めている。

「嫌そうですね…。なら、足にでもぶら下がりますか？」
「命綱無しでぶら下がるのはぞっとしないな…。」

　結局その後も大した案は出ずに解散となった。

2．天高く、空を行く

　古今東西噂をすれば影が差すという。それは世界の違う生き物であっても通用する概念のようだ。

　翌日の夕暮れ、繁華街の空にエアドラモンが姿を見せた。傾いた太陽のオレンジのひかりを受け

て燃えるような姿で悠々と空を泳いでいる。
　テイルモンの知らせで駆け付けたものの、エアドラモンはただ街の上空を旋回するばかりで高度を下げる様子がない。
　これは、と三人で顔を見合わせる。どうやらパンドラモンは草太達が空で戦えるのかを見たいらしい。

　あまりに高い位置を飛んでいるため、まだ街の人々は誰も気が付いていない。言い方は悪いが、「たかが成熟期が一匹」である。ホーリーエンジェモンの剣が届くのであれば即浄化完了で終了となるところ。脅威としては大きくはない。

　が、その位置が問題であった。

　おりしも議論がなされた直後である。
　エアドラモンは明らかに高度を下げることを嫌っている。地上どころかホーリーエンジェモンのパスギリギリの高度すら届かない高さを保ったままだ。さすがに上空から危険度の高い攻撃こそできないようだが、黒い靄を撒き散らかしており、完全な放置はできない。

　対策はないものの、余裕はある。少なくとも即時大破壊を出来るようなデジモンではないからだ。
　物は試しとホーリーエンジェモンが試しにパスの限界高度まで上昇すると、さすがにエアドラモンも明確な敵意を見せ、スピニングニードルをまき散らしてくる。
　流石に高空から一方的に攻撃されるのはホーリーエンジェモンも分が悪い。鋭い針をエクスキャリバーで弾きながらも、それ以上どうもできない。じりじりと高度を下げていっても釣られて高度を下げる様子もない。
　ホーリーエンジェモンが地上へと戻って来る。手も足も出なかったのは事実なのでかなりイライラした様子で羽音がうるさい。

「完全に届かんな、あれ以上はパスが切れる。」
「ヘブンズゲートで吸い込めないか？」
「開く前に射程範囲外まで逃げられる。少しでも降りてくれば三枚におろしてくれるものを。」

　ああだこうだと意見を出し合うも、対策が無いとすでに結論は出ている。検討事項の確認にしかならない。
　二人が新たなアイデアを求めて宙に視線がうろつき始めると、突然テイルモンが手と声を上げる。

「私に任せてください。」

　草太の足元、せいぜい膝を越える程度の身の丈。何を任せられるというのだろうか。
　いぶかし気に見つめる草太だが、ホーリーエンジェモンは違うらしい。明らかに興味を持って問いかける。

「何をするつもりだ？」
「私がエアドラモンに取りついて高度を下げさせます。
ホーリーエンジェモン、あなたは私をエアドラモンに投げてください。いえ、直撃ではなく、エアドラモンよりも高くへです。そうしましたら私がエアドラモンに飛び乗りますから、そのままエアドラモンをあなたの元まで誘導します。ええ、エアドラモンの上さえ取れれば後は自力で行けますからお気遣いなく。」

　確かにホーリーエンジェモンがパスギリギリまで上がったうえで、そこから全力で投げればエアドラモンよりもさらに上空を取ることも可能だろう。しかし、所詮は猫もどきの体。あの広い空でテイルモンがエアドラモンの元へとたどり着けるのかは疑問だ。

「テイルモン、ミスったらどうするんだ？エアドラモンに当たらなかったり、届かなかった場合は。」
「あの、当てる必要はありませんからね？
私とて元々は天使ですから風を読むこと程度お手の物です。それに、一瞬だけなら翼を呼ぶことくらいはできるはずです。」
「できるはずって・・・。」
「いいだろう。」

　むんずとテイルモンの頭部をわしづかみにするホーリーエンジェモン。そのままゆっくりと飛翔を始める。

「…お前、もう少し持つところ考えろよ。テイルモン固まっちゃってるだろ。」
「投げるなら持ちやすいところがいい。しっぽでも掴んだ方が良かったか？」
「ホーリーエンジェモン。これが終わったら話があります…！」

　明らかに怒っている。が、ホーリーエンジェモンが怒られればいい話だ。他人事なだけに草太は気楽である。
　ただ、当事者のホーリーエンジェモンはそれに輪をかけて気楽だ。

「ふふ、あの鳥ガラめ、こいつを直撃させてやる…！」

　手も足も出ずに戻ってきたのを根に持っているようだ。状況を変える一手を得たことに満足げな天使は、すでにテイルモンの怒りも右から左だ。
　頭をガシリとつかまれたまま、浮き上がっていくテイルモンの姿は、ＵＦＯキャッチャーに少し似ていた。

　パスの限界高度ぎりぎりまで到達したホーリーエンジェモン。そのさらに上空にエアドラモンが位置する。先ほどの戦闘（というか一方的な攻撃）に気をよくしたか、エアドラモンは旋回しながら威嚇をするばかり。明らかにホーリーエンジェモンを舐めている。エアドラモンからすれば、飛行高度に制限のあるホーリーエンジェモンなど、鎖付きの犬に等しい。
　だが、今度はホーリーエンジェモンも無策ではない。

　本来空中戦というものは、いかに速度を落とさずに攻撃を叩き込めるか、それに尽きる。だから先ほどの偵察（戦闘ではなく！）では一度たりとも静止することはなかった。
　だが、あえて今度はホバリングするように一定の範囲内の空間にとどまる。それが何を意味するのか、エアドラモンには分からない。
　動かない相手に一方的に攻撃できる立場にあるエアドラモン。その状況でわざわざ旋回を続けて攻撃の精度を落とすこともない。だんだんと攻撃に単調が生まれ、エアドラモン自身も空中に静止してしまった。当然ながら、ホーリーエンジェモンとテイルモンの狙い通りだ。

　エアカッターの一枚をエクスキャリバーで打ち砕く。その瞬間、あえて強く剣を輝かせる。
　猛禽に限らず空に住む生き物は目がいいものだ。まして邪悪な力に操られているのなら尚更に光が効く。
　一瞬の目つぶしではあるが、テイルモンを放り投げるには十分な時間だ。

　上空に投げ放たれたテイルモンが描く放物線は、容易くエアドラモンを追い越していく。その頂点を越えて落下軌道に入ると、テイルモンはスカイダイビングよろしく全身を大きく動かしてエアドラモンの上を取る。
　さすがのエアドラモンも上空から襲われるなどとは思いも寄らない。突然体に落下物が衝突してさぞ驚いただろう。

「さあ、地上までゆっくり道案内させてもらいますね。」

　言うや否や、エアドラモンの顔に額を寄せて、その目に必殺のキャッツ・アイを直撃させる。

”キャッツ・アイ！テイルモンの必殺技だ。この眼光を受けたものをテイルモンは操ることが出来る！！”

　一気にエアドラモンが下降していく。すでにゾンビタトゥーによってパンドラモンに操られているためか、一つの頭に3つの意志が入り込んだためか、ろくに制御も効いていない。降下というよりは墜落に近い状態だ。

　すでにホーリーエンジェモンは申請―承認を済ませ、構えている。

　テイルモンがエアドラモンを足場に大きく飛び上がり離脱する。そのままビルの屋上で待つ草太へと飛び込んでいく。が、猫程度の大きさでも見上げる高さから落下してくる生き物を受け止められるわけがない。草太は一歩引いてテイルモンをスルー。
　テイルモンは猫らしく柔らかに着地、とはいかずに勢いのままゴロゴロとビルの屋上を転がっていく。まあ勢いをうまく逃せるだろう。屋上のフェンスがガシャンと大きな音を立てているのに背を向けて、ホーリーエンジェモンに視線を戻す。
　その時にはすでにエクスキャリバーの剣閃がきらめき、エアドラモンを支配していたゾンビタトゥーを切断、浄化している。

　受け止めなかった草太に「なぜ避けたのですか」と、盛大にまくしたてるテイルモンをしり目に、ホーリーエンジェモンは我関せずとヘブンズゲートを開くのであった。

3．空を歩くために大事なこと

　高校生活も慣れたもので、入学してから三ヵ月もすれば自分の机にも愛着が湧いてくる。
　交換しろと言われれば仕方ないなと思う程度の思い入れではあるが、それでも人の机に座りたいとは思わない。
　というのが草太の感覚なのだが、世の中同じ感覚の人間ばかりではないらしい。知らない生徒が草太の後ろの席の生徒と雑誌を片手に談笑している。

「そこ、俺の席だ。どいてくれ。」
「あれっ、ここの席の人？　悪いね、ちょっと盛り上がっちゃって。」

　ガラガラと座席を引きながら立ち上がる生徒。手には盛り上がりの原因となった雑誌がある。いわゆる旅行誌のようだ。旅行そのものにはまるで興味はないが、開かれたページに写っている写真に目が留まる。

「お、キミも興味ある？　やっぱりヘリコプターはいいよねぇ。でっかいプロペラ回すっていう発想が素敵よね。おしりにちょこんとあるプロペラも可愛くて笑っちゃうし！」

　好みを肯定されたのが嬉しいのか、そのページを開いて草太へと押し付けるかのように雑誌を突き出してくる。思わず受け取る草太だが、興味があるのはヘリではなくヘリにぶら下がる人影、もっと言えば縄梯子である。

　先日の戦闘では何とかエアドラモンを退けこそしたが、明らかに高空での行動に難があることはバレたと思っていい。おそらくは次はもっと脅威度の高いデジモンが来る。テイルモンを飛ばす程度ではどうにもならない相手が。
　そうなると、ホーリーエンジェモンに抱えられる姿が現実味を帯びてくる。どうにか他の手段がないかと考えていた矢先のことだった。

　いくつか質問をしてみたところ、思った以上に濃ゆい答えが返ってきた。これがいわゆるオタクというやつなのだろうか。同好の士なら逃がさない！とばかりに食いついてくる生徒を相手に、連絡先を交換するのと引き換えにスマートフォンで写真を撮らせて貰う。なお、高校入学後、初めての連絡先交換であった……。

＊＊＊

　もはや日常と化したパトロールの終わり際、街を流れる川の河川敷へと降りる。川の流れが曲がっている場所なのだが、生い茂った雑草と雑木林に視線を遮られている。つまり練習には都合がいい。ひたすら雑草をかき分ける必要があるせいで草太の服には引っ付き虫や蜘蛛の巣が引っ付くこ

とだけが難点ではあるが。ちまちまと服についたそれらを取る草太に対し、そもそも飛行可能なホーリーエンジェモンはきれいなものである。

「ちょっとこれ見てくれ。これなら足元も安定しそうだし使えそうじゃないか？」

　学校で見せてもらった雑誌には、ヘリからぶら下がる人影が写っていた。スマホのカメラでその撮影した画像を見せる。ぶら下がっている人影は、丸く輪がつけられたロープに足を入れており、片手でロープを保持している。もう片方の足と腕は自由なままで、ずいぶんリラックスした雰囲気に見える。

「この写真みたいにロープで足掛けられるようにすればぶら下がれるんじゃないかと思ってさ。ロープも家から持ってきた。」
「これを巻けと？発想の貧しさに反吐が出るな。」
「ダメ出しだけなら黙ってろよ。」
「ちっ、…これを使え。その薄汚い紐よりはマシだ。多少の自由度はある。」

　ホーリーエンジェモンの身体にゆるく巻かれた金の帯が伸ばされる。意外と柔らかくてよく伸びる不思議な布でできている。ホーリーエンジェモンとしてもおんぶや抱っこは避けたかったのだろう。珍しく草太に譲るような形で提案をしてくる。

「力を込めてみろ。足場になるよう固定すればぶら下がるくらいは出来よう。」

　自らに蓄えられたホーリーエンジェモンの力を引き出す。うまく使えるというほどではないが、まあちょっと使うくらいならなれたものだ。あふれる水のイメージで力を外に染み出させる。うっすらと光を纏うと、金帯は草太の手によくなじむ。触れるだけで硬さも形も融通を効かせてよく動く。
試しに足を掛けられるようにくるりと末端に輪を作ってみる。そしてその輪に足を入れて体重をかけてみると、少ししなる程度で輪が崩れる気配はない。草太には十分な強度があるように見えた。また、金帯は草太の手が触れると吸い付くように離れない。それでいて離そうと思うとスッと離れていく。元々がホーリーエンジェモンの力であるからして、かなり草太の意志を汲んでくれる便利な帯というわけだ。これならば掴まり続ける握力の心配はしなくて良い。

「落ちても拾わんからな。」

　言うやいなや一気にホーリーエンジェモンが空へと飛び上がる。無論金帯に掴まる草太も一緒にだ。邪魔にならない程度に伸びた金帯にギュッと掴まり直す。
　高度は翼の一打ち事に増していく。重力を振り切るような力強い加速に置いていかれないように、腹に力を入れて体幹を正す。一枚の帯では有るが、不安定さを一切感じない。曲がりなりにも天使の纏う衣であるからだろうか。
　ホーリーエンジェモンといえば、草太を振り落とさんとするが如く、空を縦横無尽に駆け巡る。急停止に加速、急旋回。金帯に掴まる草太もそれに合わせて振り回されていく。しかし無茶な慣性も金帯が緩和するためか、ホーリーエンジェモンの力が草太を満たしているからか、思った以上に

余裕がある。逆に草太が体重をかけてみると、さらに軌道が鋭く切り替わる。ジロリと草太を睨む視線もなんのその、テストを続ける。

「ホーリーエンジェモン、解放の申請をしろ！どこまでやれるか確かめる！」

　風切り音の中、一言伝えるのも一苦労である。
　ポーンと申請の通知。音は聞こえなかったが、振動なら分かる。スマホには新しく落下防止のストラップを付けている。とはいえ普段と違うのは高さだけ。片手で許可を出すのも慣れたものだ。途端にホーリーエンジェモンの輝きが増し、それ以上に速度が上がる。

「ちょっ…！」

　金帯一つで空にぶら下がる身としては、ジェットコースター以上の迫力を感じる。地上が遠いだけ恐怖感は薄いかもな。と、半ば諦めの境地で振り回されるのを耐える。
　しかし、こうして上空から自分の街を見ることなど早々ない。上からみるとミニチュアのようで、なんだか愉快だ。目を凝らして自分の家も探してみるが、相変わらず好き勝手飛び回られているせいで見つける前に視界が移り変わっていく。風を受けながらくるくると流れていく景色を見ていると、思っていることが零れ出る。

「…ここが俺たちが守っている街か。」
「何か言ったか？」
「なんでもねぇよ！」

　最後に街全体をぐるりと大回りして、河川敷へと降りていく。流石に地面に足をつくとホッとする。

「なんだ、この程度でへばったか。軟弱だな。」
「うるさいな、人間は生身で飛び回るようにできてないんだよ。鳥もどきの人間未満と一緒にするな。」

　語気は強いが明らかに虚勢である。膝に手をついて深呼吸を繰り返す様を見てホーリーエンジェモンは溜飲を下げたらしい。いつもなら口げんかの始まりだが、優越感丸出しの視線一つで満足のようだ。草太はその視線に構う余裕すらないので、無事に平和が維持された。

「あなたたち、もう少し、なんとかなりませんか…？」

　明らかに諍いを含むやり取りに呆れた声を出しながら、草むらからテイルモンが現れる。身体についた草や葉っぱを払いながら、器用にため息をついてみせた。

「よくここが分かったな。」
「この辺りを中心に飛んでいたでしょう？草太さんも一緒にいるなら目立たない所に降りるでしょうから。簡単な推察ですよ。」

　フフンと自慢げなテイルモンに思わず感心する。先日のエアドラモンの件といい、なかなか出来るやつだという認識が生まれつつあった。

が。

「…こいつは他のデジモンの気配を感じ取れるからな。第一連携するのに私の位置が分からないでは話にならんだろうが。何が推察だ。」
「テイルモン、お前……。」
「いいでしょう、別に！　　降りる前からここだって予想してたのは確かなんですから！」

　テイルモンの被った猫も大分剥がれてきたな。上げた評価もすぐ下がる。ホーリーエンジェモンに食ってかかるテイルモンも随分素を見せてくれるようになったわけだ。

「で、どうしたんだ？」

　わざわざここまで二人を訪ねて来たのである。理由があるはずだ。

「パンドラモンの協力者が分かりました。」

　テイルモンが一息に切り出す。先ほどまでの醜態は影も形もない。

「ようやくだな。だがよくやった。当然パンドラモンまでの道筋は抑えているんだろうな？」
「残念だけどそう都合良くはいかないものよ。まずは聞きなさい。
協力者の名前は高間こより。14歳の女の子。1年前に交通事故に合ってからずっと意識不明のままだったのが、半年前に突然ベッドからいなくなり、それっきり行方不明。」
「パンドラモン脱走のタイミングと符合するな。」
「ええ、私も同じ意見ですね。念の為にこの街の人間を洗いざらい調べてみましたが、完全に動向が分からないのは彼女だけ。
さらに言うならば、事故の後から行方不明になるまでの間に、高間こよりと思われる少女がデジタルワールドで何度か目撃されています。どこにでも現れて、突然消えていく不思議な少女としてデジモンの間で噂になっていたわ。」
「待て、ずっとベッドにいたんだろ？それがどうしてデジタルワールドで目撃されることになる？」
「これは推測ですが、事故の衝撃で体と意識が離れたのではないかと。飛び出した意識だけがデジタルワールドに繋がるようになってしまった。そう考えると、体はベッドに寝ているだけですし、意識のある短い間だけデジタルワールドに出現するという理屈にも合います。」
「そしてパンドラモンの前に現れたと？」
「おそらくは。その辺りの詳しい経緯は分からないところではありますが、彼女は意識だけをデジタルワールドに繋げることができた。それを利用してパンドラモンはリアライズした。大筋はそんなところでしょう。詳しくは確保した後に聞けばよい話です。
さらに、彼女のその特性を使ってデジタルワールドから他のデジモンを呼び出していたのでしょう

ね。」
「随分といい様に使われているな。…高間こよりはまともに動ける状態だと思うか？」
「知らん。それもパンドラモンを見つければ分かることだ。」
「少なくとも、パンドラモンから離れられる状態ではなさそうですね。なんとか使い潰される前に見つけなくてはなりません。」

4．怪獣みたいな

　パンドラモンの協力者が判明したことは捜索が大いに進展することを意味する。
　手のひらサイズのデジモンを探すのと、14歳の少女を探すのでは難度が全く違う。
　パンドラモンが少女を必要とする限り、人が隠れていられる場所がいる。そういう場所を探せばいい。さらに言えば、少女の食べ物も必要だ。人もデジモンも食べなければ生きていけない。パンドラモンが何を糧にしているかは知らないが、高間こよりには食事が必要だ。そしてそれは何かしらの非合法な手段でそれを得ているはず。
　高間こよりを探す。指針が決まればあとは動くだけだ。

　当然こちらの動きが変わったこともパンドラモンに捕捉されているだろう。
　ここからはどちらが先に有効打を打てるか。草太達がパンドラモンを見つけ出すか、パンドラモンが草太達を倒すデジモンを呼び出せるか。

***

　その答えは突如として空に現れた。

　街に降り注ぐ暖かな日差しが突如遮られる。すわ通り雨かと空を見上げれば、それはそこにあった。
　街に注ぐ太陽を覆い隠す程の巨体。地上からこそ形が分かるが、至近距離からでは形すら認識が困難であろう超大型のデジモン。それは巨大な鳥の姿をしていた。まるで島が浮かんでるかのような巨大な鳥だ。
　そのサイズによる存在感はこれまでのどんなデジモンの比ではない。

　”ケレスモン！オリンポス十二神族の一体に数えられる巨大怪鳥型デジモン！必殺技は巨体を相手に叩きつけるアイランドフリーフォール！！”

　当然ながら草太たちも即時集合している。あれほどの巨体に気づかない方がおかしい。
　まずテイルモンから情報共有がなされる。かの巨大デジモンの来歴である。

「究極体が何だって？」

　先日自信満々にあり得ないと断言した言葉がテイルモンに突き刺さる。
　が、予想外の自体など今更問題にしても仕方がない。

「オリンポス神族とかいう大層なデジモンでも操られるのは防げないものなのか？はっきり言ってそれならかなりヤバいぞ。」
「何かカラクリがあるはずです。どう見積もっても究極体を簡単に操れるほどパンドラモンが成長しているとは思えません。」

　そうこうしている間にも、ケレスモンからは体の土くれと共に黒い靄が地上に落ちてくる。巨体からすればわずかな量ではあるが、人の身からすれば車が落ちてくるのと大差ない脅威だ。現時点では攻撃的な動きは見られない。だが、できる限り早急に対処する必要がある。

　空に座すケレスモンまではどう頑張ってもそのままでは届かない。
　練習の成果を発揮する機会が早くもやってきてしまったわけである。だが、単純に飛び回るのと、戦闘のために飛び回るのでは全く話が違う。本当にやれるのか、まさに出たとこ勝負。
　金帯を操作して足掛けを作り、手に吸着させて離れないことを確認する。

「ホーリーエンジェモン、まずは様子見だ。本当にケレスモンが操られている状態なのかをまず確認する。あれほどでかいのを呼び寄せるのと、操るのを同時にこなせるわけがない。場合によってはあの上にパンドラモンがいる可能性だってある。油断するなよ。」
「誰にものを言っている。貴様はせいぜい自分の心配でもしていろ。」

　すでにこのやさぐれ天使はやる気十分だ。言うやいなや一気に上空へと舞い上がる。

　風の音が耳を打つ。この街で一番高いビルを瞬時に抜き去り、生身の人が到達しえない高さまで一瞬だ。
　青空が一面に広がる自由の世界。だが、そこにはすべての意思を制限された存在がいる。
　ケレスモン。でかい。まるで森が浮かんでいるようだ。
　その体にはパンドラモンの悪意の象徴、ゾンビタトゥーが刻まれている。ただし、あまりの巨体に全身を覆いきれず、ところどころに抜けが見えた。これまでの経験上、タトゥーに覆われるほどパンドラモンからの干渉が強まり凶暴化していく。絶対量としてみればこれまで見たタトゥーの中で最大級だが、その巨体ゆえに相対的にはまだ余裕があるようにも見える。
　ケレスモンからは明確に敵意が向けられていないことからして、凶暴化させるにはまだタトゥーが足りないようだ。

　草太をぶら下げたホーリーエンジェモンが、様子見がてらぐるりとケレスモンを一周する。森そのものといった中央部に対して、外周部は確かに鳥らしき羽根の形が見られる。そしてその頭部、そこには巨大な鳥の顔と全身をタトゥーに覆われた人影があった。

　飛び上がる前にテイルモンに説明されたケレスモンの特徴が頭をよぎる。
　“ケレスモンは巨大な鳥の姿と女性の姿を併せ持ちます。そして、その女性の姿こそがケレスモンメディウムというケレスモンの本体です。“
　推定ケレスモンメディウムは、タトゥーに全身を縛られている。かろうじて兜や手足の鎧が見えるが、身動きが取れないほどタトゥーに縛られている。つまり本体を確実に抑えることで効率的にこの巨体を支配しようとしているようだ。

　そして、ケレスモンメディウムの前には、究極体であるケレスモンがパンドラモンに不覚を取った、決定的な理由がそこにあった。

　ホーリーエンジェモンがさらに旋回した時、ケレスモンメディウムが抱える影が見えた。
　高さにして150cm程度、恐らくは人間だ。ケレスモンメディウムに抱えられるようにしているが、刻まれたゾンビタトゥーはケレスモンメディウムよりも遥かに深く濃い黒に染められている。

　高間こより。その変わり果てた姿がそこにあった。

　パンドラモンは自らの手足としていた高間こよりをケレスモンを支配するための餌に使ったのだ。
　慈悲深き神族が一柱であるケレスモンメディウムが、哀れにも邪悪なるデジモンに苦しめられている人間を見捨てるはずがない。
　ケレスモンメディウムの前に放り出された高間こよりへ、ケレスモンメディウムが駆け寄ったその瞬間、ゾンビタトゥーを炸裂させたのだろう。
　いかな究極体とはいえ、完全に油断した状況に悪意を叩きつけられたのならばひとたまりもない。

　おそらく、あの黒い靄もタトゥーも、高間こよりの命などまるで考えていない。単純にケレスモンを縛るだけの圧をかければ人の体などひとたまりもないというだけだ。
　だからこそケレスモンメディウムは高間こよりを見捨てられない。少しでも気を逸らせば高間こよりは死ぬ。パンドラモンはこの上なく効率的にケレスモンを支配して見せたのだ。

　そして、死なない限りは使い潰すのがパンドラモンのやり方らしい。
　タトゥーに全身を蝕まれた少女の体が、パンドラモンの意思に従って腕を振るわされる。円を描くように腕を空に向けると、空に穴が開く。デジタルワールドへと繋がることのできる特異性が、パンドラモンの力を注ぎ込まれることで空間に穴を開けられるほどに高められている。空に空いた穴からは次々とデジモンが出現していく。
　人質であり、手下を生み出すための装置でもあるのだろう。

　当然、リアライズされたデジモンたちは困惑した状態である。その隙にケレスモンから伸びた黒い靄がデジモンたちを包む。瞬時にゾンビタトゥーに感染させられ凶暴化していく。たちまち空はパンドラモンの支配下となったデジモンで溢れかえる。

　早速草太とホーリーエンジェモン目掛けて殺到してくる、でかいクワガタやトンボ、角のある赤い鳥に悪魔のようなデジモン。
　それらがまとめて攻撃を仕掛けてくる。レベルとしてはおそらくホーリーエンジェモンの方が上。だが、今は草太という重りがある。ただでさえホーリーエンジェモンには飛び道具がない。8枚の翼による圧倒的な機動力ですれ違いざまの斬撃を与えるのがホーリーエンジェモンのスタイルだ。しかし草太がその機動に耐えられるかは怪しい。ましてや敵は増え続けているのだ。このままではジリ貧である。

　まずはリアライズを止めなければ話にならない。いくらホーリーエンジェモンとはいえ、際限なく増え続ける敵を相手に戦い続けることなどできない。
　ならば、第一に高間こよりを助け出す。そうすればケレスモンメディウムの手が空く。守らないとならない人間がいなければタトゥー程度自力でなんとかできるはずだ。

「ホーリーエンジェモン！あの子とケレスモンメディウムは俺がやる！お前はあいつらをなんとかしてくれ！」
「出来るならならばさっさとやれ！」

　ホーリーエンジェモンが一気にケレスモンへと突っ込んでいく。一息にケレスモンの背中にある森へと飛び込み、巨大な木々をジグザグに抜けてデジモン達を引き離しにかかる。ホーリーエンジェモンほどの機動力を持たないデジモン達は、高度をあげて先回りを行う。
　その隙に草太がケレスモンに飛び移る。勢いを殺しきれずごろごろとケレスモンの体表を転がりつつ、ケレスモンの頭部――高間こよりとケレスモンメディウムの元へと駆け出す。

　これまでの度重なる戦いで、ホーリーエンジェモンの力はパスを介して草太に蓄えられている。草太自身では金帯を操作する程度のことしかできないが、元は大天使が有する聖なる力だ。それを十分に蓄えた草太の体自体がパンドラモンへ特効的に作用する。
　だから草太自身がゾンビタトゥーに直接接触すればかき消すこともできるはずだ。なんならホーリーエンジェモンと共振している状態であれば、一気に消し飛ばすくらいの効果はあるはず。

　ケレスモンの背中に生い茂る森は思ったよりはさっぱりとしている。足を取られるような低い草木はない代わりに、でこぼこと木の根が這いまわり足元は非常に悪い。だが、これまでの戦いは草太自身をも大いに鍛え上げていた。広い面を一度に認識する空間把握能力、自身の体をイメージする通りに動かす集中力、走り抜けるだけの体力と脚力。
　まるで舗装路を駆け抜けるかのような速度で森を抜け、一気に首を渡って2人の元へと走る。

　先に気がついたのはケレスモンメディウム。身動きの取れない中でも、わずかに唇を震わせる。

　‘この子を、お願い’

　全身を黒い靄で締め付けられながらも、自らよりも人の無事を願う。確かな善意を持って人を助けようとするその意志に応えたいと思う。だから答えは一つだ。

「任せろ。」

　なんとなく、試合のことを思い出す。先に点を取られたり、逆転を喰らったり、コーナキックにPK。ピンチの時もチャンスの時も、ボールが回ってくると、みんなから声がかかる。
“頼む！”
“なんとかしてくれ！”
“やっちまえ！”

“行け！”
　いつだって答えは一つだ。任せろ。ただ一言でいい。
　期待に応えられることも、応えられないこともあった。だが、諦めたことはなかった。
　どんなに勝ち目が薄くとも必死に足掻いて状況を動かしてきたのだ。

　だから、今回もなんとかしてみせる。なんといっても、自分には大天使がついている。これほど心強いことなど、ない。決して言葉にすることはないし、認めることはしないけれど。

　真っ黒に染まった人影――高間こよりへ手を伸ばす。腹の底に力を込めて、ホーリーエンジェモンから預かっている力を溢れさせるように。かの大天使と比べれば遥かに弱く、それでも人の身に余るほどの聖なる光が草太の体を包む。その光は、少女を包む黒をも照らす。肩へ触れると、触れた先から少しずつ黒が薄まっていく。これならば行けそうだ。なんとかできる。

　その希望をパンドラモンは待っていた。

　瞬間、少女の身体から膨大な量の靄が溢れ出し、草太を飲み込んでいく。

****

　真っ暗な光のない世界。ぼんやりと思考がまとまらない。目の前どころか自分の手さえも見えないような暗闇。なのに自分がぽつんと立っているのが分かる。
　ここはどこだろうか。
　そう考えた矢先に、てーんとボールがバウンドする音が響く。
　ボールが転がっているならそこはコートだろう。草太の記憶に馴染むその音が、現在地を形作る。
　青々とした芝生。白線に区切られた長方形のコート。短辺側にはゴールがある。相変わらずコートの外は真っ黒いままだが、それでも今どこに自分がいるのかがはっきりとした。

　自分がコートにいるならそれは試合中なのだろう。そう考えた瞬間に現れて自分の元に集まってくるチームメイト。全員の名前も顔も知っているはずなのに、誰1人として顔がわからない。真っ黒に塗りつぶされた顔のチームメイトが草太の肩を、背中をポンと叩く。いつものじゃれ合いが、次第に形を変えていく。チームメイトの輪郭が少しずつ緩んで、草太へと纏わりついていく。真っ黒い液体へと変わっていくチームメイトに、全身を押し込まれて立っていられずにコートに転がされる。

　気がつくと膝を抱えて痛みに苦しむ自分がいた。草太にとっての悪夢の瞬間がそこにある。もう何も考えられていない。痛みに思考は乱され、歩けなくなる恐怖に心が震え、ボールを蹴られなくなる事実に身体が怯える。
　顔のないチームメイトが草太を無理やり立たせる。腕を取り、ボールの前に引きずり出す。
　そのボールの先にはゴールがある。あの時、もし自分が蹴ることができたなら、あの試合に負けることはなかった。もっと先に行けていたはずだった。全国制覇だってできるはずだった。それを台無しにしたのが自分だ。膝を壊したなどと、そんなのは言い訳だ。本当に強い選手だったのな

ら、壊すことなんてなかったはずだからだ。
　チームメイトが草太を前に押しやる。このボールを蹴るのはお前だと、その行動が告げている。

　お前のせいで負けたのだから、お前が蹴らないといけない。
　自分のせいで負けたのだから、草太が蹴らないといけない。

　だが、草太の足はすでに折れ曲がって、まともに立つこともできない。
　痛みがひどくて堪えるので精一杯だ。何より、心の底から怯えている。かつてそうであったように、草太は痛みの先に諦めを見ている。もうまともにボールを蹴ることはできないという恐怖が、際限なく痛みを加速させる。

　“なぜ蹴らない。お前が蹴るべきだ。お前はサッカーなしではただの役立たずだ“

　草太の心の底から声が聞こえる。顔のないチームメイトは草太自身の怒りだ。
　役立たず。その通りかもしれない。あれだけ大口を叩いていても、怪我一つで折れる心だ。その程度の男が、何を為せるものか。諦めて俯くその直前、視界の隅に映るものがある。

　一瞬だけ、この暗闇を切り裂くように、金の流星が流れた。

　あの光はなんだっただろうか。焦点のぼやけた思考が光を捉える。すると途端に不愉快な気持ちが湧き上がる。上から目線の自分勝手な声が聞こえる。

「私に働かせて自分は居眠りとは、無能もここまでくると呆れてものも言えんな。」

　いつの間にか聞きなれてしまった声が、草太を嘲る。忌々しいことに、今までのどこの誰よりも、はっきりとその声が聞こえてくる。
　居眠り？自分がか？こんな状況に押し込まれているというのに、こちらの苦労も知らないで。

　怒りが心に火をつける。
　折れた心を舐めるように怒りの火が広がっていく。

　なぜ蹴らないのかだと？怪我をしたからだ。見ればわかるようなこと長々とさえずる外野にも怒りが向く。なぜ蹴れないのか。怪我をした時の痛みがよみがえるからだ。

　なんで諦めたのか。――痛みに心を折られたからだ。

　ああそうだ。自分は諦めてしまった。絶対に治すと心に決めたのに、必ずもう一度フィールドに立つと誓ったのに、たかが痛みに膝を屈したのだ。
　うるさい外野の声が鮮明に聞こえてくる。これは自分の声だ。自分自身を呪う声だ。

　ならばやってやる。折れた心ならもう消し炭だ。一度諦めたからなんだというのか。
　いい加減頭に響くこの声を黙らせてやる。

蹴れとというのなら、存分に蹴ってやる。この長峰草太、一世一代のシュートを見せてやろう。

無理やり草太を立たせていた影を振りほどく。右ひざの痛みは絶えることはないし、震えるほどの恐怖が体を満たす。だが、それはもう草太にとって、すでに理由にならない。
あの鼻持ちならない天使に言われるだけでいていいものか。
ひん曲がった足は戻ることはなく、ぶらぶらと思うとおりに動かない。だが、そんなことはどうでもいい。なにせ最後のシュートだ。多少の無茶もこれが終いなら押し通せる。

一歩踏み出す。それまでの何もかもを忘れて、自然と体が動く。かつての自分より大きく育ったその体が、その心の望むとおりにイメージをトレースする。
そこに雑念など入り込む余地はない。流れるように無駄のない、力強いフォームで右足が振りぬかれる。
白黒のボールは線を引くかのようにまっすぐにゴールへと吸い込まれる。

ボールはゴールを越えて、そのままこの暗闇に突き刺さる。まるでゴムのように空間が引き延ばされ、限界を越えて世界が引きちぎられる。
その先には顔を靄で包まれた入院着の少女。ボールはそのまま少女の顔に直撃し、靄を弾き飛ばす。そして倒れる少女。流石に女の子の顔面に直撃はヤバい。慌てて草太が駆け寄る。

「だ、大丈夫か？！」

草太が少女を抱え起こす。わずかに声がもれるだけで意識がないままだ。
突然笑い声が響く。少女ではない。声の元を辿ればボールに弾き飛ばされていった靄が、宙に浮かんでいる。
靄がぐるぐると動き、それは次第に目となった。草太とその目が合う。

こいつがパンドラモンか。ようやくの対面だ。話だけは聞いていたが、会うのは初めてだ。言いたいことは山ほどあるが、今はそれどころではない。少女の状態もそうだが、外ではホーリーエンジェモンが戦っている。すぐに自分も向かわなくてはならない。

「悪いとは言わないし、思ってもないけど、この子はもらっていく。お前の悪だくみも俺たちが叩き潰す。」

目だけがにんまりとうれしげにゆがむ。
草太が強く左手を握る。先程まで感じていなかった感触、スマートフォンがあることを知らせる。瞬間あふれる浄化の力。パスを介して現れるホーリーエンジェモンの力が、草太と少女を包み込む。
少女が身じろぎをして、目を覚ます。靄を警戒しつつも、草太が少女と目を合わせる。

「――、」

掠れた声は言葉を成していない。できるなら水を与えて、ゆっくりと話を聞いてやりたいところ

だが、今はそれどころではない。まして、少女がどういう状態だったのかも定かではない状態で下手なことも言えない。

「悪いけど君の言葉を待っていられない。状況が悪い。だから一つだけ聞く。俺は君を助けたいと思う。だから俺に、君を助けさせてくれないか？」

　少女はじっと草太の目を見つめる。口はうごけど声は出ない。だが、少女は小さく、震えながらも、うなづいた。
　スマホをパーカーのポケットにしまい、左手を高く上げる。少女を抱き止めたまま、草太は叫ぶ。

「ホーリーエンジェモン！！」

　吹き抜ける風と共に闇を切り裂きホーリーエンジェモンが現れる。草太が掲げた手を取リ、草太と少女は一気に青空の元へと引き上げられていく。
　草太の腕の先、少女を見てホーリーエンジェモンが目を細める。しかし何も言わずに力強い羽ばたきのまま、二人をケレスモンから引き離していく。

　少女という人質、そしてタトゥーの供給元が失われたことで、ケレスモンメディウムがタトゥーを引きちぎるように吹き飛ばす。しかし、ケレスモンの巨体に刻まれた領域は広すぎた。ケレスモンメディウムが力を取り戻してもなお、ケレスモン自身のコントロールを取り戻すことは容易ではないようだ。
　ケレスモンメディウムは胸の前で手のひらを組み、ゾンビタトゥーの影響を切り離そうとしている。だが、パンドラモンの抵抗は激しく、主導権を簡単には明け渡そうとはしない。

　その隙に、ホーリーエンジェモンと草太、そして少女は一度地上に降りることにする。さすがに助け出したばかりで弱っている少女を巻き込むわけにはいかない。

　雑居ビル屋上に降り立つと、テイルモンが駆け寄ってくる。その目は少女に向いており、鋭い視線は明らかに敵対者へ向けるものだ。実際状況は明らかにクロ。どの程度意識があったのかはわからないが、今回の事件の元凶ともいえる人間であることには間違いがない。だがそれでもまずは話を聞くところからであるべきだ。
　機先を制するため、草太がテイルモンへと告げる。

「俺たちが、助けた子だ。」

　じっとその場でテイルモンは草太を、そして少女を見つめる。

「……わかりました。あなたたちが助けた子を、私も助けます。」

　ホーリーエンジェモンの金帯から降りると、抱えていた少女をゆっくりと床へとおろす。名残惜し気に首に回されていた腕が離れる。

「俺たちはあれをなんとかしないといけない。だから、君のことはそこの猫もどきが見てくれる。話は後で必ず聞くから、待っててくれ。」

　背後ではテイルモンが猫もどき発言に目を丸くしているが、いちいち構ってはいられない。事実だからである。
　ともあれ上空ではケレスモンが悶えている。この隙に何とか対処するしかない。

「行くぞ。」
「ああ。」

　再びホーリーエンジェモンの金帯に手をかけて、空へ向かう。最後に一度少女に目をやり、あとは振り返らない。

　空に飛び交うデジモン――少女が呼び出した者たち――は、ずいぶん数を減らしている。

「ずいぶん張り切ったな。」
「誰かが役に立たなかったからな。」

　残りのデジモンを落としながら、少しずつケレスモンへと近づいていく。呼び出したデジモンはせいぜいが成熟期。すでに大多数を落としている以上、草太という重しがあったところでホーリーエンジェモンの敵ではない。

　残る戦力はケレスモンのみ。パンドラモンとケレスモンメディウムとの主導権争い次第ではすでに決着がついている可能性もありうる。
　だがその程度で終わるほど容易くもない。突如としてケレスモンから溢れる黒い靄。これまでにない濃度で、ケレスモンの巨体すら覆い隠すほどの量が吹き出続けている。街の人からみれば突然雷雲が現れたようにも見えただろう。それほどまでに勢いよく靄が噴き出ている。

「ケレスモンが負けたか。」
「だろうな。でもケレスモンメディウムには高間を助けてもらった借りがある。できる限り助けたい。なんとか出来るか？」

　雷雲と化したケレスモンを眼前に、今後の動きを相談する。仮に完全に乗っ取られたとするならば、対処は難しい。ケレスモンを覆い尽くすほどの靄を完全に除去するのにどれくらいかかるか。それが分かるから、2人の表情は冴えない。

　と、黒い靄をかき分けて何者かが飛び出してくる。咄嗟に構えるホーリーエンジェモンに対し、ゆるっとした声がかかる。

「おっと、攻撃するのは勘弁してほしいね。せっかく命からがら逃げ出してきたところだからねぇ。」

「ケレスモン…か？」
「うん、私はケレスモンメディウム。どうぞお見知りおきを。と、そちらの少年は先程ぶりだね。彼女は無事助かったかな？」

　トサカのような兜に金色に輝く鎧、それに対してやけに薄着の胴体。どうにもメリハリの効きすぎた姿だ。最上位の実力を持つという究極体だというのに、やけに気さくな口調であることに戸惑うものの、彼女の無事を伝える。

「そうか、それはよかった。なら、これで全員無事ということになるね。」
「ん？中にはまだケレスモンがいるんだろ？」
「ああ、ケレスモンならここだよ。」

　見ればケレスモンメディウムが小脇に抱えているのはデジモンである。その見た目はケレスモンの姿をしている。ただ大きさに果てしない差はあるものの、どうやら本体とも言うべき体を無事に取り戻せたらしい。

「心配してくれてありがとうね？ただこれでも私たちはデジモンなのだよ。結構融通が利く体なのさ。ただ、問題もあってね。」

　明らかに厄介ごとだ。ますます顔をしかめるホーリーエンジェモン。草太も似たり寄ったりの顔だ。

「遠慮ないねぇ、君たちは。ともかく、私たち本体が抜けたとはいえ、体は残ってしまっているんだよね。おまけにあの黒い靄はばっちり残っているわけなんだよ。できれば全身取り戻したかったけれど、完全に主導権を取られてしまってね。」

　ケレスモンメディウムの言う通り、黒い靄が薄れていくに従って、タトゥーに全身を縛られたケレスモンの肉体が見えてくる。

「なあ、テイルモンが言ってたケレスモンの必殺技、なんて言ってたか覚えてるか？」
「テイルモンとやらは知らないけれど、私の必殺技ならアイランドフリーフォールだね。全力で体当たりをするんだ。そうすると爆風と衝撃で相手をメチャクチャにすることができるよ。」

　思わぬところから答えが返ってきたが、問題はその中身である。
　当人のいうことには、ほぼほぼミサイルである。このまま地上に直撃すれば、冗談抜きで消滅する。それを許すわけにはいかない。

　ケレスモンメディウムに改めて向き直る。見れば身体中がボロボロである。金の鎧は煤けていて、長い桃色の髪も埃にまみれて輝きがない。抱えられたケレスモンも心なしか元気がなさそうだ。表面に生えた苔もところどころ毟られていて10円禿になっている。
　つい先程まで、名前も顔もわからないような見ず知らずの少女を守り続けていたのだ。ひたすら打ち付けられるタトゥーを相手に、あの少女は傷一つなかった。慈悲深き十二神族が人柱。弱きも

のを決して見捨てることのない、慈愛の化身。
　ケレスモンメディウムは無事に脱出だと言うが、緊急脱出として本体から抜け出すのが容易いことだとは思えない。まともな手段ではないはずだ。消耗した彼女にこれ以上の負担をかけたくはない。本来二人が助け出すべきだった少女を守り続けてもらった借りもある。
　何より、これは草太とホーリーエンジェモンがやるべきことだ。
　慣れない敬語でケレスモンへと告げる。

「ケレスモンメディウム。あとは任せてください。俺たちが何とかします。
下にテイルモン――猫みたいなのがいるので、状況とか説明はそっちに。デジタルワールドへの帰還についても助けになるはずです。」

　だが、ケレスモンメディウムはすぐには動かない。目こそ隠れて見えないが、試すような視線が草太とホーリーエンジェモンに絡むのを感じる。不覚を取ったとはいえ、その身は究極体だ。これほどまでに消耗した状態であってもなお、草太とホーリーエンジェモンでは相手になるまい。だからその目は二人を捉えたまま、お前たちにできるのかと、そう問いかけている。圧倒的な格上からの、文字通りの上から目線。
　ホーリーエンジェモンは不愉快げに鼻を鳴らすが、大一番を前に無駄な喧嘩を売ることはしたくないらしい。実力が劣っているのを認めたくないだけかもしれないが。視線を無視して抜け殻のケレスモンの体を眺め始めている。
　しかし草太は目を逸らさない。
　やがてケレスモンメディウムが表情を戻す。

「じゃあ、お願いね。」

　そう言うとさっさと地上へと降りていく。
　残ったのは、二人。大天使、ホーリーエンジェモン。その契約者、長峰草太。まるで気の合うところはなく、口を開けば喧嘩しかすることがない二人だ。だが、パンドラモンからこの街を守り続けてきた二人だ。

「じゃあ、やるか。」
「ああ、やるぞ。」

　いつもの如く、ホーリーエンジェモンがエクスキャリバーを申請する。それを草太が即時承認。この街を守るために手を組む。仕方なくそうするのだと、お互いがポーズを取らざるを得ないくらい、2人の目的は一致している。
　早くも草太とホーリーエンジェモンの間で共振励起が始まる。降り注ぐ陽光に負けない輝きがホーリーエンジェモンからあふれ出す。共振によって増幅される力は完全体の枠に収まらない。まるで流星のように光の尾(ぶら下がる草太のことである)を引きながら、抜け殻となったケレスモンへと突貫する。

　ケレスモンから伸びる黒い靄が、二人を迎撃せんと向けられる。
　何十とケレスモンの体から伸びる腕は、まるでヘビの頭だ。時に重なり時に分裂するその蛇は、

変幻自在に宙を蠢き二人を毒牙にかけんとする。
　だが、その二人こそが対パンドラモンの専門家である。たかが腕が増えた程度のことで怯むことはない。

　黄金の剣が尽くを打ち払っていく。まるで三日月のような残影が空に浮かび上がり消えていく。切り裂かれた蛇は元の靄に戻り、別の蛇に取り込まれて形を取り戻す。末端の靄をいくら切ったところできりが無い。
　燕のごとき急激な切り返しを幾度も繰り返して、ケレスモンの抜け殻へと向かう。
　懐へ入り込み一撃を加えつつ離脱する。ホーリーエンジェモンの得意とする一撃離脱戦法である。
　幾重にも重なる黒い靄をすり抜けて、ケレスモンの抜け殻へと長く大きい傷跡を作る。
　手ごたえはある。しかし、ケレスモンの巨体からすればせいぜいがかすり傷。ましてや抜け殻相手である。ゾンビタトゥーを使った操り人形相手では、傷を与えたところで痛みにうめくことすらないのだ。

　黒い靄は、無数にのたうつ蛇のように二人を襲い続ける。
　時に華麗に、時に無様に避け続ける2人だが、このままではジリ貧である。こちらの体力が尽きるのが先か、ケレスモンが地上に激突して街が壊滅するのが先か。
　ケレスモンの高度は徐々に下がってきている。体力も時間もない。

　この大質量の爆弾をなんとかするには、ヘブンズゲートしかない。それも、この巨体を飲み込めるような特大のゲートがいる。
　通常は浄化のためにデジタルワールドへつないでいるが、まさかこれを送るわけにはいかないので、本来の亜空間への接続だ。ホーリーエンジェモンがパンドラモン追撃として選ばれた最大の理由、二度と帰ることのできない亜空間への門を開くこと。それ以外に勝ち筋はない。

　だが、その力の行使をパンドラモンが許さない。
　そもそもとして亜空間への門を呼び出すこと自体が極めて高度な技である。当然のことながら片手間にできるようなものではない。これまでの戦いでも、ヘブンズゲートを直接攻撃に使用することはなかった(浄化を優先していたという理由もあるが)。ましてや、十重二十重にと振るわれ続ける攻撃をよけながら使える技ではない。

　金帯にぶら下がるしかできない草太としては歯噛みするしかない。何かで気を引こうにも、そもそも上空遥か高みである。手元にあるのはせいぜいがスマホである。まさかこれを投げるわけにもいかない。草太がいなければホーリーエンジェモンは全力を発揮できないが、草太が今現在重りにしかなっていないことも事実だ。せめて少しでも弱みを見つけようと目を凝らす。
　何十と繰り返した回避行動のあと、大きくエクスキャリバーを振るい巻き起こした風を壁にして、ホーリーエンジェモンはケレスモンから距離を取る。そして金帯ごと草太を引き上げて告げる。

「私が避けている間に貴様がヘブンズゲートを開け。」
「ゲートを？――使えるのか？」

「逆承認だ。せいぜいうまく使って見せろ！」

　ヘブンズゲートを草太が開く。確かにホーリーエンジェモンとパスによってつなげられ、力のタンクとなっている草太にはそのための力が蓄えられている。ましてや共振によって増幅された力である。理屈としては使えないはずがない。

　スマートフォンの承認システムは草太からの申請は想定されていない。人間が持つ力などたかが知れているからだ。だが、それでもパスは繋がっている。草太からあふれた力を石に込めて投げたことだってある。先ほどだってこの力を使って高間こよりとケレスモンメディウムを救い出したのだ。ならばできない道理がない。

　ましてや、ホーリーエンジェモン自身がそれを承認するのである。何度ともなく繰り返した動作を逆転させることなど、ホーリーエンジェモンからすれば容易いことだ。

　いつもと少し違うバイブレーションが草太のスマートフォンを揺らす。ゲートの使用許可、それが通ったのだ。
　ホーリーエンジェモンの回避行動で盛大に振り回されながらも、通知を開き確認する。そこには確かに承認の2文字。
　少し画面に文字化けが見えるが、大したことではない。
　大事なのは、画面中央に浮かぶただ一つの単語だ。

"ヘブンズゲート"

　臆することなく選択肢をタップする。
　画面が切り替わり、ゲート生成位置の設定画面が映る。カメラを利用してゲートを開く場所を決めるらしい。スマホの画面に映る真っ青な空には遠近感がない。まさか目の前に開くことはないだろう。が、念のためケレスモンよりさらに上空を映す。
　カメラがピントを合わせるように、ヘブンズゲートを生成するための力が一点に集中していく。それは草太の身体を通り力の焦点へと向かう、莫大な力の流れだ。
　体中が焼けるような熱を感じる。システムの想定範囲外である故の異常が現れているのか、単なる負荷に発熱しているだけか。どちらにせよやめるという選択肢などない。

　スマートフォンを握りしめ、空のただ一点に意識を集中する。

　靄による攻撃も、躱す時の動きも既に草太の頭にない。少しでも意識が振れたら門が発散する。誰に説明されるでもなく、草太にはそれが分かった。パスを通じて送られてくる、ホーリーエンジェモンからのフィードバッグかもしれない。力の使い方、流し込み方、それら全てを薄氷を踏むように静かに丁寧に進める。
　そして門を現出させる時が来る。ここまでくればケレスモン――パンドラモンも事態に気が付いている。空気が歪み、光が曲がるほどの圧力が、空に満ちている。ケレスモンから伸びる靄も、抜け殻に戻り警戒状態となっている。だがどれだけ警戒したところで無駄である。

　草太はスマホを空にかざしたまま、大きく円を描く。その軌跡の先、天空に巨大な黄金の円が現れる。円は厚みを増し、周縁にはデジタルコードが刻まれていく。閉ざされた門は、遥かなる亜空間とこの世界とをせき止める鋼の壁だ。
　顕れたヘブンズゲートはケレスモンすら容易く通り抜けられるほどの威容を誇る。文字通り草太とホーリーエンジェモンの切り札、最後の一手である。

　この大いなる門が、重低音を響かせて開かれていく。

　ここが勝負どころである。草太は一気にゲートへと力を注ぎ込む。体を通り抜ける力の流れは燃えるほどの熱だ。莫大な力の元、ヘブンズゲートが開かれていく。亜空間からの引力が強まっていき、その直下に位置するケレスモンの抜け殻を引き寄せていく。いくら羽ばたこうと、石くれの翼がパンドラモンに応えることはない。第一、翼は空に上がるためにあるのだ。門が直上に開かれている以上、ケレスモンの抜け殻がゲートから逃れる術はない。

　しかし、相手は抜け殻でもあったとしても究極体である。ましてやパンドラモンの力を十分に蓄えているのだ。草太とホーリーエンジェモンがなす強力な意思を束ねた共振励起に対し、幾多のデジモンや人々へ与えた恐怖と苦しみ、その負の感情を吸い取り束ねたゾンビタトゥー。対照的な二つの力がせめぎ合う。

　力の綱引きはケレスモン――パンドラモンに軍配が上がる。

　ヘブンズゲートの引力ではケレスモンを取り込むには足りない。どれだけ食いしばろうと、力を捻り出そうとも、草太が開くヘブンズゲートでは力が足りない。

　街の人々は今怯えているのだ。上空に得体のしれないバカでかい鳥が現れ、今にも落ちてこようとしている。かと思えば謎の円盤がその鳥を引き寄せんと得体のしれない力を放つ。その引力はわずかながらにも、地上にまで影響を与えている。
　これで怯えるなという方が無茶である。見えるのは黒い靄を吐き出すケレスモンだ。怪物がやばそうなことをしている。それだけだ。わずかにホーリーエンジェモンに気がつく人はいても、あまりの質量が不安を煽る。

　どれだけ強い意志であっても、ただ二人だけの力だ。対してパンドラモンはおびえる人々の負の感情をすすり、わずかながらでも力を増し続けている。弱い力であっても束ねれば大きな力に成るのは自明だ。草太の力ではパンドラモンにかなわない。

　だからホーリーエンジェモンが猛り、声を放つ。

「突貫する！！」

　光を纏いケレスモンの抜け殻へと突撃する。エクスキャリバーすら収め、ただケレスモンの抜け殻を押し込んでいく。ゲートによる引力とホーリーエンジェモンの圧力。
　草太だけでは足りずとも、ホーリーエンジェモンがいる。

　たった二人ではあるが、お互いに対しては呆れるほどの意地を以て、いくらでも虚勢を張れる二人だ。
　どれだけ食いしばろうと動かなかったケレスモンが、ゲートによる引力と、ホーリーエンジェモンの押し込みで徐々に動き始める。光が巨大な怪物を押し返す。その光景に少しずつ人の心に希望が灯る。

　少しずつでも確かに勝利が近づいている。
　ケレスモンの全身がゲートを越えたとき、二人の心が緩んだ。
　あと一息で街を守りきることができる。その希望が油断に繋がった。

　敵はケレスモンの抜け殻を操るパンドラモンである。その意志は、ケレスモンではなく、身体に刻まれたタトゥー、そして黒い靄である。
　それまで縮こまって動かなかった黒い靄が、突如として膨れ上がり、ゲートの縁をつかむ。まるで蜘蛛の糸のようにベッタリとゲートに張り付き、逆に門から這い出ようともがく。靄はゲートの稼働部までも塞いでおり、ゲートを閉じることすら出来なくなっている。

　あとはゲートを閉じさえすれば終わりだった。にも関わらず、些細な油断が致命的なミスを生んだ。

　ゲートに取り付いた靄を切るだけでは足りない。切られた端から即時再生を繰り返し、逆に靄の範囲が広がる始末。エクスキャリバーの切れ味が仇になった形だ。
　これほどのサイズのゲートは長く持たない。
　ケレスモンの抜け殻ごと靄を叩き込む方法を見つけなければならない。

　ホーリーエンジェモンが、一つだけ見つけた勝ち筋に逡巡を顕にする。現実から背けるように、それでも思わず草太に目を向ける。

　にやりと草太が笑う。

「あれ、何かに似てると思わないか。」

　指し示す先にはケレスモンの頭だった部位に集まる、ゾンビタトゥーの塊。光を吸い込むような黒が球状に固まっている。

「……サッカーボールか。」
「俺が飛び出したら、エクスキャリバーでゲートをつかむ黒い手を切れ。俺はあのボールをゴールに叩き込む。それでゲームセットだ。」
「お前の人生もそうなるな。」

　ホーリーエンジェモンが開くゲートだからこそ、その威力はよく知っている。ゲートをくぐればもう戻ることはできない。

「そう思うならもう一つくらいゲート開いてみせろよ。さあ、行くぞ！！」
「貴様ッ！」

　有無を言わせずにホーリーエンジェモンの金帯を蹴ってゲートの先、ケレスモンへと飛び乗る。ゲートは強力な引力を発揮しており、まるで空へ落ちるように引き寄せられていく。
　ケレスモンの抜け殻を一気に駆け上る。元々が巨大な体ではあるが、今の草太ならば、ゾンビタトゥー、いや、あのボールまで3秒もかからない。

　止める間もなく飛び出した草太を目で追うこともなく、ホーリーエンジェモンはエクスキャリバーを構える。
　自分勝手な草太の行動にカチンときた。それしか選べない自分の無力さに腹が立つ。
　なにより、草太ならなんとでもしてしまうだろうという希望を感じた自分自身に、はらわたが煮えかえるほどの怒りがある。

　ケレスモンの巨体は土と草に覆われている。草の高さはまちまちだが、膝を壊す前に走っていたグラウンドを思い出す。膝の治療中にあれほど焦がれたグランドではなく、バカでかいデジモンの背中を走っている。なんの因果というのか。多分あの腐れ天使との腐れ縁だろう。
　これから蹴りこむボールだって、検定球どころか邪悪な力の塊だ。おまけに叩き込むゴールは亜空間そのもの。
　自分でもあきれるような、空想じみた現実だ。

　それでも高揚する気持ちがある。体は覚えている。ただボールを追いかける喜びを。あれほど焦がれた瞬間がここにある。さっきは最後のシュートなんて言ったけど、あれは嘘だな。まだ、諦められない。

　ホーリーエンジェモンの力と、ゲートの引力に任せて一気に飛び上がる。宙に飛び出した体は草太のイメージと寸分違うことがない。自分自身を十全にコントロールする感覚。草太の望み通りの軌跡をたどって、草太の右足が邪悪の塊へと叩きつけられる。
　ジャンピングボレー。かつてプロのスーパープレイにあこがれて泥だらけになるまで練習したそのシュートが、誰にも知られることのない空の上で振りぬかれる。

　草太が飛び上がる瞬間を目に焼き付ける。場合によってはこれで草太自身が消えてしまう可能性がある。ならば最後まで見届けること。それが自らに課せられた義務であるとホーリーエンジェモンは考える。
　遠目にも草太が笑っているのが見えた。今まで見たどの瞬間よりも、生き生きとした表情を見せている。これが本来の草太そのものなのだろう。その瞳の輝きは、亜空間の中にあってもひときわに目立つ。

　言葉にすることのない、その時感じた全てをエクスキャリバーに込めていく。すでに余力など残ってはいないが、それでもこの湧き上がる感情が力となって応える。

　そして、しぶとくゲートをつかむ黒い腕に向けて、エクスキャリバーを振るう。

スッとすくい上げるような切り上げから、半身を返して振り下ろしの一撃を放つ。
その剣の軌跡は真円を描き、黒い腕を両断する。

右足が描く軌跡、剣のきらめく光。二人の一撃には刹那のずれさえなく、パンドラモンの力を削ぎ、蹴り飛ばす。
力の根幹にシュートを叩き込まれ、まともに靄を作ることすらできずに、パンドラモンの力の残滓とケレスモンの抜け殻が亜空間へと落ちていく。

そして、草太も浮き上がったまま寄る辺もなく、亜空間へと吸い込まれていく。
上も下もなく、いつかテレビで見た宇宙飛行士のように、無重力じみた動きでくるくると回転している。一瞬ゲートの向こう側にホーリーエンジェモンを見た。草太に向けて手をかざしている。

ホーリーエンジェモンがどんな顔をしていたのか。遠すぎて草太にはよく見えなかった。飛び込んだことに後悔はない。ただ、それを見られなかったのは惜しいな。そんなことを考えた。
最後に何かに引っ張られる感覚を覚えて、草太の意識は暗転した。

5．残ったものたち

この街の空を覆い隠すほどの巨大なゲートが閉じていく。呆れるほど巨大な怪鳥は、それを上回る巨大な門に引きずられていった。
ゲートからは地響きすら生ぬるいような大きな音がしている。ゴゴゴと肌すら震える響きが続き、最後にゴンとひときわ大きく響いたのが終わりだった。

ゲートが消えた後には何もなく、ただ青空が広がっている。あれほどまで激しい戦いがあったことを微塵も感じさせない、穏やかな風だけが吹き抜けていく。
その空からホーリーエンジェモンがバサバサと翼を羽ばたかせて降りてくる。

テイルモンは、高間こよりを支えながら見ている。
ざっざと音を立てて着地したホーリーエンジェモンは、二人の前を無言で通り過ぎ、ビルの間際、フェンスを叩きつけるように蹴り飛ばす。がしゃんと大きな音が響く。ビルの間で反響するその音は、徐々に薄れ消えていく。
息を荒げたまま、肩を上下させて、憤懣やるかたない様子で何度も深呼吸を繰り返している。その横に草太の姿はない。

いるはずの人間がいない。ここにきてテイルモンもただの空白が、嫌な予感に変わっていく。
ぼんやりとそれを見ている高間こよりはまだ状況を理解していない。
一足先に降りてきていたケレスモンメディウムは目を伏せている。

どれくらいの呼吸を重ねたのか。ホーリーエンジェモンがテイルモンたちへと向き直り、歩いてくる。
ごくりとテイルモンは唾をのみ、尋ねる。

「そ、草太さんは、どうなりましたか？」
「知らん！ああ、奴がどこにいるかなど私が知るものか！！あの考えなしの唐変木め！！」
「ホーリーエンジェモン！落ち着きなさい！……私たちには状況が見えていません。あなたには、説明する義務があります。いいですか、もう一度聞きます。草太さんは今、どういう状況にありますか？」
「……黒い靄の腕がヘブンズゲートを防いでいた。黒い腕を切るだけでは足りなかった。だから、奴がパンドラモンの力の塊を直接蹴とばしに行った。ゲート送りを完遂したが、やつはゲートの中からは出てこれなかった。」
「では草太さんは……。」

　思わずテイルモンは口をはさむ。できればその先は聞きたくなかったからだ。気難しいところはあるが、やさしさと強さを持つまっすぐな少年だった。
　彼が失われたなどと、そんな言葉をホーリーエンジェモンからは聞きたくなかった。

「……話を聞け。聞いたのは貴様だろう。あいにく奴ならデジタルワールドだ。ゲートの中にもう一つ、ヘブンズゲートを開いた。接続先は普段の通りだったが、二重のゲートなど初めてだったからな。デジタルワールドのどこにつながったかまではわからん。だが、確実に、デジタルワールドへ送った。確実にだ。」

　テイルモンの力が抜ける。

「まあ、悪運の強いやつのことだ。どこか適当なところに放り出されているだろうよ。」

6．おいでませデジタルワールド

　ピピピと鳥の鳴き声。瞼を明るい光が刺激する。
　うっすらと目を開ける。寝起きでぼやけた視界には黄色い熊が映る。
　……そんなことがあるか？
　何度か目を瞬かせるが、結果は変わらない。

「おや、起きたみたいだね。話せるかい？」
「……、ここは？」
「ふふふ、そうだね。きっとそうだと思っていたけれど。」

　眉を顰める。状況もわからないままに勝手に自己完結されるのは不快だ。まして起き抜けで禅問答などしたくはない。

「ああ、ごめんよ。そうそうあることではないから興奮してしまった。」

　やけにコミカルな動きの熊である。

「まずは自己紹介からとしよう。私の名前はもんざえモン。どうぞよろしく。そしてここはおもち

ゃの街。まあ街はずれの街道になるね。いや、君の知りたいことはそれではないか。つまり、ようこそ、デジタルワールドへってことだね。」

続く！

〇バディ３話　草太とデジタルワールド

　1．おもちゃのまちっていい感じ

　だだっ広い草原に気持ちの良い風が吹く。膝下くらいの高さの草が風に撫でられてさざ波のように揺れる。
　草太の住む街ではまず見られない光景だ。ここにサッカーコートを作るとしたら何面分に当たるのか。広すぎて逆に見当がつかない。
　草原から先に目をやれば、北には白く雪を被る山脈がそびえ立つ。日の光を反射してここからでも眩い白が峰と空を隔てている。
　南はといえば黒煙噴き上げる山々。大気の揺らめきがここからでも分かる。人の視界に入る程度の距離なのに、南北の風景は呆れるほど変化が大きい。
　つい先ほどまでいたリアルワールドでは考えられない極端さ。確かにデジタルワールドに来たのだと、否応なしに感じる。

「じゃあ、まずはまちに行こうか。」

　デジタルワールドの水先案内はもんざえモン。ここに飛ばされてきて、初めて会ったデジモンだ。
　傍目には黄色い熊のぬいぐるみ。草太よりも少しだけ低い身長で、背中にはチャックがある。柔らかそうな体であっても背筋をしっかりと伸ばして歩く。
　生真面目さを感じる立ち振る舞いの一方、ぽてぽてと足音は妙に間が抜けている。

　他にどうしようもないので、もんざえモンについていく。もんざえモンの言う街はすぐに見えてきた。

「あれがおもちゃのまちだよ。どうかな、なかなか素敵な街に見えないかい？」

　外観は名前の通り、まさにおもちゃのまち。色とりどりのブロックが街を作り上げている。もんざえモンの声も問いかけではあるが、一切の疑いのない口調だ。

「外からみた感じだけど、面白そうな街に見える。」

　そうだろうそうだろうと、繰り返し満足気に頷くもんざえモン。

「随分思い入れがありそうだな。もんざえモンは住んで長いのか？」

「むふふ、実はね、おもちゃのまちは私が作ったんだ。この辺りはいいブロックが採れるものだから、試しに一つ家を建てたらあとはもう止まらなくてね。まあ名前は他所から借りてきているんだけれど。」

　ブロックは採れるものか？デジタルワールドがそういう変な世界なのか、それとももんざえモンのジョークか。どちらにしても深堀りしたくはない。創設者ということが分かれば十分である。
　色々とまちづくりの苦労や蘊蓄を聞きながらおもちゃのまちまで道を行く。けもの道めいてはいるが意外と歩きやすい。ここももんざえモンが時々均しているとのこと。しかし、草原を熊のぬいぐるみと歩く。なんと牧歌的なことか。つい先程までパンドラモンとやりあって、あわや死ぬところだったというのに、このギャップに目が回りそうだ。

　おもちゃのまちへの入り口は、ひと際カラフルに彩られた門をくぐる必要があった。
　別に塀があるわけでもないので門をくぐる必要性はないのだが、自慢げに門のデザインを語るもんざえモンの手前くぐらないわけにはいかない。
　少し頭を下げてぶつからないように街へ入る。
　街のつくりはシンプルだ。まちの中心には噴水のある広場があって、広場を取り巻くように家が並んでいる。上から見たらバウムクーヘンのように家と道が交互に並んでいるのが分かるはずだ。一抱えもあるブロックで積み上げられた家は、大きさも形もばらばらだ。しかし、よくよく見てみるとまちの中心ほど家が小さくなっている。家によっては草太でも煙突を覗き込めるサイズだ。

　デジモンごとにサイズを変えているのか？そう疑問を投げかけようとした瞬間に答えがやってきた。
　一頭身のマスコットめいた姿のデジモンが、家から姿を見せたのだ。手足はなく、まん丸とした頭に角が生えているデジモンは、もんざえモンに気がつくとその大きな口に見合った声量でお帰りなさいと声を上げる。
　身体全体(頭全体？)を使ってぴょんぴょんと跳ねてくる。

「ただいま、ツノモン。今日も元気だったかい？」
「げんき！」

　言葉の通り元気に答えるこの小さいデジモンはツノモンと言うらしい。とりあえず自己紹介しておくかと口を開くつもりだった。
　しかしその前にツノモンの声に反応した他のデジモンが次から次へと家から飛び出してくる。子犬の群れを思わせる無秩序な塊が、草太ともんざえモンを囲む。そして響くのは、小さなデジモンのお帰りなさいの大合唱である。
　まちを作ったというのも伊達ではなく、ここの住民たちはみなもんざえモンを慕っている。
　もんざえモンが一匹ずつにただいまと声をかけている。おかえりなさいを言うだけで満足して離れていくデジモンや、草太に興味津々なまなざしを注ぐデジモンもいる。

　そして一通り挨拶が終われば、草太に注意が向くのも当然の流れである。好奇心にあふれる視線が草太に突き刺さる。そんな中もんざえモンがお客さんだと草太を紹介したものだからテンションが上がる一方だ。

　あまり小さい子と接する機会がない草太としては、こういう時にどう振る舞えばいいか戸惑ってしまう。

「普段お客さんがくることもないからね。少しだけこの子達に付き合ってくれると嬉しい。」
「ま、まあ、もんざえモンには助けてもらったしな。でも遊び方なんて分からないぞ。」
「大丈夫。ほらみんな！草太にかっこいいところを見せてあげないと！」

　途端に幼年期のデジモンたちが一斉に街の中心へと移動を始める。草太も近くにいたツノモンに促されて同じ方向に向かう。
　まちの中心は噴水のある広場だ。小さなデジモン達は噴水を越えて回りこんだ先、フェンスに区切られた小さめのスペースへと向かっていた。小広場といったところで、そこだけは地面が芝生になっていて、転がっても怪我しないようになっている。
　先に行った幼年期の子供たちはその小広場に何匹か入っていて、それ以外はフェンスにかじりつくようにしてきれいに並んでいる。

「ここで何をするんだ？」
「ここはね、クンレンジョウ！あっちのまとにわざをうつんだ！ほら、みてて！」

　そういうと、ツノモンが小広場へとかけていく。小広場の中心にはいくつかラインが引かれていて、その対面側には的に見える看板がある。金属製のパイプにぶら下がったその的の上には、妙にレトロな雰囲気の電光掲示板があって、パッと電源がつく。
　ツノモンはラインの手前に位置取ると、ぴょんぴょんとその場で弾んでみせた。すると電光掲示板に0の表示が付く。
　足元にスイッチでもあるのかもしれない。
　ツノモンは掲示板が付いたのを確認すると、ブルブルと体を膨らませる。そして次の瞬間にはいくつもの泡が口から飛び出していく。シャボン玉よりは分厚そうなその泡は、見事に的に命中。泡の衝撃で的が揺れて、電光掲示板に点数が表示される。
　結果は78点。
　100点満点ならなかなかいい点数だろう。

「ああ、パンチングマシンみたいなもんか。」

　すごいでしょ、ぼくもできるよ、もんざえモンがつくってくれたなどと、草太の周り中から一斉に声が上がる。聖徳太子でもあるまいし、全部聞き取るのは無理だ。おお、すごいなとざっくり回答しておく。

　ツノモンのデモンストレーションが終わった後は、次々に的あて練習が始まった。テンポよく的に当てる幼年期たちを座って眺める。いつの間にか膝に乗ってきたツノモンを適当に撫でながら、真剣な姿の幼年期たちに時々声をかけてみる。
　体がぶれてるぞとか、撃つときに目をつぶっちゃだめだとか、役に立つのか怪しいアドバイスだ。それでもうれしげにアドバイスを聞いてくれる幼年期たち。
　なんとなくサッカーを始めた頃を思い出す。シュート練習をするんだと言って、いつまでも公園

でボールを蹴る練習をしたものだ。その時は父が見てくれていて、うまくシュートが決まると色んな言葉を駆使して自分を褒めてくれていた。だからその真似をして、できる限り良いところを探して声かけをしてみたのだった。

　いつまでそうしていたのか。ポテポテと特徴的な足音に振り返ると、案の定もんざえモンが様子を見にきていた。

「むふふ、草太は子供の相手が上手だね。この子たちがこんなに集中してるのは初めて見たよ。」
「そう？ずっとこんな感じかと思ってたけど。」
「いつもはひとまわりふたまわりするとみんな飽きちゃうんだよね。まだ子供だからそうなるのも仕方ないんだけど。今日頑張ってるのは草太が褒めてくれるのが嬉しいからだろうね。」
「……俺が小さい頃、父さんがこうやって褒めてくれてたんだ。飛ばすのは泡じゃなくて、ボールだったけど。それが嬉しくてさ、母さんが迎えに来るまでずっとボールを蹴ってたなって思い出した。まあ、嬉しく思ってくれてたなら、俺も声かけした甲斐があるよ。」

　サッカー以外で褒められるのはなかなか照れくさい。だから思わず言い訳のように自分の経験など語ってしまった。どうにもこのまちでは調子が狂う。こういうときはさっさと話を流すに限る。それでどうしたのかと促してみる。

「君の家を用意したから、案内しようかと思ってね。ああ、ご飯はまだ準備中だよ。」
「そうか、ありがとう。いきなり押し掛けちゃったのに色々用意してくれて助かる。何か手伝いが必要なことがあれば何でも言ってくれ。できる限りのことはする。」
「そうかい？ならちょっとだけ力仕事を手伝ってもらおうかな。」

　荷物があるわけでも用があるわけでもない。ならばと家に行くより先に手伝いをすることにする。
　子供達に声をかけてから席を外し、もんざえモンに連れられてついたのは町外れの崩れた家。ブロックが散乱し、家の中が見えている状態だ。ブロックはただ崩れたのではなく、何か力がかけられたのか、ひしゃげている。

「これ何があったんだ？自然に崩れるような家じゃないだろう？」
「うん、この間随分酔っ払った子がきてね、止めるまでにやられてしまったんだ。本当は壊した本人に直してもらうつもりだったんだけど、自分はやっていないの一点張りで直しに来ようとしないから困っていたんだ。草太が手伝ってくれると言ってくれて助かったよ。」
「酒癖の悪い奴がいるもんだな。これ、壊れたブロックを外して入れ替えれば良いんだろ？」
「ああ、よろしく頼むよ。私は晩御飯の用意をしておこう。そうだ、直すときにブロックの色は好きにしてくれて構わないからね。」

　そう言うともんざえモンは来た道を戻っていく。食事の準備を始めるのだろう。
　もんざえモンが行ってしまうと、草太は一つため息を吐いた。別に理想的な世界だと思っていたわけではないが、明確に暴れるようなデジモンがいるということに少しがっかりした気分を草太は受けていたからだ。

　リアルワールドで戦っていた相手は、皆パンドラモンによって無理に暴れさせられていた。このまちで出会ったデジモンも皆穏やかで暴力的には見えない。そういう前提が頭にあったから、デジタルワールドは平和な世界なのかもと思い始めていた。だが別にそんなことはないのだ。誰かに勝手に戦わされるのが嫌なだけで、血の気の多い奴は人もデジモンも変わらないのだ。そもそもホーリーエンジェモンがいる時点でそんな理想的な世界ではないと分かるだろうに。誰がいるわけでもないのに、バツが悪くて頭をかく。

　もんざえモンが用意していたらしいバールのような工具で壊れたブロックを取り外し、邪魔にならないところに避けておく。ブロックは見た目の通りプラスチック程度の重さだ。とはいえ一抱えほどのサイズだからそれなりの重量になる。
　ひしゃげたブロックは簡単には取り外せないから、何度もバールを叩き込んで隙間を無理矢理広げて力ずくで外していく。全身汗だくになりながらもなんとか壊れたブロックを外し切る。これでおもちゃの家は大分風通しが良くなった。あとはブロックを組んでいけば完成だ。完成なのだが、問題がある。
　家の構造は簡単でブロックを嵌めるだけ。難しい作業ではない。なら何が問題かと言うと、ブロックの色を選ばなければならないのである。
　周りの家はどれも色とりどりに見栄えが良く、しかも一つとして同じ色合いではない。この中に草太が選んだ色合いの家が建つわけだ。なにせもんざえモンからは自由に組んでいいと言われている。が、芸術系というより体育系で生きてきた草太に色をどう合わせればいいかなどという知識などない。周りから浮く組み合わせの色になることは必至。その手の彩りについて無頓着に生きてきたツケが回ってきたようだ。

「全部青とかにしたら流石に浮くよなぁ…。」
「じゃあぼくが選んであげるよ！」

　気がつけば足元には見事な一本角のデジモン。

「…ツノモンだったよな。お前こういうのできるのか？」
「できるよ！そういうの得意だから！」
「よし、頼む。ツノモンの言う通りにブロック組むから、どれを組めば良いか教えてくれ。」

　そうして初めはゆっくりと、色を決めて置く場所を合わせる。即興の建築士と大工のコンビだ。ツノモンの頭にはすでに完成図が見えているらしい。草太への指示も段々とこなれてきて、あっという間におもちゃの家が完成した。

　カラフルさは周りと比べても遜色なく、それでいて色合いは穏やか。自分だけで組んだらこうはいかなかっただろう。おそらく申し訳程度に色がついただけの茶色の家になったはずだ。間違いなく悪目立ちすること請け合い。
　ツノモンに感謝を告げつつ、その場に腰を下ろす。ぶっ通しで作業し続けたので少し休憩が必要だ。あぐらをかくと、ツノモンがそこに収まる。両手を後ろに着いて体を伸ばすと、ツノモンもノビのような仕草を見せる。

「よし、いい感じに出来上がったな。ツノモン、ありがとうな。」
「いいよ！ぼくもこういうの経験つまなくっちゃだから！」

　経験？　草太が首を傾げると、ツノモンが少し恥ずかしげに、それでいてキラキラと光を集めたような目でその理由を話してくれた。

「ぼくね、デジタルワールドに新しいまちをつくりたいんだ。」

　それはツノモンの夢だ。
　自分がかつて諦めたもの。自分の胸の奥で燻り続けている未練。もう一度手に取りたいと思うもの。
　だからツノモンに続きを促す。

「もんざえモンが教えてくれたんだけど、ファイル島ってところに、はじまりのまちっていうところがあるんだって。いろんなデジモンがみんな仲良く暮らすまちなんだって言ってた。
このおもちゃのまちもみんな仲がいいけれど、進化していったら体も大きくなるし、すがたも変わっちゃうから、ここにはいられないんだ。
だからみんな進化したらここを出ていって旅をするんだけど、だけどね、せっかく同じまちで育ったのに、ずっとバラバラなのは寂しいでしょ？
だから僕もはじまりのまちみたいに、いろんなデジモンが仲良く暮らせるようなまちを作るんだ。
」

　自分たちのいつか帰る場所を作るのだと、熱っぽく語るツノモンは、はじめに見せた照れはもう見当たらない。

「なあ、もう作る町の名前は決めてるのか？」
「まだ！おもちゃのまち2とかどうかな？」
「最後まで聞かないとこの街とどっちかわからないのは良くないんじゃないか？」

　そうやって益体のない話をしていると、もんざえモンが迎えにきてくれた。
　平たいブロックで整備された道を三人で並んで歩いていく。着いた先は街の中心から少し離れた一軒家。ここに一晩お世話になる。黄色をベースに何色かのブロックが混じっていて、草太の目から見てもいいセンスに思えた。
　先ほどまでならただの色がついた家に見えただろうに、今はなぜかとても素敵な家だなと素直に思えた。

***

　晩御飯は広場でのバーベキュー、もといまんが肉の焼き肉だった。草太にとっては衝撃的なことに、この世界では畑に肉が実る。しかも漫画で出てくるようなお肉。それを収穫して、焚き火で炙ったのが今晩のメインディッシュというわけだ。心の中で畑の肉はそういう意味じゃないとツッコミを入れるものの、誰に届区分けもなく。

「ん？お前ら普段は肉しか食べてないのか？普通の料理とか、この世界にもあるよな？」

　料理というと嫌が応にも浮かんでしまう、いけすかない顔を思い出して眉を顰める。だがこの丸焼きがデフォルトの料理と言われた場合、これまであの穀潰しに教わってきた調理方法はどこからきた技術なのかということになる。

「ああ、小さいうちはあまり料理する必要もなくってね。肉一つでお腹が満たされるし、凝った料理を作っても何せ腕がないから。食べやすくて用意しやすい方が便利なんだ。草太の世界のような料理ももちろんあるから安心してほしい。」
「いや、別にそういうわけじゃないんだけど、まあいいか。これはこれで美味いしな。」
「お口に合ったようで何よりだよ。」

　ぎゅっと引き締まった肉を噛み締める。見た目は漫画みたいな肉なのに、噛むほどうま味が染み出してくるから不思議だ。これが極上肉になると脂がのってさらに美味しいのだという。だが、草太としては歯応えのある赤身肉の方が好みだ。やはり肉なら歯応えで肉を食べているという実感が欲しい。見た目はアレだが、美味しさについては文句のつけようもない。最近はここまで肉肉しいご飯を食べることが少なかったから、大満足の夕食であった。

＊＊＊

　焚き火がおもちゃの街にゆらめく影を作る。異世界ならではの馬鹿でかい月は、夜を意外なほど明るく照らしている。穏やかな月明かりの下で見ると、おもちゃのまちらしく、至る所におもちゃが落ちている。
　あとは寝るだけの身である。腹ごなしにのんびりと街をぶらついてみる。

　幼年期の子らが遊んだ後に片付けないまま置いていったものだろう、ブリキの木馬や竹馬、フラフープ。どうやって遊ぶつもりだったのやら。妙にレトロなおもちゃばかりだが、草太としては物珍しいものばかり。時々まだ寝たくない幼年期の子がおもちゃを咥えて駆けていくのも見かける。もしかしたら抱き枕にでもするのかもしれない。

　そして、とうとうお目当てのおもちゃを見つけた。ボールだ。草太が一番に思いつくおもちゃ。きっとあるだろうと思っていた。

　通常のサッカーボールよりは一回り小さい。草太の部屋に埃を被ったままの、初めて買ってもらったボールに良く似ていた。手を伸ばして、胸元に引き寄せる。空気はパンパンに入っていて、良く弾むに違いない。
　軽く地面に着いてみる。思った通り気持ちよく弾んでくれる。地面に落ちる前に、右足を差し出す。ボールをしっかりと見て、足の甲で蹴り上げる。当然蹴られて浮き上がるボール。落ちてくるたびに蹴り上げる。ただのリフティング。かつてはチームメイトとバカ話で盛り上がりながらでも続けられたのに、今は全力で集中しないとどこかに飛んでいってしまいそうだ。
　でも、ちゃんとできている。

　どれだけ諦めたふりをしたって無駄だった。どんなに遠ざけたってボールを蹴りたいっていう気持ちが消えることはないのだ。サッカーが好きで仕方がない。どんなに下手くそになったとしても、ボールを蹴ることをやめられるわけがないのだ。
　パンドラモンを相手に全力で振り抜いた右足の感覚がまだ、自分の一番深い部分に残っている。あれが本当のサッカーボールだったらもっとよかったのだが。でも、あんなに楽しいことをやめられるわけがない。伊達に物心つく前からボールと過ごしているわけではないのだから。

　と、よそごとに気が回ったせいでボールはあらぬ方向へと弾んでいく。コロコロと転がるボールを止めたのは黄色くて柔らかそうな足。もんざえモンだ。

「もんざえモンか。ありがとう。こっち戻して貰えるか？」
「いいとも。むふふ、草太のボール捌きは見事なものだね。でも私もボール遊びなら自信があるよ。」

　そういうと、草太の胸元へとボールを蹴り上げてみせた。柔らかな軌道を描き飛んでくるボールを胸でトラップして勢いを殺す。そのまま足元へと落とし、ぎゅっとボールを地面に押さえつけて完全に静止させる。

「へえ、うまいもんだな。ならちょっと付き合ってくれよ。」
「もちろん。子供の相手をするのが私の役目だからね。」
「そんなに子供のつもりはないんだけどな。」
「私からみれば同じようなものさ。草太は…成長期ってところかな。」
「まあ間違っちゃいないか。それにしても綺麗に蹴るもんだな。」
「まあね。ボールは子供の好きな遊びの一つだから。さんざん練習したものさ。」

　ボールがお互いの間を弾み、草太ともんざえモンの会話も弾む。

　もんざえモンが取りやすいように、ただそれだけを考えてボールを蹴る。試合でするような、対戦相手のマークを引き剥がしたり、味方の限界ギリギリを攻めるようなパスではなく、戦術を実現するための狙いすましたパスでもなく、受け取りやすいようにとそれだけを考えたパス。それは懐かしい感覚だった。父にねだって連れていってもらったサッカー教室。初めて会う知らない子とパス回しをした。
　こんな風に、ボールを渡すよって気持ちで蹴るんだって、その時の先生が言っていた。そんなことを思い出す。

　だからだろうか、今まで誰にも話したことのない、怪我によって生まれた鬱屈がするりと口から出てきた。
　痛みへの恐怖と、それでもボールを蹴っていたいという欲求。なぜ自分は諦めてしまったのか。それは暗く出口のない淀みだ。

「多分、サッカーすることで得られるものに縛られてたんだな。結構いい選手だったから、ずっと

チヤホヤされててさ、サッカー以外のことに全然見向きもしなかった。
でも段々とそれだけの時間を費やしたんだから、絶対に上手くならないといけないって、自分をひたすら追い込んでた。何せ他のことなんて全然知らないままだったから。
…怪我の後、卒業の時にさ、3年間ずっと一緒だったよねってクラスメイトに言われたんだ。でも、名前すら覚えてなかったんだよ俺。ひどいやつだろ？
サッカー上手いから許されてたって、そういう自覚もあったから、いざ怪我で走れなくなって、ボールを蹴ることがなくなった時には心底怖くなったんだ。だから元のようにボールを蹴らなくちゃならないって、絶対そうしなきゃならないって思ってたから、それができなかったことに心が折れた。しかもさ、それすら怪我のせいで仕方ないって、分かりやすい言い訳ができて安心もしてた。」

　もんざえモンは、静かにパスを回しながら、この下らない独白を聞いてくれている。

「上手くなるほどみんなの期待とか、頼むぞって言葉とかが重く感じられてさ。だからもう上手くならなくてもいいって、そういう言い訳ができたことにホッとした。でもカッコ悪いだろ、そんなの。
だからそんなこと認めたくなかった。そんなに弱気な人間じゃないって、自分のダメなところから目を逸らしてた。
んでさ、そんな時に初めてデジモンと会った。すげぇ鬱陶しいやつでさ、全然気が合わねーの。普通に話すより喧嘩してる方が多いくらい。正義がどうのこうのってでかい言葉使ってさ、自分が気に食わないだけの癖にとやかく言うもんだから、俺も一言言ってやりたくなるっていうか。なんだよもんざえモン。その顔やめろよ。
ああもう、奴の話はいい。……でも、サッカーとか怪我のこととか、そういうの全部関係なしに話をできる相手だったのは、まあ、悪くなかった。一気に騒がしくなったし、忙しくて感傷に浸る暇もなくて、もしかしたらそのまま違う人生が始まるんじゃないかとも思った。
でもさ、やっぱり忘れてられないんだ。
どんなに下手くそになっても、がっかりされるため息が聞こえたとしても、俺はボールを蹴ってるときが一番楽しいんだ。それを忘れた振りして生きてくなんて出来ない。」

　気がつけば焚き火も弱まって、月明かりも雲に隠れ始めている。もうそろそろやめ時かもしれない。ただ、こんなに自分の気持ちを吐き出すことのできる機会はもうないと思う。だから、最後に一言だけ続けさせてもらう。

「俺さ、もう一度サッカー始めようと思ってる。プロとかまでは流石に考えられないけど、サッカー部に入れてもらって、もう一度ボールを追っかけるんだ。
あんなに、こんなにも好きなのに、辛かった思い出だけで終わるのは嫌だからさ。
散々みんなに心配かけて、もう辞めるとか言ってたのにな。我ながら勝手だと思うけどな。」

　ボールをぎゅっと上から押さえてみる。止まったボールを今度は足の裏で転がす。そしてもんざえモンに転がるパス。
　心の奥底の感情を、声に出した。それで変わるものがあるわけではない。草太が一人こぼしただけの、ただの言葉だ。最後に自嘲がでたのは草太の甘えでもあった。

　だからもんざえモンは甘えを肯定する。

「ここはね、おもちゃのまちだよ。子供のためにこのまちの全てがあるんだ。私はこのまちの住人だよ？　実は私はね、背中を押すのだって得意なんだ。」

　ぽかんとする草太を見て、もんざえモンが微笑む。

「――草太が1人でボールを蹴っていた姿を私は見てたよ。すごく真剣に、誰より楽しそうに目を輝かせてた。草太はサッカーが好きなんだろう？好きなことを続けたいって思うことが悪いことなわけがないんだ。
草太がそんな風に夢中になる姿を見てうれしく思う人はいないのかな？
私はすごくうれしくなったよ。
草太の真剣な姿を見て、自分も頑張ろうって気持ちになる人はいないのかな？
きっとここにいる子たちは、草太の姿に夢を見るよ。
草太が楽しく過ごすだけで周りの人が笑顔になる。素晴らしいことじゃないか。
私は、草太を応援する！」

　もんざえモンの言葉に胸が熱くなる。そうか、自分に期待してくれる人がいる。まだ輝きが残っているといってくれる人がいる。それはとても幸せなことだ。視界が少しだけぼやける。もんざえモンからのパスを受け取り損ねてしまった。後逸したボールを追いかけながら目元を拭う。濡れた指先でボールを持ち上げ、振り向く。

「そろそろ寝るか。」
「うん、そうしようか。」

　後は焚き火のはぜる音だけ、街は静かな夜に戻る。

　貸してもらった家の中、月明かりが窓から差し込む。どこかから遠吠えが聞こえる。寝静まったまちであっても全くの無音にはならないことを知る。気持ちを吐き出したせいで妙に目が冴えてしまっている。それでもだんだんと眠りに落ちていく。
　そうして見た夢は、確かに草太を幸せな気持ちにするものだった。

2．おもちゃのまち2日目

　何かいい夢を見ていた気がする。
　すっきりと目覚めた草太は、調子の良さを感じる。おもちゃの家のベッドは思ったよりも寝心地が良かった。リアルワールドでの大立ち回りにデジタルワールド入り、幼年期たちの相手に家の修復。これだけ働いた後なら、藁のベッドだったとしてもぐっすりだったかもしれない。
　一晩を楽しく過ごした後でいうのもなんではあるが、どうやってリアルワールドへ戻るのか。棚上げしていた難題が朝一の頭に不安としてのしかかってくる。せっかくのいい目覚めも台無しだ。ベッドから起き上がり、まずは顔を洗う。そして水差しから水を一杯ついで飲み干す。

　元の世界に帰らないといけない。それ以外の選択肢はなかったとはいえ、自分がいなくなることで起きる問題は小さいことではない。何せ主戦力たるホーリーエンジェモンの能力がガタ落ちだ。いいとこ成熟期程度、戦力として心許ない。次にパンドラモンがどのような手を使ってくるかは分からないが、この隙を見逃すことはないだろう。テイルモンと力を合わせたところで焼け石に水だ。
　頭をガシガシと掻きながら、やれることのなさを嘆く。当てはないことはない。テイルモンは普段からデジタルワールドの天使連とかいう所属団体と連絡をとっているから、草太の居所を探しているはずだ。ホーリーエンジェモンもテイルモンもリアルワールドから来ているわけだから、自分を戻すことだってできるはずだ。が、その迎えがいつになるか。

　パンドラモンは自らをリアルワールドに導いた少女すら捨て駒にしてみせた。究極体という鬼札のために少女を切ってまでホーリーエンジェモンを排除しようとして、見事に成功したわけだ。
　この状況は逃せない。もし草太なら一気に畳み掛ける。パンドラモンが草太の役割をどの程度把握しているかは不明だが、草太さえ戻ればホーリーエンジェモンは力を取り戻せる。その程度は予想しているはずだ。だから草太が戻る前に勝負を決める。そのための手段がパンドラモンにあるか？

――ある。パンドラモンの権能。災いの生成がある。

　ゾンビタトゥーで手駒を増やし、恐怖を刻みつけて戦力とした。しかしホーリーエンジェモンの聖なる力はそれに対処できた。対策を打つならここだろう。次の災いが浄化できる類のものである可能性は低い。いや、確実に悪意を増した災いになるはずだ。
　延々と答えの出ない悩みに向き合っていると、ノックの音が響く。

「おきてる?？朝だよ！おきな?」

　ドアを開けるとやはりツノモン。朝食ができたから呼びに来たとのこと。

「なんか困ってた？眉にしわが残ってるよ？ご飯前にそういうの良くないから、困るのは食べてからがいいよ！」

　なんだよそれ、と思わず笑ってしまう。だが実際その通りでもある。備えは必要だが、いたずらに不安だけ広げるのは良くない。ツノモンと連れ立って広場へ向かう。
　広場ではどこから出したのか、七輪で魚を焼く黄色いくま、もといもんざえモンの姿。体に魚の匂いが染み付きそうだと思いつつ、挨拶をする。

「やあおはよう。良く眠れたかな？」
「おはよう。良く眠れたよ。それにしても七輪まであるんだな。」
「せっかくのお客様だからね。魚が嫌いでなければいいのだけど？」
「魚も好きだ。昨日の肉も美味かったから期待してる。」
「むふふ、期待に応えないとね。ツノモン、君も食べて行くだろう？」

　ウヒョーッと飛び跳ねるツノモンを邪魔にならないところまで引き戻す。昨日の肉も肉汁を噛みしめるようや歯ごたえと旨味が非常に美味しかった。きっと朝ごはんも美味しい。ツノモンの喜びようも分かるというものだ。しかしただ饗されるだけというのもすわりが悪い。せめてもの手伝いとして机を拭いておく。

　七輪から上げられて皿に載せられた魚は、デジタルワールドの特有種だという。たまに街に寄ってくれる釣り人からもらったものらしい。ハシバミのような香菜も、白い皿によく映える。
　じっくりと炭火で焼かれた魚からは余計な脂が程よく落ちて艶やかだ。飾り包丁を入れられて捲れた皮は見るからにパリッとしている。それでいて白身はふっくら柔らかそうだ。
　添えられた柑橘の実を絞って上からかけると、じゅっという音が耳に心地良い。
　さあさあと勧められるままに箸を入れる。想像通りにパリパリと裂ける皮。その先は抵抗がほとんどなく、静かに箸が沈んでいく。身離れも良く、ほかほかと香りたつ湯気ごとパクリと口に入れる。爽やかな柑橘の香りが鼻にぬけ、次いで良く焼けた皮の香ばしさが突き抜ける。白身はふわりとした口当たりでありながら、ぎゅっとした歯応えをもつ。噛むほどに染み出す旨みが口内を染め上げる。ごくりと飲み込んだ後も、じんわりと舌全体においしさが残る。

「うまいな…。これはご飯が欲しくなる…。」

　嬉しそうなもんざえモンの視線。一心不乱に食べ続けるツノモン。
　いちいち感想をいうものでもないなと、ツノモンを見習って箸と口を動かす。黙々と食べ続ける2人にもんざえモンは満足げだ。

　最後の一切れを飲み込むと、ふぅと息をつく音が二つ。見ればツノモンもちょうど食べ終えたところらしい。見事にシンクロした動きに笑ってしまう。美味しいものを食べた後の反応は種族が違っても同じようだ。そしてごちそうさまと手を合わせる。

「いい食べっぷりだったね。見ていて気持ちいいくらいだったよ。」
「これだけ美味けりゃ夢中にもなる。本当にうまかった。なんか今すごい幸せな気分だ。」
「そうとも。美味しいご飯をみんなで分かち合うことほどの幸せは他にないからね。」

　確かにと頷く。腹を満たす喜びは実際すごいものがある。つい気が緩む。緩んだおかげで余計な一言が溢れる。

「これだけうまいなら、そのうち変な天使が来るかもな。」
「草太のパートナーかい？」
「ん“。いや、口が滑った。というか奴とはそんな大した関係じゃない。ただの…なんていうか。まあうちの居候だ。性格悪いし口うるさいから追っ払った方がいいかもしれない。…この魚食べた後はなんも言えなくなるだろうけどな。」
「ふふふ、なら大歓迎をしなきゃならないね。腕によりをかけて美味しいご飯をご馳走するさ。」

　古今東西うまいご飯を嫌うものなどいない。あの食通気取りでも、もんざえモンの料理には文句の一つも出るまい。面食らって静かになるアホヅラが目に浮かぶようだ。

　ひとしきりそんなことを考えて、そのアホヅラに会うための手段に思考が戻る。

「どうやって戻ろうかって考えているね？」
「ああ。いくらでもここで世話になっていたいところだけど、やらないとならないことが待ってる。もんざえモンとツノモンがこの街を好きなように、俺も自分の街のことが割と好きだ。だから戻らないと。」
「そっか、草太も行っちゃうんだね…。」

　しょんぼりと項垂れるツノモン。罪悪感を突かれる草太であったが、この幼年期の立ち直りと切り替えは草太の及ぶところではない。

「じゃ、次に来るときには僕の作った街を見せたげる！おもちゃのまち2だよ！」
「……それ分かりにくいと思うんだけどな。でもいいな。お前の作った街なら喜んで遊びにいく。そん時はよろしくな。」
「おー！」
「おやおや、私にも会いに来ておくれよ？」
「もちろん。またうまい魚を食わしてくれ。力仕事ならいくらでもやるからさ。」

***

「さて、草太。元の世界に帰る当てはあるのかな？」
「ある。天使型デジモンを頼る。天使連つって、うちの穀潰しが所属している組織がある。そこなら戻る手段があるはずだ。」
「天使連ねぇ…。天使型デジモンならここから北にある、氷の街に集まっているって聞いたことがあるよ。ただそんな組織と繋がりのあるかは分からない。」
「いや、それでも構わない。人間は結構珍しいんだろ？天使の街に人が現れたってなら話が届く可能性は高い。それに、天使連から離れたところに飛ばされたとは思ってないからな。多分そこで当たりだと思う。」
「一応念のためだけど、歩いて行くつもりかい？」
「流石にここの一輪車ってわけにもいかないしな。」
「むふふ、そうだね。ならちょっとは力になれるかもしれない。一輪車で旅する草太を見て見たい気もするけどね。ちょっと待っててくれるかな。」

　そうして待つことしばらく、もんざえモンが何者かの首根っこを掴んで引きずって戻ってきた。大蛇のような体に大きな翼、頭骨をかぶったような白い頭部。エアドラモンである。
以前草太もやり合ったことがあるデジモンだ。

「いい加減離せよクマやろう！俺を誰だと思ってんだい！」
「いいからお話を聞こうね、エアドラモン。ほら大人しくする！」

　ぎゅっと睨みつけるもんざえモンの姿はなかなか不気味なものがある。普段の話し方は見た目を随分和らげていたんだなと思わないでもない。

「うちの家を壊したのは君だろう？こちらの草太がね、代わりに直してくれたんだよ。まずはお礼を言いなさい。」

　そういってエアドラモンの頭を無理矢理下げさせる。これはもしかしたらかなりもんざえモンも鬱憤が溜まっていたのかもしれない。いだだだと叫び声に合わせてヤケクソじみたありがとうの声が届く。
　以前遠目に見たエアドラモンはパンドラモンの支配下だったせいか無機質な印象だったが、このエアドラモンはだいぶ表情豊かだ。

「草太、このエアドラモンが君を氷の街まで連れてってくれるそうだ。」
「そんなこと言ってねぇだろうがヨ！…あ、いや、わかった！わかったからその目をやめて！」
「じゃ、エアドラモン。氷の街まで頼むわ。」

　色々力関係が働いているようだが、草太としては乗せていってもらえるなら万事OKだ。無事話し合いも済んだので、後は出発するのみ。最後にもんざえモンとツノモンに世話になった礼を言う。

「本当に世話になった。ありがとう。」
「いやぁ、いいってことよ?！」
「そうそう、ツノモンの言う通り。一晩なんてあっという間だから世話のうちに入らないよ。
ふふふ、なんでそんなに良くしてくれるんだって顔をしてるね？
昨日も言ったけれど、私はね、子供の味方なんだ。ぬいぐるみだからね。どんなことがあっても、子供の力になりたいって思うんだよ。それに、子供の笑顔を見るのが何より嬉しいんだ。だから草太をほっとけなかった。それだけさ。
ちょっとは草太も、この気持ちがわかるだろう？」

　昨日相手をした時の小さなデジモンたちを思い出す。たわいないコメント一つ一つに一喜一憂していて、初対面の草太に全幅の信頼を置いていた彼ら。なるほど、確かにその通りだ。

「ああ、そうだな。なら最後まで甘えさせてもらう。でも礼は礼だ。もんざえモン、ありがとう！」

　優しさには元気で応える。もんざえモンが頷く。
　そしてもんざえモンの隣に膝をつく。威勢は良くても口数が少なく、しょげているツノモンに、同じ子供として話をする。

「ツノモン。おもちゃのまち2、絶対作れよ！　俺が次に来た時に、このまちとそっちのまち、どっちに行くか迷うくらい立派なやつを頼むぜ。」
「……仕方ないなぁ！　ぼく、がんばって作るからね！　草太も元の世界に戻ってもがんばるんだよ！」
「ああ！　約束だ。」

「じゃあぼく、すぐにどこに作るか考えなきゃだから！　草太！バイバイ！　またね！！」

　そう言ってぴょんぴょんと勢いよく街の中心へと戻っていく。少し震えていた声には気が付かなかったことにする。名残は惜しいが、やるべきことは決まった。
　エアドラモンへと向き直る。

「じゃ、氷の街までよろしくな、エアドラモン。」

3．飛んでそこまで

　エアドラモンの背中は思ったよりも暖かい。角を掴んで過ぎ去っていく景色を見ているが、首元の羽根が意外なほど風を避けてくれる。

「あーあ、貧乏くじ引いたモンだぜ。」
「愚痴るなよ。お前からすりゃ大した距離じゃないだろ？」
「勝手なこと言いやがってよゥ。もんざえモンの頼みじゃなきゃ振り落としてるところだぜ。」

　変なイントネーションでぶつぶつと文句を言い続けるエアドラモンだったが、草太が適当な声かけをしているうちに機嫌を直したらしい。案外と単純な性格のようだ。

「お前もしかしておもちゃのまち出身なのか？　やけにもんざえモンに頭が上がらないし。」
「…そーだヨ！　俺も家を壊したの悪いって思ってたんだけどサ、この体だろ？ブロックの組み立てどころか取り外すのも無理なんだから、困っちまってヨ。」
「酔っ払ってたって聞いたぞ。飲むなとは言わないけど程々にしろよ。自分のいた街なんだからさ。」
「ショージキ反省はしてっからさ、あんまり責めないでくれヨ。」

「んで、届かない相手にどうしたんヨ？」
「ああ、テイルモンってやつをさらに上空までぶん投げてさ、背中に飛び乗って高度を下げさせたんだ。」
「マジか！　正気じゃねぇな！」
「だよなぁ。つーか、同じエアドラモンでも気にならないモンなのか？」
「お前らだって同じ人間が暴れたのを取り押さえられたって聞いて怒りに燃えねぇだろ？　それとおんなじヨ。」

　途中いくつかの街によって食事と休憩、睡眠を済ませる。
　家を壊した当人ということで警戒していたのは初めだけ。蓋を開ければ単なる脳筋だったエアドラモンは、草太にとっては馴染み深い体育系のバカだ。自分がそうだったので扱い方は手慣れたもの。思いの外気楽な空の旅となった。

　途中の街でも人間を珍しがったデジモンからのちょっかいやら、なぜか困りごとを相談されたり、旅を続ける人間との交流があったり。トラブルはあったが、無事に氷の街まで到着することが

できた。

　空の上から見下ろす街は、氷の街というだけあって一面が薄水色の氷に見える。街の中心にそびえる塔は氷の結晶を模しているのか、幾何学的な形状が壁に刻まれている。街中が氷でできているわけではなかろうが、そう思えるくらいに肌寒い。まるでこの街一帯だけが冬に覆われているようだ。おかげでひたすら手をこすり合わせる羽目になっている。
　途中の街で上着を手に入れてはいたが（以前来た人間のものらしく、手に入れるのも一苦労だった）、震えが止まらない。

「あのよゥ、流石にこの寒さは俺もしんどいゼ。これでもルーツは南の方なんでサ。」
「確かに派手だもんな。よし、ここまでで大丈夫だ。もう街はすぐそこだしな。」

　ここまで連れてきてくれたことについて感謝の言葉を告げる。妙にクネクネとエアドラモンは変に照れている。かなりのお調子者だからあまり正面から感謝された経験がないのだろうな。そんなことを思いつつ、実際リアルワールドの状況を心配して思い詰めないで済んだのはその剽軽さのおかげでもある。

「本当に助かった。ありがとう。帰り道も長いし気をつけろよ？それと、もんざえモンとツノモンにもよろしく言っておいてくれ。」
「あいあい。ま、オマエと飛ぶのはなかなか楽しかったゼ！じゃあな！！」

　そう言って螺旋を描きながら空へと舞い上がっていく。ピューっときた道を戻っていくエアドラモンを見送り、氷の街へと踏み出す。正直寒くてたまらないから、歩くほうがマシなのである。
ざくざくと足音が鳴る。一面が霜柱でおおわれた地面を歩いていく。ここからでも見える青白い門は、おもちゃの街とは違ってずいぶんしっかりとしている。
　門までの道は一人だ。なんだかんだでもんざえモンやツノモン、エアドラモンと一緒にいたから一人になるのは久しぶりだ。街まであと少し。一歩ずつこの世界から離れていくんだと思うと少し寂しさがある。みんなが遊んでいる中先に帰る時の感覚だ。でも、帰ればまたサッカーができる。あれほど憂鬱だった気持ちがすっかり前向きになっていることに一人笑う。門の前に立つまでには、このなんとも言えない気持ちを整理しないといけないな。そう思いながら、ゆっくりと歩いていくのだった。

4．氷の街、天使の巣

「とまれ。……人間か？この街に何の用だ？」
「リアルワールドに戻るための手段を探しに来た。この街にいる天使型デジモンたちに話を聞きたい。通してもらえるか？」
「……しばし待て。」

　門番らしきデジモン――草太は知らないがブルーメラモンという――が2人、用件を話すと片方が門の中に入っていく。割とセキュリティはしっかりしているらしい。が、できればさっさと中に入れてほしいところである。なにせ寒い。体が冷えないように立ち止まらずその場をうろうろす

る。しかし青く燃えているくせに、全く暖かそうに見えないデジモンだなと内心愚痴を吐く。そうこうしているうちに許可が下りたようだ。門の中から先ほど中に入っていった方のブルーメラモンが草太を呼び寄せてくる。

「本当はもう少し入るためには審査がいるんだがな。お前、何かコネでもあるのか？上に確認したらさっさと通せってよ。」
「まあ、貸し借りみたいなのはあるかもな。」

　門をくぐって街の中に案内される。整然と並んだ街並み。色彩の薄い建物ばかりが、碁盤に並べられたかのようにきっちりと並んでいる。地面は硬質なパネルかなにかで舗装されていて、草太の運動靴から歩くたびにきゅっと音が鳴る。車が通るわけでもないのにやけに広い道幅は、大きなデジモンが通ることを想定しているのだろう。当然そこまで大きいデジモンは見た限りではいない。というか全体的にデジモンも少ない。ここにくるまでに寄った街でも思ったが、やはりリアルワールドほど人口密度が高い街はなさそうだ。
　時々すれ違うデジモンたちの口元には白い息が浮かんでいるのが見える。デジモンであっても寒さは感じるということに何か安心を感じる。驚くほど姿かたちが異なる彼らだが、等しく寒さを感じる熱を持っている。デジタルワールドを脅かす危険な存在を封印するのが天使連だと前にテイルモンが話していた。当時はあまり実感がなかったが、こうしてデジタルワールドで普通の生活を営んでいるデジモンたちを見ると、それがいかに大事なことだったのかわかってくる。

　大通りをいくつかまたぎ、静かな住宅街を抜けてたどり着いたのは巨大な白磁の教会だった。きれいに清められた前庭には落ち葉一つもなく、飛石がてんてんと教会の入り口まで続いている。塀の内側は柔らかな緑を湛える樹木がよく整えられている。見える範囲でも相当な広さだ。東京ドーム何個分とかそういう単位だなと、スケールの差を考えてしまう。

「では、私はここで失礼する。」

　ここまで案内してくれたブルーメラモンが去っていく。去り行く背後に礼をかけ、草太もさっさと教会へと入ることにする。
　飛び石を渡って教会のドアを叩く。ドアすら草太の身長の倍はある。このサイズなら何が出てもおかしくはない。さあ、鬼が出るか、蛇が出るか。

　当然出てくるのは天使である。はい、と出てきた天使型デジモンはそのまま草太を教会内へと招き入れる。すでに話は通っているらしい。ここは、と尋ねてみたが、案内のデジモンは首を振るだけで会話をしようとはしない。

　案内の天使が立ち止まり、道を開ける。その先には両開きの扉が一つ。これまで通ってきた通路にあった扉に比べ、艶やかで深い色をした扉だ。ここに草太が尋ねるべき相手がいるのだろう。この街の門番から見て怪しさの塊である草太を、鶴の一声で入れることのできる立ち場のデジモンが。
　案内役が扉を叩くと、中へと入れとの声。幸い案内役が扉を開けてくれたため、このでかい扉を開ける手間をかけずにすんだ。

　部屋には1人のデジモンが立っている。蒼と白にまばゆく輝く鎧とそれに見合う体格。身長だけでも草太の倍ほどはあるだろうか。そして何より５対１０枚の翼がこれまであったなかで最も高位の天使であることを物語っている。同じ天使型だからこそ、ここまで案内してくれた天使デジモンにホーリーエンジェモンやテイルモンとの違いが際立つ。ケレスモンメディウムとの相対した時にも思ったが、究極体というのは格が違う。ただ見えているだけでも圧がある。人間とは根本的に違う生き物であることを感じる。

「君が長峰草太か。はじめまして、私は天使連のセラフィモンだ。」

　天使連――ホーリーエンジェモンとテイルモンの所属する、デジタルワールドにとって致命的な存在やバグを封印するための組織。パンドラモンが生み出す災いを危険視し、封印をしていたのもその活動の一環である。
　そして逃げ出したパンドラモンの再封印に動いているのがホーリーエンジェモンであり、その契約者である草太だ。
　草太としてはあまり関わり合いになりたい相手ではないが、パンドラモンという不始末に協力しているという点では貸しがあるといえなくもない。

　ホーリーエンジェモンのヘブンズゲートで飛ばされてきたわけではあるが、浄化という目的のために例外的にこの場所と接続されていたはずだ。緊急避難として使われてはいても、当初の接続先からそう遠くはないはず。そう考えていた草太の読みが当たった形だ。

「早速だけどセラフィモン、俺をリアルワールドに戻してほしい。」
「もちろん、と言いたいが、君はまず今の状況について知る必要がある。単刀直入に言って状況は最悪だ。リアルワールドに送った者たちとは全く連絡が取れていない。ホーリーエンジェモンとテイルモンを含めてだ。」
「パンドラモンが本格的に動いたんだろ、そんなの分かってる。だから早く俺を――」
「落ち着きたまえ。我々とて座しているだけではない。リアルワールドへのゲートの構築を進めている。直に門は開く。」

　さっさとリアルワールドに帰って状況を変えたい草太の焦りを見透かすように、別の選択肢を提示してくる。

「私が言いたいのは、君にはここで事態が収まるのを待つ選択肢もあるということだ。今準備を進めているのは私を含めて我々天使連が通ることのできるゲートだ。パンドラモンが姿を現している以上、最大戦力である私が直接討つことが最短であるはずだ。君がこれまで助けてくれてきたことには感謝している。
だが、ここからは我々に任せて安全な場所に避難する方が確実とは思わないかね。」

　言い方は嫌味な大人のそれだが、セラフィモンが草太のことを心配していることはわかる。なぜならセラフィモンのまなざしは、もんざえモンが草太を見る時のそれだ。ただの直感ではあるが、悪意がないことを確信するのに十分な理由だ。

　それでも、草太の答えは一つだ。

「言いたいことはわかった。だから次は俺の意見をいわせてもらう。まっぴらごめんだ。俺は帰る。あんたの心配はありがたく受け取る。でもこれは俺が引き受けたことだ。選択肢なんてない不自由な状況だったけど、やると決めたのは俺だ。」
「それをさせないために私が出ると言っても？」

　草太へとセラフィモンが圧をかける。究極体相手に圧をかけられるのもこれで二度目だ。しかも、その理由も答えも全く同じときた。あのアホ天使がつなぐ悪縁にしか思えない。
　息を吸い込み、セラフィモンを説き伏せるための言葉を選ぶ。

「パンドラモンはもうお前らの手に負える状態じゃない。あいつはずっと人間と一緒にいたんだぞ。」
「選ばれし子供達の逸話だね。だがそれは互いの信頼関係の賜物だろう？」
「それを必要としないのがパンドラモンだろ。負の感情を食べて力を蓄えるようなデジモンが、人間の街にいたらどうなるか。……俺はデジタルワールドに来てから大した時間を過ごしたわけじゃないけど、それでもわかることがある。」

　お前では不足だと、自分ならばできると言葉にする。どこまでも理性的に詰める。そうしなければセラフィモンは納得しない。実力ありきの世界であることを忘れてはならないのだ。
　それができなければ草太はこの教会で、デジタルワールドから事態が動くのをただ待つだけになるだろう。そして動いた結果がいいことであるとは限らない。

「密度が違う。人の世界じゃ街の中心を突っ切って歩いてすれ違う人がいないなんてことはありえない。それに、良くも悪くも人の心は揺れやすいんだ。些細なことを気にして嫌な気持ちになることなんてざらだ。はっきり言って、パンドラモンの成長はセラフィモン、あんたの予想を越えてくるぞ。」
「ケレスモンを従えたという話は聞いている。だが、聖なる力の優位性がある。そうそう屈することはないというのが私の見解だ。」
「パンドラモンは人の恐怖を煽って力を増していく。リアルワールドであんたとパンドラモンがやり合ったとして、それを見ている人間はパンドラモンとあんたのどちらにも恐れを覚えるよ。究極体ってのはそれだけ威圧感がある。そうしたら戦うほどパンドラモンが強くなっていく。それは聖なる力の優位性ってだけじゃ届かなくなる。俺とホーリーエンジェモンですら、ケレスモンとやりあえるだけの力が出るんだ。一万人以上の人間の恐怖を吸ったパンドラモンがどうなるかは考えるまでもない。」

　セラフィモンには悪いが、パンドラモンの悪意に天使連が太刀打ちできるとは思っていない。第一、セラフィモンははじめにリアルワールドに来た時に謎のデジモンにこっぴどくやられたとも聞いている。もしパンドラモンとの戦闘中にそいつが襲いかかってきたらどうするのか。もしかしたらパンドラモンも倒せるかもしれないが、セラフィモンともども逆に取り込まれる恐れもある。そもそもこれ以上不確定な要素を増やしたくもない。

「――でも、ホーリーエンジェモンは別だ。」
「あの子にはそれができると？」
「ゾンビタトゥーに操られたデジモンが出た時、ホーリーエンジェモンは高笑いで突入していく。どんな時でもだ。そして奴が笑った後に人が傷つけられることはない。
正直なに笑ってんだって思ってたけど、どんな状況でもホーリーエンジェモンのあのふざけた声が聞こえるだけで安心する人もいるんだ。
誰もパンドラモンなんて知らない。セラフィモンも、暴れるデジモンのことも、何が原因で何のために現れたのかを知ってる人間なんていない。
でもホーリーエンジェモンを知っているんだ。
街中をうろうろ飛び回って、どうでもいいような諍いに顔を突っ込んでは騒動を広げる。子供にまとわりつかれて逃げ出す情けない姿も、八百屋で値引きしろと駄々こねる姿も、馬鹿でかいデジモンの暴走を止める姿も、俺の街じゃ日常茶飯事だ。
……街に流れる噂を教えてやる。恐怖を蹴散らす希望の天使、だとさ。
パンドラモンが恐怖を食うなら、恐怖を払うのがホーリーエンジェモンだ。やつ以上にパンドラモンとやり合うのに相応しいやつがいるか？」

　口から出てくる言葉の一つ一つにうんざりする。撤回したい気持ちでいっぱいだ。何が悲しくてあの腐れ天使を評さねばならないのか。
　しかも何が嫌って、全て客観的な事実であり、何より草太の本心がひとかけらでも含まれていることだ。

「……そしてあの子の全力を君がサポートすると。確かに、私が行ったところでデジモン同士の争い程度にしか見えないかも知れんな。いや、なるほど、パンドラモンと戦うならば君たち以上の適任はいない、か。
ふっ…あの子はいいパートナーと出会ったんだな。」

　わざとらしく目元を拭う真似をするセラフィモンを冷たい目で見る。このセラフィモン、口調こそ仰々しいが、どうにも鬱陶しさがある。大体セラフィモンの教育が悪かったのが問題だろうと、厄介者を押し付けておいて白々しい。

「あの子は生きるためにひたすら――」
「そういうのはいい。必要なら直接聞く。たぶんその機会はないけどな。」

　やつの生い立ちも、育ちも何も聞きたくなどない。契約者ではある。それだけの関係で、お互いを知る必要なんてないのだ。

「いいからさっさと俺を帰してくれ。リアルワールドの混乱もパンドラモンも俺たちがなんとかする。それでいいだろ？」

***

　幾人もの天使型デジモンが入れ替わり立ち替わり、それぞれの力を注ぎ込みゲートの生成を行っ

ている。
　準備に時間がなどと言っていたが、本来ただの人間を適当な場所にリアライズする程度ならそこまで時間がかからないものらしい。
　かける必要があったのはセラフィモンのリアライズを想定していたためだ。もしくは草太が送られることを考えていたため。
　強力な力をもつ究極体を送るのは容易なことではないのは草太にもわかる。そして、ホーリーエンジェモンという完全体の力をたらふく体に蓄えている草太にも同じことが言える。どこへでも飛ばして構わないなら多少の雑さは許容されるうが、パンドラモンが猛威を振るう草太の街へ正確に繋げる必要がある。そのために教会中のデジモンが協力していたわけではある。だが、セラフィモンが出撃する必要がなくなったため、最大戦力がゲートの作成に力を振るえることとなり、ゲートの構築は一気に進んでいく。

　次第に姿を現していくゲートの前に立って待っていると、セラフィモンから声がかかる。

「君にはいくら礼を言っても足りんな。あの子のことも含め、世話になる。」
「別にいいさ。俺だって1人じゃ帰れないのに手伝ってもらってる。お相子だろ。」
「ふっ、そういうところを彼らは気に入ったのかもしれんな。」
「彼ら？　――もんざえモンか」
「彼は私の先輩だ。君のことは彼から聞いていた。心優しい少年だと誉めていたな。」
「もんざえモンなら札付きの不良相手にだってそう言うだろうさ。それよりゲート開けるのに専念してくれ。」

　スポーツ以外で褒められるのは照れ臭さが勝る。さっさと話を変えるに限る。セラフィモンにはお見通しだったろうが、実際重要な話でもある。

「後3分で準備が終わる。君の準備は――、良いようだな。」

　準備も何も、デジタルワールドに来てから増えた荷物は防寒用に手に入れた上着だけ。スマホに家の鍵と財布。大事なものは全て持っている。別れを惜しむような相手もこの場にいない。

　長かったようで短かったデジタルワールドでの日々。名残はあっても後悔はない。
　ヴゥンと響く低い音とともに、セラフィモンたちがゲートを開いていく。ホーリーエンジェモンの丸いヘブンズゲートとは異なり、文字通り扉のような門だ。その先には形容し難い不思議な光と色が続いている。
　……これに入るのか。仕方ないとはいえ、こんな不思議空間に飛び込まないとならないことにゲンナリする。これが最後になることを祈るばかりだ。
　そしてセラフィモンへ礼を告げてゲートに飛び込む。あっという間に視界全てを光が覆い尽くしていく。

　一切の躊躇を見せずに飛び込んでいった草太を見送り、セラフィモンはゲートを閉じていく。

5．お久しぶりリアルワールド

　人の視覚に捉えられる波長よりさらに広い、光そのもの草太の目に飛び込んでくる。あまりにサイケデリックな光景なので目を閉じるが、瞼を通しても明滅が鬱陶しい。気持ちが悪くなりそうだ。
　いつまで続くのかとげんなりしていても、次第に落ち着いてくる。上下の感覚すらなくなっていたが、体が重さを思い出す。重力とは有り難いものだ。
　気づけば明滅も収まり、頬に風が触れる。目を開けると、馴染み深い光景が見える。雑居ビルの屋上、フェンスで覆われたスペースに空調用の配管やら室外機。
　どうやら無事に戻って来れたようだ。妙に薄暗いが、夕暮れ時なのだろうか。

　変わらない景色だが、明らかな変化が二つ。

　人の気配がない。人の会話や足音、生活音はもとより、車のエンジン同じすら聞こえてこない。ここは駅近くの繁華街のはず。だと言うのに見える限りに人がいない。
　そして街の中心に聳え立つ黒い塔。曖昧な輪郭のそれは、街中どこからでも見えるほどの高さを持っている。草太の目には、街中至る所からうっすらと靄が塔へと繋がっているのが見えた。もやの元を辿るために屋上から地上へと降りていく。
　もやの一つを辿ると屋内に繋がっている。何かの会社の一階、ガラスの内側に人が蹲っているのが見えた。何人もの人が横たわり苦悶の声を漏らしている。苦しげに時々みじろぎするその人達の背に、靄が繋がっている。
　おそらく、この街の住民一人一人、ただ一人の例外もなく靄が人を繋いでいる。
　一つのもやに気がつくと、その全容にも気がつく。天を仰ぎ見る。太陽は中天にある。つまり、あまりの靄に街が沈んでいる。

　セラフィモンからまずい状況と聞いていたが想定以上だ。おそらく新たな災いをパンドラモンは生み出した。
　ホーリーエンジェモンと早く合流しなければならない。が、それでも街の人々の全てがパンドラモンに繋げられているとすると、どれだけの力を蓄えているのか。
　自分たちで対処できるのか。弱気の虫が蠢いて、操られるだけで邪魔になるからと断った援軍のことが惜しく感じてくる。

「これは…ちょっとやばいか？」

　だがやらねばならぬ。そのために帰ってきたのだから。
　まずはホーリーエンジェモンと合流する。すべてはそれからだ。

　わずかな時間ではあったが、命がけの戦いと、デジタルワールドで過ごした日々は草太の鬱屈を吹き飛ばした。
　駆け出す草太の足取りに迷いはなく、その瞳は靄に沈む街のなかで唯一輝きを放っていた。

続く

バディ4話　前編

1．草太リアライズ

ふわりとした感覚が失われて代わりに重力を感じる。
世界を繋ぐトンネルというのはこうも気分が悪くなるものか。フィクションで見るようなサイケデリックな表現は意外と的を射ている。もしかしたら体験した人がいるのかもしないなと、どうでもいいことを思いながら目を開ける。
ようやく戻ってきたリアルワールド、草太の住む街だ。あいにく天気はどんより曇り模様だが、見慣れた景色が嬉しい。セラフィモンの言によれば、状況はかなり悪い状況ではあるものの、今は素直に帰還を喜びたい。が、そうも言ってられないのが悲しいところである。天使連は定期での連絡が途絶えていると言った。ホーリーエンジェモンのような単細胞ならともかく、一応は真面目に仕事しているテイルモンからの連絡がないのは問題だ。
何かが起きていることだけがわかっている。なら、状況の確認が必要だ。

現在地は街の中心に程近い雑居ビル。同じような高さのビルが乱立しているが、それなりに見通しはいい。正面からは街を東西に分断する川が見える。草太の家も目を凝らせば見えるかもしれない。北に顔を向けると駅がある。対して本数のないローカルな鉄道だが、この街に欠かせない交通機関である。スマホで確かめた時間は昼を回ったところ。妙に薄暗いのは天気のせいだろうか。あまり本数の多い時間ではないからか、駅前を行く人が見えない。
――いや、駅前だけではない。屋上のフェンスに飛びつき街を改めて見直す。あるはずのものがない。どれだけ街を見回しても、ただの一人として街を歩く人がいない。自転車の原付も、車でさえ動いているものがない。耳をすませても人の声が聞こえない。いっそ川のせせらぎさえ聞こえてきそうなほどの静寂。

1つの違和感に気がつくと後は芋蔓式に状況が見えてくる。
視界がだんだんと暗い靄によって遮られていく。その色は白。いきなり現れたのではない。それはずっとそこにあった。ただ草太には見えていなかっただけだ。自然の引き起こす霧とは明確に異なる。触れることのできない白い粒子が空間そのものに充填されている。街は靄に沈められている。
無意識下でもこの靄を捉えていたのだろう、だから妙に薄暗く感じた。まるで出来の悪い3Dメガネでもかけられたかのように、ただの風景と白いもやに沈んだ景色が同時に見えている。

そして靄を認識した草太の目には、明らかな異物が映る。街の中心、おおむね川の中心にそれはあった。天高くを突くような黒い塔。黒い靄で全面を覆われていて、塔自体の輪郭は靄の蠢きに合わせて時々姿を見せる程度。街中の白いもやは、その黒い塔に繋がっている。

なぜ人がいないのか。この白い靄は何をしてくれているのか。フェンスにかけた指に力が入る。
怒りが湧き上がる。自分の街だ。自分が育った街なのだ。それがこうも好き勝手に蹂躙されてい

る。頭に血が上るのがわかる。人のいない隙に随分と好き勝手してくれている、パンドラモンへの怒り。そして防げなかったホーリーエンジェモンと自分への怒り。
　確かに草太がいない以上全力を振るうことができないのはハンデではある。だがやつならその程度のハンデをものともせず、嫌がらせという名の遅滞戦術の1つや2つは思いついたはずだ。だというのに、このざまだ。一体何をしていたのか、あの阿呆は。そして自分は何をやっていたのか。もっと早くリアルに戻る手段はなかったのか。
 当然どちらにも出来なかった理由がある。奴が弱いものを傷つけるような真似を見過ごすことはない以上、何かがあったのは間違いない。デジタルワールドからの帰還にしたっていくつもの幸運が重なったからこその結果だ。それは草太にもわかってはいたが、それでも悪態の一つ二つは出るものである。

　雑居ビルから階段を駆け降りて街へ出る。まずは白い靄を辿る。一面がもやに覆われていても濃淡はある。そして流れがある。白い靄が濃く集まっているラインを流れとは逆に辿っていく。いや、辿るまでもなく視線を巡らせるだけでも繋がった先に何があるのかは見てとれた。
　この辺りは繁華街とオフィス街の境目だ。だから建物の一階の多くはショールームだとか店舗になっている。綺麗に磨かれたガラス越しに人が見える。俯いて体を抱きしめたまま、震えるばかりで動きがない。その背中には白い靄がまとわりついており、靄が体を出入りしている。

　それが何を意味しているのか、草太には分からない。だが、紛れもなく人を苦しめる悪意がそこにあった。

　長いことホーリーエンジェモンと契約なんてしていたものだから、草太はホーリーエンジェモンの力のタンクとなっている。別に体が強くなるわけではないが、薄いとはいえ白い靄からの影響を受けていないのは、そのおかげだと思っている。しかし、草太一人ではちょっと光らせるのが精一杯だ。おまけに肝心のパスが切れているため、今は隠し芸にすらならない、文字通り宝の持ち腐れだ。だが、それでもうずくまる人に声をかけるくらいは出来る。

「大丈夫ですか……？」
「……あぁ、……って」

　問いかけに応える言葉がない。あえぐように吐き出す呼吸にわずかながらに音が混じっているだけだ。
　身動きすら厭うようなそぶりだが、痛みを耐えるような雰囲気ではない。だが、それが何かはわからないが、苦しみであろうことだけは草太にもわかった。
　この状況をあの天使が見ていられるわけもない。誰も道路上にいないのはおそらくはテイルモンと協力して屋内へと運んだのためだろう。まだ凍えるような季節ではないが、それでも野外に留まるのは問題がある。雨に濡れれば死人が出かねない。
　草太の前に横たわるこの人は息も絶え絶えだ。雨風に当たることはない、ただそれだけだ。あの二人がただ屋内へと避難させるしかなかったということだ。
ただの人間に過ぎない草太に出来ることなどない。
　だからせめて、自らの内にあるホーリーエンジェモンの光が届くようにと、背に手を当てる。わずかでも安らぎを届けと願う。

　ぐつぐつと煮えたぎるような怒りの中、パンドラモンを想う。
　これまでパンドラモンが行ってきた活動は二つ。少女――高間こより――の力を利用したデジモンのリアライズ。そしてゾンビタトゥーを用いた破壊活動。パンドラモンが餌とする、負の感情を生み出させるための手駒作りだ。
　デジモンを暴れさせて恐怖を煽り、自らの餌とする。草太達によってその尽くを潰されていても、ゾンビタトゥーによる支配は究極体すら従えるほど強まっていた。
　そして、邪魔するホーリーエンジェモンも、草太がデジタルワールドへ飛ばされたことで敵ではなくなった。

　そうだ、天敵のいなくなった猛獣が何をするかなど決まっている。より自らの力を高めること。つまり、そのための手段がこの白い靄だ。

「――これが、人に向けた災いか……！」

　元々予想していたことではあった。だが、直接目にするとその衝撃は大きい。

　パンドラモンが食うのは負の感情だ。デジタルワールドではデジモンの、リアルワールドでは人が生み出す苦しみを食べてきた。リアルワールドではデジモンを暴走させて危害を与える形で。つまりパンドラモンにとってデジモンも人もどちらも等しく獲物でしかない。
　いつパンドラモンの災いが人に向けられてもおかしくはなかった。むしろ人が住むリアルワールドであるならば、人に直接牙を向けるのが道理だろう。それが遅れたのは天敵たるホーリーエンジェモンがいたからだ。

　草太がデジタルワールドにいたのは七日間程度。漫画や映画では時間の流れが違うなんてのもよくある話だが、幸いスマホの日付は草太の感覚と一致している。約7日間。最悪ではないが、まあまあ悪い。ホーリーエンジェモンが全力を振るうためには草太の承認が必要である以上、実質的にパンドラモンは野放しに近い状況にあったわけだ。
　おまけにこの白い靄は実質的に人の身動きを封じている。ホーリーエンジェモン達の弱みを知っているのだ。どれだけ生意気な口を叩いていようと、ホーリーエンジェモンは人を、弱いものを見捨てることをしない。力を奪い、自分を強化しつつ時間を稼ぐ一手。その結果がこの白い靄に沈んだ街というわけだ。そして、その力の結晶が街に聳える黒い塔なのだろう。

　後ろ髪を引かれる気持ちを払って店舗を後にする。できることをしなければならない。今やるべきことはホーリーエンジェモンとの合流だ。
　呻き声だけが漏れ出す街に草太の足音だけが響く。白い靄に草太の影が映る。今はただ、駆けるしかない。

　＊＊＊

　パンドラモンの権能は災害を生み出すこと。パンドラモンがこれまでに作り出した災いの一つを天使連はゾンビタトゥーと名付けた。しかしそれはあくまで天使連のつけた名称である。

パンドラモンが生み出した災いの本質は“暴虐“であり、”支配”である。そしてそれを広げる黒い靄こそが“連結”。嗜虐性を膨らませ、争いを広げるために、３つの災いが巻き散らかされていたのである。

もし、これらを人の世界に渦巻く災いとしていうのならば、それは戦争と疫病である。

なればこそ、次なる災害は、”飢餓”。

2．それまでのホーリーエンジェモン

草太が自らの作り出したヘブンズゲートへ飲み込まれてから早くも1日が経過した。
本来ならばケレスモンを除去した以上、すぐにパンドラモン封印を再開すべきであった。それが出来なかったのは高間こよりの存在があったからだ。

高間こよりはパンドラモン逃走における重要参考人である。天使連の結界内からの脱出、ひいてはデジタルワールドからの逃亡を許すことなった原因であり、最も長くパンドラモンと過ごした存在でもある。
封印から逃れてからの動向を知るためにはこの少女の証言が必要となるのだ。封印措置を取るほどの存在だからこそ、ありとあらゆる調査が求められる。

ホーリーエンジェモンからすれば、高間こよりに大した価値はない。利用されていたことは明らかだし、パンドラモンの行ってきたことを後から追うくらいなら直接捕まえて吐かせる方が早い。せいぜい運の悪い人間だというのがホーリーエンジェモンの認識である。だからさっさと然るべき医療機関にでも引き渡してパンドラモン追撃に移りたかったのだが、それをとがめたのがテイルモンである。

パンドラモンの協力者であるという疑いから厳しい目で見ているものの、少女を助けた少年からは直々に身柄の安全を頼まれている。パンドラモンが少女を取り戻しに来る可能性を考えると、病院というわけにもいかない。まして、彼女が受けたのはパンドラモンの黒い靄そのものである。浄化出来る我々がまずは引き受けるべきと譲らない。元々テイルモンの気質としてはひどい目にあった少女を受け入れてやりたいと思っていることもあって、まずは高間こよりの安全を優先すべきと主張したのだ。

実際パンドラモンの居場所がはっきりしているわけではない。まさか同じ場所に意味もなく留まるはずがない。どちらにしても草太という外付けタンクを失ったホーリーエンジェモンは弱体化している。ケレスモン相手に全力以上を出し切って消耗した体には回復する時間も必要だった。無闇に街を探し回ろうが、こよりの保護を優先しようが大差はない。そうテイルモンに主張されると反対意見も大したものが出ない。だからこの時はホーリーエンジェモンも渋々その判断を受け入れることになった。

実際に真っ当な判断ではあったが、同時にパンドラモンを窮地から救う判断でもあった。

　ホーリーエンジェモンが知る由もないことだが、パンドラモンはこよりを囮に使う直前までいた場所に留まっていたのだから。ホーリーエンジェモンと草太をリアルワールドから排除するために、全力であったのはパンドラモンとて同じだった。手元に移動用のデジモン一匹すら残さなかったのだから。
　もし仮にこよりが直ぐに目を覚まし、その場所を指し示しさえすれば話は大きく変わっていたに違いない。

――だが、そうはならなかった。

　その判断を、すぐにでも討伐に向かうべきだったとホーリーエンジェモンは後悔することとなる。

***

　高間こよりを長峰家の草太の部屋へと運ぶ。なにせここが一番馴染みのある安全な場所だ。家主不在のベッドに少女を寝かせる。家に運び込む前に、近所の老人たちに捕まってしまったが、逆に高間こよりの病人としての扱いについて聞くことができたのは災い転じてなんとやらだろう。

「草太ちゃんはどうしたの？あの子は全然病気しない子だけど、看病くらいは出来るでしょうに。」
「そうよねぇ～、いっつも半ズボンで走り回ってたのに、風邪ひとつ引いてなかったわよねぇ。」
「あのアホのことはいい。やつは不在だ。とりあえず今は寝かせておけばいいんだな。熱が出るようなら病院行きと。よし分かった。なんだ、さっさと散れ。」
「もう、すぐに邪険にするんだから。ちゃんと世話するのよ、ホーリーエンジェモンちゃん。」

　がやがやと話し続けようとする老人たちも、病人の前で続ける気はなかったらしい。すぐに解放される。いつもこの位大人しくいうことを聞くならば苦労はないのだが。
　少女は草太のベッドに寝かせて、あとはみていたテイルモンに任せる。

「ええっと、この子は寝かせていればいいんですね？」
「そう言っていたろう。やばそうなら病院に置いてくればいい。」

　そしてそのまま窓から飛び立とうとする。が、テイルモンに金布を引っ張られ引き留められる。

「待ちなさい、ホーリーエンジェモン。あなたの行動の速さは褒められるべきものですが、無言で飛び出していくのはよくありませんよ。」
「これ以上やつに時間はやれん。それとも状況の悪さを分かっていないのか？頭まで 家猫に成り下がったのなら大人しくそいつの脇で昼寝でもしてるといい。」
「ホーリーエンジェモン……！　苛立ちをぶつけるのはやめなさい。八つ当たりなどと情けない真似をする天使がありますか？あなたこそ、状況を判断しなさい！」

　ホーリーエンジェモンにとっては痛いところをつかれた形だ。草太がいなければケレスモンによ

る街の破壊を防げなかったこと。そしてデジタルワールド行きとはいえ、自らの必殺技を草太へ向けたこと。どちらもホーリーエンジェモンのプライドを傷つけるには十分な出来事だった。いらだちは言葉に、怒りは仕草に、短慮は行動に出る。いつもよりも口が悪いのはその発露だ。
　ゆえに、テイルモンの言葉は痛烈に響いた。普段なら一顧だにしないが、自身が一番このイラつきを理解している。大人しくというには荒々しく、テイルモンに向き直る。

「……ちっ。」

「状況をまとめます。私達の戦力は著しく低下しています。あなたの全力が出せないこと、草太さんの協力が得られないこと。主にこの二つ、実際一つではありますが。草太さんの捜索は天使連に依頼済みですが、どのくらいかかるかの見込みはありません。ここまではいいですね？」
「ああ。対してパンドラモンはせいぜい手駒を失った程度か。高間こより無しでもデジモンを呼び出せる以上、時間は奴の味方だ。早々に叩く必要がある。」
「ええ。でもそのための戦力が足りないんです。私たちだけではジリ貧なんです。それは分かるでしょう？なのにあなたときたら、一人で勝手に外をほっつき歩こうとするんですから。反省文一回じゃ足りませんよ、まったく。」

　ねちねちと過ぎたことを繰り返してくる。普段こそ落ち着いた風に見せているが、その実いつまでも怒りを根に持つのがテイルモンだ。草太の前では物分かり良くお上品な姿を取り繕っているが、本来はバタバタと落ち着かない上にしつこいのがこいつの性格なのだ。
　ただ、どんなにしつこく言っていようと、優先順位を違えることはない。怒りを逸らすのは簡単だ。

「手札が足りないなら増やせばいいだけだ。大して役に立たんだろうが、天使連から適当に何人か呼べばいい。上もこの期に及んで二の足を踏むような無様は晒さんだろう。」
「あなた……、だから嫌われているんですよ。」
「だからどうした。木っ葉どもが役に立ったことがあるなら言ってみろ。そもそもパンドラモンに出し抜かれたのは上の問題だ。たまには尻で椅子を磨くだけの平和ボケした連中を働かせるべきだ。」
「それは言いすぎですよ、ホーリーエンジェモン。でも、すぐに手配をかけます。」

　部屋を飛び出すテイルモンを一顧だにせず、窓から外を眺める。高めの立地だから見通しはいいが、かといって別にいい景色というわけではない。面白味のないただの街が見えるだけだ。なんのこともない、どこでも見られるような光景。だが、ホーリーエンジェモンはその街に暮らす人を知ってしまった。ただの街を飽きることなく眺める。

＊＊＊

　普段、ホーリーエンジェモンは草太の部屋には入らない。いや、一度だけ入ったか。あの時はウジウジとした草太の態度に耐えかねて罵声を浴びせたのだった。面食らった表情が痛快であった。だが、あの時言われた言葉はホーリーエンジェモンとて身に堪えた。

”何もない薄っぺらな正義”

自分の目指す正義とは何であるのか。そんなことは決まっている、力だ。何者にも屈することのない、純粋な力。それこそが正義。そのはずである。
ろくに食べ物も得られず、ただ弱って死んでいく仲間を見るだけの日々。そんな立場を抜け出せたのは、セラフィモンが自分を見出したからだ。か弱い成長期だった自分にはあの薄汚い路地を抜け出す力などなかった。そのための手段を考えることすらできなかった。だからセラフィモンが見せた力に焦がれた。徒党を組んで治安を崩し続けていた連中を、軽々と吹き飛ばしていく姿に希望を見た。
絶対的な力が欲しかった。誰にも舐められることなく、誰からも咎められることがない。何をすることだってできる。そう、力があれば地獄のような世界であっても変えることができる。力がなければ選択肢を見ることすらないのだ。未来を望むための力、それこそが正義だ。

ホーリーエンジェモンは自分の力を、正義を信じている。力がなければ人に手を差し伸べることはできない。まして救うことなどできやしないのだと。そう、信じていた。ひ弱な人間が、ひ弱なままに人を助ける姿を見るまでは。

それはホーリーエンジェモンがリアライズした直後のことだった。先に到着していたテイルモンから緊急との連絡を受け、狭苦しい路地に急行し、興奮するミノタルモンと怯える人間を見た。リアルワールドの人間の脆弱さは聞いていたから、そのままではミノタルモンが人間を殺してしまうだろうと思った。割って入るかと翼を広げた時、路地に立つ者がいた。そして見た。サラリーマンを叩き潰す直前のミノタルモンと、それに空き缶を投げつける草太の姿を。
人とデジモンには生物として隔絶した"差"が存在する。人間がデジモンと正面からやり合う場合、ライフルやマシンガンを持ってようやくスタートラインが揃う。いわんや無手では戦いにすらならないのだ。だが、それでも草太はミノタルモンの気を引いて、殺される直前のサラリーマンを見事に救って見せた。

何一つ特別な力のない、ただのひ弱な人間の子供。本来ならサラリーマンがつぶされる姿を見るか、その前に逃げるか。取れる選択肢はそれだけだったはずだ。岩を砕く腕力も、木々を焼き尽くす炎も、自在に風を操ることもできない人間という生き物。案の定、喧嘩を売っておいて即逃走などとみっともない真似をかます始末。もしホーリーエンジェモンが助けなければ、あの時草太はミノタルモンにつぶされて死んでいたことは間違いない。
――それでも、あのサラリーマンは生きていた。命を助けられていた。よろよろと、感謝と謝罪を繰り返しながら、あの路地を抜け出すのをホーリーエンジェモンは見届けている。確かに命が救われた瞬間を見たのだ。

本当は人間と契約するつもりなどなかった。力のない人間に変えられるものなどないと考えていたからだ。だが、草太はそれを見事に覆してみせた。何を得するでもなく、対処できる力もない。正義のないあの場において、あのサラリーマンは確かに救われた。ホーリーエンジェモンがいなければ草太は殺されていただろうが、間違いなくサラリーマンの命は助かっていたのだ。

だから、命を投げ出すようにして他者を助けようとした、その理由を、ホーリーエンジェモンは

知りたかった。

　***

　視界に映る街はいつもとなんら変わるところがない。道を歩く人々、スピードを出しすぎている自動車、我が物顔で奇声を上げる子供。リアルワールドのありふれた景色。つい半日ほど前に壊滅しかかったとは思えない。
　人間にはどうもおかしなところがあるらしく、パンドラモンの脅威から助けた人間は不思議な挙動を示す。命が助かったことに安堵し、感謝を大袈裟に口にし、そして、ホーリーエンジェモンに安心を告げる。天使様がいるのならばと、胸を撫で下ろすのだ。大丈夫だねと笑うのだ。ただ一度助けただけのホーリーエンジェモンに、なぜそこまで無防備な顔を浮かべられるのか。人間の世界はどうも科学が発達しすぎたせいか、警戒心というものが欠如してしまったのだろう。本能すら失いつつある哀れな生き物。そう思っている。
　――しかしその表情が妙に頭に残るのだ。

　バタバタとテイルモンが駆け込んでくる。同時にホーリーエンジェモンも事態を捉えた。

「大変です！　天使連と連絡が取れません！　どうして？さっきまでは繋がったのに！」
「落ち着け馬鹿者。何があったかだと？決まっている。パンドラモンが動いただけのことだ。外を見てみろ。」

　がしりとテイルモンの頭を鷲掴みにして窓まで持ち上げる。うぐっと声を上げるテイルモンも、窓から見える景色に声を失う。
「白い…靄？」

　高台にある草太の部屋からは、街の景色が割とよく見える。街を分断する川の先、駅や繁華街のある東側の区画がぼやけている。いや、ぼやけているのではない。どこからともなく発生した白い靄が街を包み込もうとしているのだ。

　***

　――日常は崩壊する。

　オフィスでパソコンに向かう一人のOLがふと空腹を覚える。昼食を取ったばかりなのにおかしいなと腹をさする。
　遅めの昼ご飯を掻き込むサラリーマン。ろくに噛まないからいつも食べ過ぎてしまう。それでも満腹感が感じられないことに疑問を覚えながらもおかわりをする。
　ダイエット中だと言っていつも小さな菓子パンしか食べない女子高生。いいかげん慣れたはずの空腹感がいつもより大きい。たまにはハメを外してもいいよねと、もう一つパンを買いに行く。
　懐から飴を取り出す老婆。コンビニでホットスナックを買う学生。小学生はお腹を水で満たすように水道に並ぶ。それぞれが小腹を満たそうと、何かしらのものを口に入れていく。しかし空腹が収まることはない。

次第に気がついていく。これはおかしい。どれだけ腹を空かせていようが、食べたら食べただけ腹が膨れるのが道理だ。たとえ一欠片の砂糖ですら、一時を紛らわせることができるのだから。だというのに、飴玉に菓子パン、水もコーヒーも山盛りの白米でさえ空腹を満たすことができない。
食べても食べても底なしの欲求が体を苛む。目の眩むような空腹感。それはすでに空腹というよりは飢えと呼ぶべきだ。本能が叫ぶ。このままでは飢えて死んでしまうと。もっと食べなければならない。この飢えを満たせと全身が訴えかけている。
確かに食事をとっている。食べ物の食感、香り、見た目にも食べていることははっきりしている。それでも満腹につながることはない。いや、それどころか食べれば食べるほど空腹が加速する。腹がすいたという一言すら思い浮かべられない。
手元の食べ物はすぐに食べ尽くしてしまう。それでも飢えは続き、だんだんと体から力が抜けていく。食べなければ動けない。当然の理が、理不尽な欲求に屈する。すでに立ち上がる力すら奪われ、ただうずくまっていく。
そんな彼らを取り巻くように、白い靄が浮かんでいる。苦しむ人から“何か“を盗み取り、白い靄は蠢く。

パンドラモンはそれを見下ろしている。黒い靄――ゾンビタトゥーに包まれ真っ黒になったデジモンを従え、ビルからビルへと飛び移っていく。苦しみに喘ぐ人々を嬉しげ眺め、あざ笑いながら。

***

この世界はパンドラモンにとっては理想的な餌場だ。例えるなら非常に心地のいい三つ星レストラン。たかが成長期程度のデジモンであっても、少し暴れさせるだけで負の感情がいくらでも手に入る。デジタルワールドで得られたそれなど薄い出涸らしにしか思えないほど、リアルワールドの人間が齎す感情というのは芳醇だ。恐怖一つとっても怯え、不安、逃避、願望。複雑な思考が絡み合ったそれは全てがごちそうだ。いつまでも飽きることのないメインディッシュ。

ただ、この快適な環境にも邪魔者がいた。あの忌々しい天使だ。

耳障りな笑い声で不快な光を撒き散らす天使。パンドラモンにとっての悪魔。パンドラモンが苦労して調整したゾンビタトゥーを破壊し、人の負の感情を散らしていく。最近では奴が現れるだけで絶望が薄れていく。そもそもとしてパンドラモンの力は天使の持つ力と相性が悪い。数で押そうが力押しだろうが、パンドラモンの攻撃をスルリと交わし、こちらの勢力を的確に削っていく。鬱陶しいことこの上ない邪魔者だった。
しかしそれも終わった話だ。あの小娘と虎の子の究極体を使った甲斐はあった。溜め込んだ力の大部分を放出することになったが、天使の力の源である生意気な人間を世界から追放することができた。理解に苦しむことに、わざわざ人間に力を預けていたらしい。おかげでひ弱な人間一人いないだけで、見事に役立たずの鶏がらに成り下がっている。無様すぎて自然笑みがこぼれる。

思えばあの人間もパンドラモンからすれば不愉快の塊である。どうもパンドラモンの考えを読んでいたふしがある。いかにも単細胞で頭の足りていない天使が曲がりなりにも戦えたのはあの人間の入れ知恵なのだろう。

ケレスモンを操っていたゾンビタトゥーのコア、そこに叩き込まれた蹴りはパンドラモンにまで衝撃が届くほどの力が込められていた。ケレスモンの墜落で街が破壊される直前の、追い詰められていたはずの状況。だと言うのに、パンドラモンへ伝わってきた力を構成していた感情は、純粋な光そのものだった。頭の固い天使などよりよほど恐ろしいもの。一切の疑いなく自分の去就を委ねられるほどの信頼。未来を思い描く希望。パンドラモンが求める"負"とは正反対の感情。あの瞬間に感じた言葉にできない畏れは、パンドラモンにとって許容できないものだ。
だからあっという間に味方のはずのホーリーエンジェモンのゲートに吸い込まれていった時にはらしくもなく快哉を上げたものだ。力も知恵もないまさに鳥頭だけがこの世界に残るとは、なかなか愉快な話である。

もし、人間がパンドラモンの脅威となりうるのなら、人間を動けなくしてやればいい。新たな災いは、人を苦しめ、思考を制限し、負を捧げるだけの贄とする。この白い靄がいくらでもパンドラモンを強くする。唯一の懸念を除去できた以上、パンドラモンの行手を阻むものなどない。もはや天使などものの数ではない。たとえあの天使連が押し寄せてこようとも、パンドラモンに負けはない。

この世界はずいぶんと広くて、負の感情が尽きることがない。パンドラモンは生まれて初めて満足という感情を覚えていた。一つとして同じものはない、人間の心の動き。それが生み出し続ける甘露を延々とすすり続けることが出来る、まさに天国だ。

ああ、人とはなんと愛おしいことか！パンドラモンの欲望と笑みが途絶えることはない。

***

生み出した災いとは、”飢餓”。生きるものが逃れえぬ欲求を溢れさせる。白い靄をわずかでも吸い込めば、本能を暴走させ、空腹が体を満たす。代わりに人に与えられるのは生命。どれだけ食べ続けようと、どれだけ絶食しようと、白い靄が命を繋ぐ。ここはパンドラモンのための食卓。この世界の苦しみはパンドラモンへ供するための食材だ。白い靄はさながら料理人でありウェイターである。その営みを途切れさせるわけにはいかない。苦しみに喘ぐ人々は、永遠に贄となり続けるのだ。

***

街を白い靄が蹂躙していく。
無論黙ってみているホーリーエンジェモンとテイルモンではない。ホーリーエンジェモンが窓から一気に飛翔する。テイルモンは一瞬迷ってから、尻尾の先についたホーリーリングを外す。状況が分からない中離れたくはないが、ホーリーエンジェモンを野放しにすることもできない。代わりに自身の力を蓄えているリングを枕元に置いておくこととした。小さくとも守りとして十分に機能するだろう。最後にノートの切れ端に大人しく待っているようにとメモ書きを残す。そして草太の部屋を飛び出して行った。

先行して白い靄に接触したホーリーエンジェモンは、この靄に違和感を覚える。これまでの黒い

靄と異なり、そこにあるのに上手く認識ができない。見下す先には苦しむ人々。この白い靄が、人の近くに集まっている。まるで白い繭に包まれたようにその姿を覆い隠す。
　明らかな異常。これまで黒い靄が人そのものを狙うことはなかった。しかしこの白い靄は人に集っている。何かがこれまでと違っている。それでも靄は靄である。パンドラモンが作り出した悪意の結晶である以上、ホーリーエンジェモンの力が効かない道理はない。4対8枚の翼が大きく風をはらみ、柔らかな光を乗せて街へと吹き抜けていく。
　だが、風に揺らぎもせず、依然として白い靄はその場に漂い続ける。揺らげど薄れず、人から離れることもない。

　想定外の現象に戸惑うホーリーエンジェモンに、遅れてやってきたテイルモンが声をかけてくる。

「ホーリーエンジェモン、あなたは下がっていてください。」
「ぬかせ、この程度吹き散らしてくれる。」
「それより街の人を避難させてください！まずは少しでも被害を抑えなければなりません！その間に私がこの靄を調べます。いいですね？」
「……ちっ、いいだろう。言い出したのならやって見せろ。人の避難は屋内ならどこでもいいな？さっさと済ませてパンドラモンの捜索にかかるぞ。」

　いうや否や路上にうずくまる人々を抱き抱えて近くの民家や店、少しでも横になれそうな場所へと避難を開始していく。その間にも白い靄は、駅周辺から徐々に広がり続けていくのだった。

***

　その日のうちにテイルモンの調査は完了した。
　苦しむ人たちからのヒアリング――苦しみへの耐性には個人差があるらしい――まだ話す事のできる人によれば、突然に空腹が始まり、何を食べても満たされることがないのだという。靄は街の人にはみえておらず、ひだる神の祟りであると怯える人さえいた。
　重度の飢餓感は大人に子供、男女問わずに生じており、信じがたいことに犬猫にそこらの鳥にネズミでさえ無縁ではなかった。
　この白い靄が効かないのは、デジモンだけ。実際どれだけ白い靄の中で活動しようとホーリーエンジェモンどころかテイルモンでさえ欠片も影響を受けることはなかった。

　これまで黒い靄は物理的な影響はともかく、ゾンビタトゥーの効果が人に対して効果を齎すことじゃなかった。だがこの白い靄はその逆である。まさにリアルワールドに特化した災いである。
　靄は依然として街の中心から徐々に広がりつつあり、現状ホーリーエンジェモンたちはこの被害の拡大を防ぐ方法を見出せていない。パンドラモンさえ討てば拡大は止まるだろうが、この飢餓を解消する方法がない。
　かつてデジタルワールドでパンドラモンが猛威を振るった時には、ゾンビタトゥーも黒い靄も天使型デジモンのもつ聖なる力があれば除去できた。しかしこの白い靄はそれが通用しない。パンドラモンを仮に封印、もしくはデリートできたとしてもこの飢餓が消える保証がないのだ。
　さらにタチの悪いことに、この靄は空腹が齎す苦しみを吸い取り、代わりにわずかな生命力を人

に注いでいる。生きていくために最低限の保証がされているのだ。まるで点滴かのごとく。死に至ることはなく、延々と苦しみだけが続く生き地獄。また、飢餓の状態が酷い人間については、食べている感覚すらないままに食事を続けている。どれだけ腹がふくれていようと、飢えの苦しみが手を止めさせない。たとえ腹が破れようと食べるのをやめられないのだ。どれだけ苦しませることになろうと、食べ続けることだけはやめさせなければならない。
　報告を聞いてホーリーエンジェモンが慌てて店に避難させた人々を再度別の場所へと避難させていく。

　抑制されていてもホーリーエンジェモンの力はパンドラモンの黒い靄に対して特攻をもつ。白い靄への効果はないが、わずかでも慰めにはなる。もう何度目になるか、ホーリーエンジェモンが自らの力を柔らかな光に変えて苦しむ人にかざす。一瞬だけ苦しみが薄れるものの、それでも苦しみが途絶えることがない。
　どれだけ力を込めても、白い靄がはれることはない。金の布に隠されたホーリーエンジェモンの表情は凶相というにも生ぬるく、食いしばる表情がまるで笑っているかのように見えるだろう。

　近場の人を屋内に避難させた後も、白い靄に埋まった領域を巡って動けない人を避難させていく。羽ばたきは荒く、風打つ音があたりに響く。意識せずとも人々の呻き声が耳に入ってくる。どこにいても聞こえてくる。人間より遥かに広い範囲まで届く耳が、苦しげな息遣いを捉え続ける。

「……苦、しい。誰か、何か食べ物をくれぇ……。」
「お腹すいた……何か、食べ物を……。」

　誰もが救いを求める。しかし、その願いに応えられるものが、いない。

　ホーリーエンジェモンが見たこの世界は、食べ物の溢れる豊かな世界であった。味にこだわらなければコンビニの軽食が24時間いつでも手に入るし、スーパーに行けば新鮮な食材を選ぶことさえできる。飲食店は乱立し、多様な料理が並べられた看板には、ホーリーエンジェモンからして安価であると認識できるような値が付けられている。
　生真面目なテイルモンなどはどこかの主婦にでも被れたのか、飽食がどうこうとケチをつけるくらいである。しかし、それがどうしたというのか。食べられない苦しみに比べれば、飽食などただの言いがかりだ。
　食べるものがある。衒いなく腹を満たすことができる。自身が育ったあのスラムにはありえないすべてがある。だからこそそんな上等な世界でどうでもいいことに鬱々と言い訳している草太に怒りが湧いたわけであるが。

　だというのに、これはどうしたことだ？
　溢れるほどの食べ物を前にして、飢えて苦しむ人がいる。底の抜けた食欲が人の心を歪めている。ホーリーエンジェモンが夢見た世界が、台無しにされていく。

　ホーリーエンジェモンが最も恐れる世界がそこにあった。

　身の内から震えるほどの怒りが湧き上がっている。一瞬たりとも留まらぬその怒りが、行き場を

求めて溢れ出しそうだ。これは、どこに向ければいい？
　当然パンドラモンだ。やつにぶつければいい。だが、それだけではこの人々は救われない。パンドラモンを首尾よく封印できたとしても、ゾンビタトゥーが自然に消えることはなかった。であれば、この飢餓も自然に消えることはないだろう。まして、ホーリーエンジェモンの力で消すことができないこの呪いから、誰が解放できるというのか。

　ホーリーエンジェモンが培ってきた力が、自分自身を支えてきた力――正義が、まるで役に立たない。

　か弱い人間が助けを求めている。それに手を伸ばすことができるようになったはずだ。そのはずだった。だが現実には何もできやしない。この苦しみを止められない。
　近くにいるサラリーマンがホーリーエンジェモンに手を伸ばす。心の混乱を押し殺して手をとる。わずかであろうと安らぎがあるようにと、力を注ぐ。こんな役に立たない力であっても、サラリーマンは礼を言ってくる。

　ウロウロと避難所として人を集めた屋内を歩く。
　子供がいる。いつもホーリーエンジェモンの羽根を欲しがっていて、好きあらば引き抜こうとしてくるやんちゃな子だ。今は青い顔でほとんど意識がない。そばに寄り添う女性は保育士だ。ベテランの保育士で、一度園児を抱いて空を飛んだら危ないだろうと説教をされたことがある。最後に自分もやりたいのにと本音をこぼして子供達に突っ込まれていた。あれほど温かく、凛々しい人だったのに、今は力なくうなだれて、目もうつろだ。しかしそれでも少年の手を握り続けている。
　そばにひざまづく。ホーリーエンジェモンに気がつき、少しだけ目に光が戻る。

「お迎え、かしら？……ごめんね、冗談。ちょっと力が出なくって……。でも、もし連れていくなら、私からお願いね……。この子はまだ早いと、あなたも思うでしょう……？」
「貴様など連れていくものか。図々しい。身の程をわきまえろ。このクソガキもだ。うるさくて敵わんからな！」

　悪態しかつくことができない。だというのに、何をできたわけでもないのに、保育士の表情が和らぐ。

「あなたが、そう言ってくれるなら……、私たちは、大丈夫ね……。もう、そんな顔して。怖がって、子供たちが逃げちゃうわよ。」

　ホーリーエンジェモンの頬に手が伸びる。飢えと疲労で少し震えている。身動きするのでさえ苦痛だろうに、そのか弱い手が、ホーリーエンジェモンに触れる。ひんやりと冷えていて、それでも触れた温もりがホーリーエンジェモンの心に残る。腕を上げるためだけに、どれほどの力を込めていたのだろうか。空腹で動けないというのに、無駄な動きなどする余裕などないだろうに。
　だからホーリーエンジェモンは笑った。いつもそうするように、誰もかもを見下すように。弱く哀れで惨めなものに対して笑う。何もできずにただ励まされただけの自分を笑う。急拵えの避難所に高笑いが響く。何もできない惨めな大天使が、なんの力も伝わらないただの笑い声が反響する。

「少しだけ耐えていろ。腹を抑えれば少しは気がまぎれる。……すぐ、とは言わん。だが、必ず貴様らを苦しみから救ってやる。……おい、聞こえているな？　よし、ではその時を待て。」

　保育士と少年に言うだけ言って反応を待たずに外に出る。まだ、この街全てを見回れたわけではない。少しずつ広がっていく靄のせいで、手が足りない。避難が終わらず、路上に倒れこむ人がまだいる。動けるのはホーリーエンジェモンとテイルモンだけ。だから体だけは動かしていく。
　自らの嘲りが生み出した高笑い。屈辱すら感じるホーリーエンジェモンは怒りで気づくことはなかったが、避難所のうめき声は、苦しみは少しだけ小さくなっていた。

***

　ホーリーエンジェモンの頭の中はぐちゃぐちゃになっている。何もできることがない。何一つ役に立つことができない。　天使連に拾われてから、ホーリーエンジェモンは自分の力を疑ったことはない。それだけの修練を積んできたし、十分な実績がある。
　だが、そのプライドが、正義が揺らいでいる。

　降り立った町外れの弁当屋では、店員が弁当をむさぼり続けている。
「もう食べたくない、嫌だ、苦しい、いやだ……。」
　どれほど食べようが、空腹が消えることはない。どれだけ食べようと、満たされない苦しみだけが残る。それでも手を止めることが出来ない。はち切れそうな胃が悲鳴をあげている。それでも飢えに耐えられず口にしていく。食べても、食べなくても苦しみは終わらない。

　これは、なんだというのか。
　食事とは、こんなものではない。空腹に苦しむことも、泣きながら食べることもない、もっと満たされるべきもののはずだ……！
　しかし、こんなものは知らない。この店員は、このままでは飢えに任せて腹が破れるまで食べ続けるだろう。苦しみに泣き続けるだろう。
　無理やりに店員を弁当から引きはがす。はちきれんばかりに膨れ上がった腹にはもう食べられる隙間などないはずだ。だというのに、店員は必死で引きはがされまいと抵抗をする。助けてくれ、邪魔をするな、もう食べたくない。矛盾した言葉でホーリーエンジェモンへ救いを訴えかける。

　ホーリーエンジェモンにとって、食事とは救いだった。どれだけみじめでひもじい思いをしても、わずかな糧があるだけで明日を信じる気になれた。飢えずに食べることのできる生活が欲しかった。わずかな糧を奪われることのない力が欲しかった。力のない、かつての自分が顔を出す。虐げられるだけの脆弱さ。パン一つ得るだけでも命懸けの日々。仲間は次々と死んでいき、最後まで残ったのが自分だった。弱っていく仲間に食べ物を与えることすらできず、ただ消えるのを見てきた。
　弱さは罪だ。何ものからも害されず、害させない。それが正義だ。そのための力だ。そうならないように、そうさせないために力を得たのではなかったのか。セラフィモンに見出されて、辛く長い修練でも、そのためなら耐えられた。そうして今があるのだ。

　今、ホーリーエンジェモンは力を得た。正義がある。なのに、できることがない。

　頭が沸騰するような怒りが体中を駆け巡る。
　一体何をどうすればいいのかもわからない。ただ、これは悪だ。世界中の悪意をより集めた災厄がここにある。

　パンドラモンを必ず除かねばならない。
　初めはただの義務だった。苦しむデジモンに同情しつつも、正義を身に宿す者の責務として封印をするだけだった。
　今は違う。煮えたぎる怒りが、腹の底から全身をめぐる。パンドラモンは生きていてはならないものだ。どうあってもこの世界、リアルワールドとデジタルワールドから奴を滅さねばならない。
　喜びを喜びへと戻さなければならない。

3．これからを戦う

　白い靄の拡大速度はだんだんと遅くなっている。単純に広がるほど面積は広がっていくため、パンドラモンとはいえども一気に街全部を飲み込むことはできない。避難がひと段落したこともあり、二人は拠点となる草太の家へと戻ってきた。避難だけではなく、こちらから攻め込む必要がある。そのための対策を話し合うためだ。また、テイルモンとしては部屋に残してきたこよりのことが気になるということもある。
　幸い草太の家まではまだ距離があったことと、ホーリーリングの力が守ってくれたのか、飢餓の兆候は見えない。

　すでに目を覚ましていたこよりが、ぽつりぽつりとこれまでの経緯を話す。
　ホーリーエンジェモンとしては語られる全てを信じるつもりはない。だが、それが悪意を持って行われたとは思わない。

「あの、テイルモンとホーリーエンジェモンさんはこれからパンドラモンと戦うんですよね……？」
「ええ。私たちはそのために来ましたから。それに、あの白い靄を何とかするためにも、パンドラモンを逃すわけにはいきません。」

ホーリーエンジェモンとしてもパンドラモン封印・打倒は使命以上の理由がある。

「……私も、連れて行ってくれませんか。」
「こより…。病み上がりのあなたを連れて行くことはできません。無理をする必要はありませんから、まずは体を治すことだけ考えて。」
「それじゃダメなんです！私が原因だって分かってるんです！あの時、私が手を差し出したりなんかしたから、こんなことになってるんです！だから、だから待っているだけなんてできません！お願いします！なんでもします！だから、私も連れて行ってください…！」
「こより……、私は「いいぞ。」何を言ってるんですか！ホーリーエンジェモン！」
「明日の夜明けにパンドラモンを潰しに行く。テイルモン、貴様はそいつと契約しろ。その姿では対して役には立たんが、進化すれば話は別だ。」

　全力を振えないホーリーエンジェモンとしては戦力は多い方がいい。ただでさえ靄の中心近くは状況がわかっていないのだ。避難すべき人間がいる可能性を考えれば、人を抱えて運べないテイルモンより、進化してもらった方が都合がいい。

「……分かりました。こより。今からあなたと契約をします。一度契約をしたなら、もう泣き言は許しませんよ？それでも、本当にいいんですね？」
「はい！よろしくお願いします！」

　契約についていつかも聞いた話を始めるテイルモンと少女を置いて空へと羽ばたく。最寄りの鉄塔に足を下ろして街を眺める。夜の街は普段であれば街灯や家の明かり、ビルの煌びやかな光があたりを照らす、なかなかの見物だった。今も街灯は道を照らしているし、誰も消すもののいないビルの電気は煌々と灯ったままだ。それらを覆う靄さえ無ければ、夜景としては十分だろう。
　風に揺らぐことのない白い靄に光が滲んでいる。そこにはただ明かりがあるだけ。人の営みはそこにはない。何一つ面白味のない風景だ。ホーリーエンジェモンはそのまま鉄塔から動かずその風景を目に焼き付けていく。
――決して怒りを途絶えさせないために。

***

　パンドラモン討伐へ向かう。陽が昇る直前の濃い藍色の中、3つの影が街の中心へと走る。
　ホーリーエンジェモンを先頭を滑るように飛び、テイルモンが後に続く。新たにテイルモンと契約を交わした高間こよりはといえば、ホーリーエンジェモンの金帯にしがみついている。流石に病み上がりの少女ではデジモンについて走るのは困難だからである。例によって難色を示したホーリーエンジェモンであったが、すでにこよりの保護者気取りのテイルモンが盛大に噛み付いてきたため妥協した形だ。契約したとはいえ、わずかな期間では進化するだけのパワーを溜めきれない。わずかでも長い間蓄えるために、テイルモンのまま向かうのだ。

　朝日が少しずつ街を照らしていく。白い靄が消えることはないが、街の状況を見るのには十分な光。人のいない街。何も変わらないはずの景色が寒々と映る。
　白い靄はどうやら広がる距離に限界があるらしく、昨日の夜からその範囲は広がっていない。靄が広がれば広がるほど、避難に取られる手が増える。パンドラモンを叩くならこのタイミングしかない。
　そしてそれはパンドラモンにとっても予想通りの動きである。白い靄を切り裂くようにデジモンが飛び出してくる。パンドラモンが温存していた手駒か、新たに呼び出したのか、クワガーモンやヤンマモン、ゴキモンが一塊となってホーリーエンジェモンに迫る。黒く塗りつぶされた虫型のデジモンは統制の取れた動きでホーリーエンジェモンの前方を塞ぎ、上下から立体的な動きでそれぞれの必殺技を放つ。
　クワガーモンのシザーアームズをひらりと交わし、ゴキモンのドリームダストが生み出すゴミを嫌そうに避け、サンダーレイの稲光に合わせて高速移動を行う。光に紛れてクワガーモンのハサミを掴み、勢いよくゴキモンへと叩きつける。甲虫ならではの硬い甲殻がゴキモンの体に致命的なダメージを与えていく。当然その衝撃で前後不覚となったクワガーモンを放り投げ、背後から不意打

ち気味に放たれた二発目のサンダーレイへとぶつける。群れになれば完全体を狩ることすらあるヤンマモンだが、単独では大した脅威ではない。頭部を蹴り飛ばすとすぐに地面に力なく落下した。
　完全体というのは伊達ではない。力の制限があろうと、並の戦闘経験ではないのだ。
　その間振り回される高間こよりといえば、ぎゅっと金帯から振り落とされまいと力をこめるしかなかった。当然これにはテイルモンが猛抗議をする。

「こよりが掴まっているのにあんな動きをするなんて何を考えているんですか！あなたならもっと穏当に対抗できたでしょう？！第一私がいるんですからコンビであたればよかったはずです！……大丈夫ですか、こより？」
「戦いについてくると決めたのはそいつだろうが。この程度で根を上げるくらいなら役に立たん。置いていく。第一、あのひょうろく玉でさえできたことだ。」
「草太さんを基準にものをいうのはやめてください！普通は振り落とされないようにしがみつくので精一杯なんです！荷重かけて急カーブなんてやれるほうがおかしいんです！もう！ここからは私がこよりを預かります！」

　色々言いたいことがあるホーリーエンジェモンではあるが、こよりという人間の"おもり"がなくなるのは歓迎である。目を回している少女へテイルモンが駆け寄っていく。

「こより、大丈夫？もし気分が悪いようなら休んでもらってもいいんですよ？」
「……ありがとうテイルモン。でも大丈夫。絶対に止めたいの。私の責任だから。」
「……こより。」
「それに、私がいればテイルモンも進化できるんでしょう？ならやっぱり私も行かなくっちゃ。」

少女の言葉にテイルモンが身を震わせている。薄寒い責任感に寒気でも起きたのだろうか？何にしても時間をかけるべきではない。時間はパンドラモンの味方だ。

「話は終わったな。ならさっさといくぞ。進化するなら今のうちにしておけ。ここから先は足止めはなしだ。」
「あなたのそういうところ、本当にがっかりしますよ……。」

***

　ホーリーエンジェモンとエンジェウーモンが白い靄を切り裂きながら空をいく。完全体二人の飛行能力は並の成熟期程度では追いつけるものではない。パンドラモンが放ったデジモンを容易に引き離し、白い靄の中心へと到達した。
　白い靄の発生源、その中心に座すは、パンドラモン。

　ホーリーエンジェモンとパンドラモンが直接相見えるのはこれが初めてである。だが、お互いがお互いに抱く感情はすでに初対面のそれではない。かたやリアルワールドに暴力と飢餓、災いをもたらした災厄の権化。かたやパンドラモンの封印を指名として遣わされたリアルワールドの守護者。
　パンドラモンの活動のことごとくを阻害してきたホーリーエンジェモンと、ホーリーエンジェモ

ンが守るべき人間を苦しめ続けるパンドラモンである。犬猿の仲どころではない。必ず潰す。互いの視線が同じ意図を持って交差する。
　自らをリアルワールドへ導いたこよりを見ることすらない。

***

　動いたのはホーリーエンジェモンからだった。8枚の翼を推進力とし、一息にすべての距離を置き去りしてパンドラモンを強襲する。その右手には聖なる力が顕われ青く輝いている。ヘブンズナックル。ホーリーエンジェモンが進化する前の姿、その必殺技である。あらん限りの力と怒りを込めた拳が、パンドラモンへと叩きつけられる。その瞬間に轟く衝撃音は未だ上空に止まったままのエンジェウーモンとこよりの肌を震わせるほど。紛れもなくホーリーエンジェモンが今撃てる最大の一撃である。

　期待を込めた視線の先、見えたのはホーリーエンジェモンの拳と、それを防ぐ黒い塊。黒い靄がパンドラモンの目前に現れ、ホーリーエンジェモンのヘブンズナックルを押し留めている。
　これまでもパンドラモンの黒い靄は物理的な攻撃を度々行ってきた。鞭のように打ち据えることもあれば、蛇のように噛み砕く動きもあった。そのことごとくをホーリーエンジェモンは退けてきた。元は微小な粒子の集まりである。容易く散らすことのできる技でしかなかったのだ、これまでは。しかし今ホーリーエンジェモンの拳を受け止めたこの黒い靄は桁が違う。莫大な量の靄が圧縮されたことで、極めて強固な壁を形成している。邪悪な力に対して特に効果を発揮するはずの聖なる力が完全に押し負けている。
　ヘブンズナックルの光が消えるとともに黒い靄も薄れていく。靄越しにギョロリとパンドラモンがホーリーエンジェモンへと目を向ける。その瞳に浮かぶは嘲笑。あれほど煩わされた天使を、今パンドラモンは完全に上回っている。青筋を浮かべて二発目のヘブンズナックルを構えるホーリーエンジェモンのこともよく見えている。ホーリーエンジェモンが拳を振るう前に、黒い靄がホーリーエンジェモンの眼前に集めっていく。

　直感がホーリーエンジェモンに回避を選ばせる。そして一拍ののちに炸裂音が響く。瞬時に翼へ力を回して上空へと舞い上がったホーリーエンジェモンだが、その両腕は黒く爛れている。黒い靄がまるで爆弾のように炸裂したのだ。回避と同時にとった防御がなければ、この一撃で終わっていた。黒い靄による打撃だけではなく、遠距離での爆発攻撃が可能なほどに、パンドラモンが成長している。
　タネを明かせば、パンドラモンが行ったのはファイアピストンである。空気を急激に圧縮することで空気温度を上昇させて発火させる、それを黒い靄で再現したのだ。狭い範囲に急激にかつ大量に靄を圧縮することで高まった圧力が、黒い靄を爆風の如き勢いで弾き飛ばす。まるで爆発のように。こよりから掠め取った理科の知識すら応用を始めている。

　追撃に黒い靄を集め始めたパンドラモンだが、背後から感じる危険への対処のために靄を回す。質量すら持つ黒い靄の壁に突き刺さるのは、エンジェウーモンのホーリーアローだ。右手に備えられた弓から絶え間なく雷の矢が放たれる。その隙にホーリーエンジェモンは体勢を立て直し、靄にやられた腕を浄化する。
　パンドラモンも撃たれるばかりではなく、早々に迎撃を開始する。ゾンビタトゥーの針がエンジ

ェウーモンへと投射される。針は威力こそ高が知れているが、ゾンビタトゥー感染を招く。浄化にも時間と力がかかる。おまけに数が尋常ではない。ホーリーアローで打ち消せるような量ではなく、エンジェウーモンも攻撃を中断し、回避に専念することとなる。

　ホーリーエンジェモンが全力を振るえない以上、エンジェウーモンの攻撃が要となる。エンジェウーモンが隠し持つ最高の一撃。それを至近距離から直撃させること、今とれる勝ち筋はそれだけだ。そのためにホーリーエンジェモンが前衛としてパンドラモンの気を引いていく。白磁のような翼を羽ばたかせ、高速機動による接近戦でパンドラモンを釘付けにする。両腕に力を集め、隙あらばヘブンズナックルを叩き込むべくパンドラモンを翻弄する。パンドラモンは周囲に靄を集め、防御を固めながらもホーリーエンジェモンへと針の投射を繰り返す。
　エンジェウーモンのホーリーアローは直線的で読みやすく、パンドラモンの脅威にはなり得ない。しかし変幻自在の軌道から打ち出されるホーリーエンジェモンの拳は確実にパンドラモンに迫りつつある。力こそ制限されていても、その戦闘センスに翳りはない。パンドラモンからすれば、ホーリーエンジェモンには散々煮湯を飲まされている因縁の相手でもある。黒い靄も針も、ホーリーエンジェモンへと向けられ、次第にエンジェウーモンへの警戒が疎かになる。
　ホーリーアローのことごとくを弾かれたエンジェウーモンではあるが、無論無策でホーリーアローを撃ち続けているわけではない。いくつもの矢が黒い靄に突き刺さり、パンドラモンを囲っている。ホーリーエンジェモンを叩き落とそうと視野が狭くなっているパンドラモンはそれに気が付かない。

　そしてその時が来る。

　パンドラモンの周囲に突き刺さった雷の矢が、輝きを放つ。矢としての形を放棄し、雷が解き放たれる。光と熱が周囲を照らし、破壊を撒き散らす。当然矢に囲まれていたパンドラモンが雷光に飲み込まれていく。その溢れる閃光に影が映る。
　炸裂する矢にタイミングを合わせて飛び込んだホーリーエンジェモンが、激しい雷に焼き焦がされながらも、左右のヘブンズナックルをパンドラモンへと叩き込む。
　雷に吹き飛ばされた黒い靄を無理矢理に集め、パンドラモンがその拳を防ぐ。ホーリーエンジェモンならば必ず飛び込んでくる。その確信がパンドラモンを救った。
　天使たちの渾身の攻撃を防ぎ切ったと嘲りを浮かべ、ホーリーエンジェモンを屠るための靄を集めるパンドラモン。
　しかしその背後に女天使の影が迫る。そっと、エンジェウーモンが両手をパンドラモンに翳し、エンジェウーモンのもう一つの必殺技”ヘブンズチャーム”を解き放つ。優しさと美しさを力に変えて放出する光線である。邪なるものと反対の性質を持つがゆえに、相手が邪悪であるほど効力を増す特性がある。周囲の黒い靄が吹き飛ばされ、わずかな靄も攻撃のために回したパンドラモンに防ぐ術はない。巻き込まれまいと離脱したホーリーエンジェモンが離れていくのを目で追うことしかできない。

　薄い桃色の、柔らかで苛烈な光線がパンドラモンへ直撃しその姿をかき消していく。

　テイルモンは、こよりとの共振励起で引き上げられた力の全てをこの一撃に込めていた。紛れもなく直撃した手応えがある。邪悪への特攻を考えれば生きているはずがない。一連の攻撃で巻き上

がった土煙で視界が真っ白だ。追撃を撃とうにも視界が悪くて狙えるものではない。そもそもこの一撃を防げたはずがない。煙が晴れるのを大人しく待つ。

「馬鹿がっ！追撃を放て！」
「えっ？」

　戸惑いの声を上げた瞬間、土煙の中から黒い靄の腕が鞭のようにしなりエンジェウーモンを打ち付ける。咄嗟に防御こそしたものの、踏みとどまれる地面などない空中である、そのままビルへと叩きつけられてしまう。
　エンジェウーモンの攻撃で舞い上がりパンドラモンを隠したのは土煙だけではなかった。街を覆う白い靄がパンドラモンへと一気に集結していたのだ。それをエンジェウーモンはただの土煙と誤解したのだった。

　パンドラモンはヘブンズチャームが放たれる一瞬に白い靄から一気に力を吸い上げていった。強力な光線ではあったが、白い靄はデジモンの干渉を受けにくいデザインとなっている。防ぐことはできないが、邪魔をされることもない。ゆえに、ヘブンズチャームで受けたダメージをリアルタイムで癒すという荒技で、破壊の力を上回って見せたのだった。
　白い靄が薄まり、パンドラモンの姿が見えてくる。しゅるしゅると、ヘブンズチャームによってつけた傷が修復されていく。かすり傷程度のそれが綺麗に消える。あえてホーリーエンジェモンにそれを見せたのだろう、パンドラモンの口角が吊り上がっている。
　無論、力を急激に吸い上られた人間の苦しみは尋常ではない。息をすることさえ困難なほどの飢えが体を締め付けていく。すでにまともな思考が奪われ、身を焦がす飢餓だけが体を支配していく。だがそんなことはパンドラモンの知ったことではない。

「貴様……！」

　エンジェウーモンが吹き飛ばされて行ったビルにはこよりが向かっている。おそらくもう戦える状態ではないだろう。
　先ほどのエンジェウーモンの攻撃はこれ以上ないタイミングと威力だった。制限なしのホーリーエンジェモンでさえあれほどの威力を出せるかは怪しい。それをここまで完全に凌がれてしまった以上、ホーリーエンジェモンには打てる手がない。もしヘブンズゲートを開けたとしても、ケレスモンがそうしたようにあの黒い靄で吸い込まれるのを防いでしまう。ゲートそのものが破壊される恐れすらある。正真正銘手詰まりだ。

＊＊＊

　攻撃の手を止めたホーリーエンジェモンを見て、パンドラモンはにたりと笑う。そして黒い靄の腕を形成する。黒い腕はぐるりと円を中に描く。中空に黒い線が残り、線は繋がれて黒い面になる。面、すなわちデジタルワールドとリアルワールドを繋ぐゲートだ。無理矢理に繋がれた世界を穿つ穴からデジモンが飛び出してくる。パンドラモンの十八番だ。一気に黒く染め上げられ、凶暴化したデジモンが野に放たれる。

　ホーリーエンジェモンが歯を食いしばる。握りしめた拳からは血が滴る。知能の足りない小物だと見下していたパンドラモンにここまでコケにされるのははらわたが煮え繰り返るほどの屈辱だ。その視線を前に引き下がらなければならないことも。何より、弱きものを苦しめる悪をどうにもできない自分の弱さに、心が軋む。
　撤退。一気に反転し高間こよりの元へ向かう。すでに気絶しエンジェウーモンから退化したテイルモンを抱きしめているこよりをひったくるようにして抱え、一目散に撤退する。

　パンドラモンはそれを追わない。今ホーリーエンジェモンが見せたのは紛れもない負の感情だ。ホーリーエンジェモンは、それがパンドラモンを強くする贄だと知っている。だから高飛車な態度でパンドラモンを見下し、怒りを見せることこそすれ、負の感情としないように感情を抑えてきた。それが今、確かに崩れた。わずかに中空を漂うそれを、パクリとパンドラモンが飲み込む。
　パンドラモンの直接対決は、パンドラモンに軍配が上がったのだった。

***

　パンドラモンは一通りデジモンを呼び出すと、再び力を蓄える作業に戻っていく。いかなパンドラモンとはいえ、無尽蔵に呼び出せるわけでもない。エネルギー源こそ飢餓に苦しむ人の数だけあるが、無理矢理搾り取って殺してしまうわけにはいかないのだ。ただ、ホーリーエンジェモンを下した以上、かつて自分を封じたセラフィモンであろうともう負ける気はしない。
　だが、それ以上にパンドラモンの本質をなす何かが、人々の飢餓を求めている。それはパンドラモンにとって、戦いや災いを求める本能ではない、純粋な欲望と言えるものだった。

4．世界終焉のロードマップ

　パンドラモンに敗れ撤退したホーリーエンジェモンたち三人であったが、ゆっくりと休む余裕はなかった。パンドラモンが呼び出したタトゥー付きのデジモンの処理である。パンドラモンは自ら動くつもりはないらしく、支配下のデジモンによってホーリーエンジェモンたちを追い詰めるつもりらしい。
　白い靄によって耐え抜いたとはいえ、ホーリーエンジェモンとエンジェウーモンにしてやられたことは事実である。ゆえにゾンビタトゥーによる間接的な攻撃で仕留めようというのだろう。

　ホーリーエンジェモン達からすれば、逃げられたことは良いものの、ゾンビタトゥーに操られたデジモンが街を闊歩するのは問題だった。破壊を繰り返すデジモンたちを放置することはできない。万一避難所が襲われれば何十という人間が傷つけられ、命を落とす危険性がある。あふれかえるデジモンを退けること、それが喫緊の問題であった。

　***

草太の家に帰還した少しして、テイルモンが目覚めた。こよりによって状況が説明されると、すぐに動き出す。今は少しでも街を彷徨くデジモンを倒すこと、そして苦しむ人々をさらに中央から離すことが必要だ。
テイルモンが目覚めるまでにホーリーエンジェモンが実施した高空からの偵察によれば、ゾンビタトゥー付きはパンドラモンのいる中心街を囲むように巡回している。そこから近い避難所はタトゥー付きのデジモンによる危険が大きい。よって、ホーリーエンジェモンは引き続き避難活動に行動の全てを当てることになった。幸い白い靄の発生源から離すように避難を実施していたおかげで、中心街に避難させた人は少ない。それでも残っていた人々を避難させていると、デジモンに遭遇することはあった。人々を抱えるホーリーエンジェモンを守るエンジェウーモン。ゾンビタトゥー付きのデジモンをちぎっては投げ、聖なる弓矢が一射ごとに確実に動きを止めていく。周囲の警戒をするこよりと共にホーリーエンジェモンが離脱するという即席の編成ではあったが、なんとか中心街付近の人間の避難をすることができたのだった。
だが、その時間はパンドラモンをより成長させることにもなった。
パンドラモンがより広くへと白い靄を拡散するために作り上げたのが、街の中心に聳え立つ黒い塔である。

***

ホーリーエンジェモン達三人が黒い塔についての調査結果をまとめる。

「パンドラモンが作り出した黒い塔は白い靄を広げるためのものでしょう。現にこれまで街の外れまで届いていなかった白い靄が明らかに範囲を広げています。今は結界がありますからそれ以上広がることはありませんが、いつまで持つことか……。もし、結界が破られることがあれば、それこそ京都や大阪まで白い靄が広がった場合、もう何ものであってもパンドラモンを倒すことはできないでしょうね……。」
「もう、もうダメなの、テイルモン？」

怯えた瞳でこよりがテイルモンに縋り付く。かつて散々にパンドラモンに使い潰されかけた少女である。その恐怖は並大抵ではない。

「……落ち着いてください、こより。大丈夫です。私たちはまだ全て出し切ったわけではないのですよ？あなたも知っているでしょう？まだ、希望はあります。」

***

――これでもう、希望は残らない。
パンドラモンは人々から吸い上げた力を元に、黒い靄を物質として顕現するまで密度を上げて組み上げていった。白い靄を広げ、引き寄せる。いわばアンテナとなる塔だ。
これまでなんとか被害を逃れていた街の外周部すらも白い靄に沈んだ。天使連がパンドラモンを逃さないために作り上げた結界が白い靄を防ぐ壁となっている。だがそれも時間の問題だろう。一万人を越える人々から力を吸い上げ続けるのだ。白い靄が結界内を埋め尽くし、飽和する。そうすれば隣接する他の都市、より多くの人間に苦しみを分け与えることができる。この世界の広さをパ

ンドラモンは知らない。だが、人と人とを苦しみでつなげるネットワークは範囲が広がるほど力が集まるのだ。力では干渉し得ない、純粋な感情――飢えと苦しみ――のネットワークだ。誰にも壊すことのできない、この力の源泉があればパンドラモンが負けることはあり得ない。
　ゆえに、どれだけ世界が広かろうとパンドラモンはただ待っていればいいのだ。いずれ世界は白い靄に沈み、全ての生命はパンドラモンのために苦しみを差し出す。

　その時を夢想し、パンドラモンは一人静かに笑うのだった。

5．変わらぬ二人

　リアルワールドにようやく帰ってきたというのに、辛気臭い光景に気が滅入る。草太の目には白い靄と黒い塔が遠目に見えている．そしてゾンビタトゥーに覆われた巨大な影。
　できる限りタトゥー持ちに見つからないように物陰を伝っての移動してきて、ようやく家へと続く橋を渡るところまで来たというのにだ。なかなかうまくいかないものだ。
　草太の前に現れたのは2階建ての一軒家ほどの大きさを持つ、ヤドカリのようなカタツムリのような姿をしたデジモンである。

――シェルモン！のどかな見た目の裏腹に知性が低く好戦的なデジモン！必殺技は液体を高圧で発射するハイドロプレッシャー――

　などとそんなデータを知るはずもなく、ひたすら逃げ回ることになった。
　シェルモンは動きこそゆったりとしているが、見た目にそぐわぬ足の速さを持つ。なにせ一歩の大きさが違いすぎる。河川敷近くまで来てしまったせいで建物が少なく隠れることも難しいのが辛いところだ。
　草太が駆け抜けたばかりの歩道をブルドーザーのような太い響きと共にシェルモンが飛び出していく。なんとか狭い道に入り込んではみるが、力ずくでシェルモンが道を押し広げていき、対して引き離すこともできない。時折曲がりきれずに民家に突っ込みながらも諦める様子がない。しかし、追いかけっこに焦れているのは草太だけではなかった。
　突如シェルモンが足を止める。ぐぇっグェっと聞き苦しい音を立てる。数々の戦いを経て磨かれた直感が横に飛べと叫ぶ。一瞬の逡巡さえ惜しんで横っ飛びする草太。直前まで草太がいたその場所を何かが通り過ぎる、盛大な破壊音が響く。草太は飛び込んだ勢いでゴロゴロと転がり、速度を殺さずに立ち上がって駆け出す。何を飛ばしているかは知らないが、直撃したらおしまいであることは間違いない。よって振り返って確認する必要すらない。
　再び始まった追いかけっこだが、むしろ射撃ゲームか何かである。シェルモンに有利すぎるゲームに文句をいう暇もない。知能なんてなさそうな顔をしている割に、草太を逃げ場の少ない河川敷方面へと誘導している。それでも逃げ続けるしかない。
　しかしそれも道路に植えられた街路樹が草太の前に切り倒されるまでだった。タタラを踏んで急停止するも、よく育った街路樹は前方どころか草太の逃げ道のほとんどを生い茂る枝葉が塞いでいる。逃げ道がわかりきっている獲物ほど狙いやすいものはないだろう。初めてシェルモンが口から何か放とうとしているのを草太は見た。それは草太を容易く吹き飛ばし、一撃で行動不能にするだ

ろう。というか死ぬ。

　なんだか覚えのあるシチュエーションに思わず頬が緩む。そして代わりに締まったのは首だった。

　シェルモンの口から放出された高圧の液体が一直線に街路樹を粉々に破壊していった。

　宙吊りになった草太はその一部始終を見ていた。いつも着ているパーカーのフードを引っ張られて、盛大に首が締まっている。なんとか力を込めて首にかかった体重を分散する。
　自分の攻撃を宙吊りとなってかわした草太をシェルモンが怒りと共に見上げる。草太も恨めしげに自分を引き上げた存在を見上げる。

「……お前、もう少し助け方ってものが、あるだろ。」

ごほごほとせき込みながら文句を言う。一言いうたびに締め付けられた喉が痛む。

「礼一つまともに言えんとは、偉くなったつもりか？」
「いいからさっさと下ろせ。ほら、承認だ。行ってこい。」
「初めからそうしておけ、馬鹿者が。」

　再会の挨拶すら通り越して力の解放を申請するホーリーエンジェモン。苦情もそこそこ、さっさと取り出したスマホで承認を済ませる。フードから手が離され、草太は地面に着地する。飛び出したホーリーエンジェモンも、服の埃を払う草太も、お互いを見ることすらない。
　例によって追加で申請されたエクスキャリバーも承認しながらようやく息をつく。背後では高らかな笑い声と共に天使がシェルモンに襲い掛かっている。

　デジタルワールドから先、身の安全という点ではおもちゃの街以外では常に気を張る必要があった。それをようやく緩めることができた。自分本位の偏った視点でしか物を言えない短気なアホでも、その実力は確かだ。番犬としてみれば悪くはない。
　早々にシェルモンを下したホーリーエンジェモンが草太の元へ降り立つ。

「……状況は分かっているな？さっさと奴を潰しに行くぞ。」
「お前な……。状況も何もまだ戻ってきたばかりだ。ああだこうだ言う前に説明しろ鳥頭！」

　命の危険を助けられようと、手詰まりな状況を打破しうる相手だろうと、出てくるのは変わらぬやりとり。感謝の言葉より不満の言葉が口に馴染む。止める者のいないなか、悪口と皮肉とを互いに突き付けていく。

　それが落ち着くということに、何より腹が立つ二人なのであった。

後編に続く

　バディ４話　後編

6．全員集合

　ようやくホーリーエンジェモンと合流した草太は、尽きることない口論をつづけながら自宅へと戻ってきていた。再会に尻尾を振り回し感涙に咽ぶテイルモンに出迎えられ、苦笑いである。鬱陶しそうに口元を引き結ぶホーリーエンジェモンとテイルモンの喜びっぷりに困惑する少女。なんともチグハグな4人だが、ようやく全戦力が揃ったというわけである。
　とはいえうち二人はほぼ初対面。距離感を探り合うようなやり取りが始まる。

「あー、高間、こよりで合ってるよな？もう体は大丈夫なのか？」
「はい。えっと、た、助けてくれてありがとうございました！」

　勢いよく頭が下げられる。

「お、おう。いや、別に感謝はいい。俺だけでやったわけではないしな。それに状況もあるからな。頭を上げてくれ。」

　ちらりとテイルモンを見る。無事なのはいいが、まだこよりの立ち位置が分からない。対してテイルモンはうれしげに口を開く。

「ふふふ、草太さん、こよりは今私と契約しているんですよ。草太さんが戻ってくるまで私たちの助けになってくれていましたから。」

　高間こよりはパンドラモンに目をつけられ、長い間支配され続けていた少女だ。捉われていた状況を草太は知らないが、パンドラモンへの恐怖があってもおかしくはない。それでも協力するというのならば、こよりは草太の考える以上に強い女の子だったのだろう。

　ざっくりとした自己紹介が一段落したところでホーリーエンジェモンが動く。キッチンの脇にぶら下げてあるエプロンを草太へ投げつけてくる。

「いい加減腹が減った。何か作れ。」
「ホーリーエンジェモン！今はそれどころではないでしょう？」
「いや、俺も腹減っているし、どっちにしても話をしないといけないのは変わらないなら、食べながらにしよう。まあ大したもの作れないけどな。」

「そう言うことだ。ただし下手なものを作ろうものなら吊るしてやる。覚悟しておけ。」
「うるさいな、作ってやるんだから文句も一緒に飲み込んどけ。えーっと、シャケしかないな。後は目玉焼きと味噌汁でいいか。ああ、二人はそっちのソファでゆっくりしててくれ。」

　そういうと手慣れた仕草でエプロンを纏い、食材と調理道具を用意していく。
　ずっとパンドラモンを倒しに行くぞって言ってたくせに！と何やらご立腹なテイルモンも、こよりに宥められながらソファに向かう。ホーリーエンジェモンはいつもの通り、草太の手つきが見える位置に立っている。

　ガチャガチャと鍋とフライパンを出しながら、ふっと笑いが込み上げる。街を覆い尽くすような力を持つ、パンドラモン相手にたった四人で挑む。3枚目感が漂ってきた猫型デジモンと、料理にうるさい馬鹿天使。病み上がりの少女とケガからようやく復帰した自分。なんとも締まらないメンツだ。もう少しまともなメンバーだったら格好もつくのだが、どうにもこうにもこのざまだ。

「何を笑っている。真面目に料理しろ。」
「うるさいな。黙って見てろ。」

　なのに、不思議と負ける気はしない。
　当然ながら勝負事には勝ち負けはつきものである。だが負けるために戦うものなどいない。どれだけ力の差があったとしても、わずかな綻びを見つけてこじ開けて、全力でぶち破る。自分はいつだってそうしてきた。一時は弱って投げ出しそうになってはいたが、もんざえモンとツノモンに出来るところまでやるとぶち上げたのだ。無様はさらせない。この自意識過剰な天使が見ているのならなおさらだ。
この鳥頭はいつだって悪意と戦う最前線に立つ。ならば草太も下がってなどいられないのだ。

　熱したフライパンに卵を割り入れる。じゅぅうと耳に心地よい音が広がる。魚焼きグリルからはシャケのいい匂いがし始めている。昆布を入れた鍋が沸騰するのを待ちながら、思いついたことをそのまま口に出していく。

「……パンドラモンの出す靄って何なんだろうな。」
「何の話だ？」

　ホーリーエンジェモンの返答に構わず続ける。人に話すというよりは、自分に向けて質問を投げかける。今まで抱えていた疑問に答えが出そうな予感に、頭がちりちりする。

「パンドラモンはお前ら天使連に負けて封印された。どんな戦いだった？ゾンビタトゥーはその時点であったんだろ？それでも天使連に負けた。なんでだ？」

　いぶかし気なホーリーエンジェモンだが、その疑問にはこたえる。

「私は参加していないから詳細は知らん。だが、天使連のほぼ全員での包囲攻撃をかけたと聞いている。」

「そうです。私たちは邪悪な力には強い抵抗力がありますから、パンドラモンに使われているデジモンを一体一体浄化していきました。あの時は支配されていたのは完全体以上のデジモンばかりでしたから、私は足止めや援護の担当でしたが。当時はまだ私もホーリーエンジェモンも進化前でしたしね。主戦力は天使連の上位天使であるセラフィモン様たちですよ。草太さんも会ったんですよね？それでゾンビタトゥーに操られたデジモンたちを包囲しながら一体ずつ浄化していったんです。少しずつパンドラモンの戦力を削っていって、最後にセラフィモン様が直接パンドラモンを聖なる力によって封印した、という流れです。」

「それだ。その時にはもう黒い靄はあったのか？！」
「えっと、黒い靄ですよね、あの時は……。なかった。ええ、ありませんでした。あの靄はリアルワールドに現れてからのものです。」
「やっぱりか。なら可能性はあるか？」

　再び考え込み始めた草太だが、突然頭をはたかれる。キッチンに入り込んだホーリーエンジェモンの翼がバサリと音を立てる。いきなりの衝撃に目を白黒させていると、出来の悪い生徒を相手にするようにホーリーエンジェモンが口を開く。

「貴様だけでわかったふりをするのはやめろ。情報を共有しろ。自分で言ったことも忘れたか？第一、火を扱うときは集中しろ、馬鹿者め。」

　正論の二段打ちだ。そういえば前にそんなことも言ったか。確かにその通りだ。料理の最中によそごともよくない。頭をはたかれたことは腹が立つが、そうされても仕方ない。ここからの話は込み入ってくるし長くもなる。草太だけでは判断がつかない部分にはデジモンである二人の意見もいる。ならば、まずは料理に集中すべきだ。

「作り終わったら話す。それでいいな？」

***

　艶々に炊かれたご飯と昆布と鰹節から出汁をとったお味噌汁。味噌の香りが湯気に乗って食卓に広がる。主菜は焼きジャケと目玉焼き。草太の好みでやや硬めの焼き加減。
　野菜はないが、味噌汁にわかめを入れているからよしとする。卓上には醤油と胡椒、ケチャップも出してある。草太は目玉焼きには醤油だ。ホーリーエンジェモンは胡椒。テイルモンがケチャップだ。なんとなくこよりに視線が集中する。わぁと嬉しげなこよりは視線に気づかず、胡椒を振りかけてそのままパクリと食べ始める。胡椒かぁ、と微妙な顔をするものあり、分かっているじゃないかと得意げなものあり、三者三様の反応である。渦中の少女は全く気にしていなかったが。

　食事自体はそこそこホーリーエンジェモンも満足するものだった。しかし状況が悪い。食事もそこそこに、パンドラモン対策の会議を始める。
　ダイニングテーブルから今のソファに場所を移し、中断していた会話を始める。

「説明する前にもう一つ確認させてくれ。天使連とやり合った時のパンドラモンの戦力はどのくら

いいたんだ？　完全体以上で構成されていたってことだけど、数はどのくらいだった？それと天使連の方もどのくらいいたか教えてくれ。」
「そうですね……、パンドラモン側の正確な数は把握してはいないのですが、20はいなかったはずです。完全体以上は数がすごく多いというわけではありませんから。天使連側は100以上はいましたね。ただ完全体以上は10程度です。」
「なるほどな……思ったより完全体ってのは少ないんだな。俺の考えたことを話す。まず、あの黒い靄はテイルモンが言ったとおり、パンドラモンが封印後に作り出したものだとする。じゃあなんで靄なんてものを作ったのか。タトゥーだけでも究極体まで操れるのに、わざわざ作ったってことになるからな。」

　息を整える。最近長々と話すことが多い気がする。なんとなく試合前のミーティングを思い出す。笑える状況ではないが、何かに挑むために知恵を練るというのは高揚するものがある。

「ゾンビタトゥーはデジモンを操るためのもので、パンドラモンの手足のように恐怖を煽ったりするのに使われていた。だがそれだけでは天使連に勝てなかった。力の相性がよくないってのもあったろうけど、各個撃破で対応できる程度しか数いなかったのが原因だ。単独で強いのがいたって数に押し負けるのは当たり前だ。だから数を増やすために黒い靄を作った。より効率的に多くのデジモンを支配するために。強いやつの数が少なくっても、数がいれば取れる選択肢は多いからな。要は天使連のやり方を真似たんだ。」
「……黒い靄が雑魚を操るものだというのはいい。だが肝心の話が進んでいないぞ。さっさと結論を言え。推理ショーをやりたいなら家で壁にでも話しておけ。」
「うるさいな、いきなり結論を言ってもお前のトリ頭じゃ理解できないだろうから説明してやってるんだろうが。余計なちゃちゃしか入れられないんならせめて黙ってろよ。」
「ちょっとやめてください！なんでこんな時に喧嘩を始めるんですか！少しは状況考えて仲良くできないんですか？！」

　確かに言い争う状況ではなかった。チラリとホーリーエンジェモンを見る。同じタイミングでこちらを見ていたのか目が合ってしまう。思わず出た舌打ちが重なる。

「本当に仲悪いんですね……。あんなに息ぴったりに戦ってたのに。」
「そうなんですよ！　初めて会った時から口を開くと貶し言葉に罵詈雑言で全然仲良くしないんですよ、この二人は！」

　ついいつも通りにしていたが、今は四人目がいた。流石に年下の女の子に目を丸くされるのは居心地が悪い。

「……続けるぞ。黒い靄は天使連との戦いで学習して作られたものなんだろ。なら、今街を覆っている白い靄はなんなのかって話だ。何をモデルにして作られたのか、何のためにわざわざ作られたものなのか。パンドラモンは強い相手の戦い方を真似することができる。もう分かるだろ？　あの白い靄のモデルは俺とホーリーエンジェモンの契約――パスをモデルにしてる。」
「災いなどと大袈裟に言っても、結局は猿マネか。」
「ああ。お前もいつか言ってたな、やつに大層な頭があるのかってな。その意見だけには同意だ。

」
「ま、待ってください。草太さんたちの契約とパンドラモンの靄が同じ？？　そんなわけがありません！！　パンドラモンが私たちと同じ力を使えるなんてこと、あり得るはずがありません！！」

　流石に自分達と同じ力だと言われれば反発もするか。テイルモンが動揺するのもわかる。だが、草太としてはほとんど確信している。

「本質は同じだ。私たちの場合は不可視のパスで人とデジモンを繋ぐ。パンドラモンは人と自分を白い靄で繋ぐ。通すのが光か苦しみか、その程度の違いだ。」
「ここじゃ俺とホーリーエンジェモンに散々やられてるからな。それを真似るのはおかしな話じゃない。信頼関係なんていらないから、知らない人間と片っ端から繋いでも問題がない。契約がなくていいならパスも似たようなことできるだろ。」

　ぐっ、とテイルモンが言葉に詰まる。別に真似られただけなのだからそこまで動揺する必要はないと思うのだが。まあ潔癖気味なのがテイルモンだ。高間こよりがその背中を撫でて落ち着かせようとしている。ならほっといても良さそうだ。

「まあ、パンドラモンの災いは、パスとはちょっと違うところもある。白い靄をわざわざ見えるようにしているのは、見える人間に不安を与えるためだろうな。視界を悪くするってのもあるかもしれない。」
「だが、大した意味がない。飢餓を無理矢理付与する以上、不安を煽ろうが結果に差はない。どうせ不安など考えている余裕はないのだからな」
「ああ。それに白い靄も別に全く見えないほど濃くはできないみたいだしな。結局無駄が多いんだ。俺たちからすれば白い靄で被害状況が明らかだし、避難もさせやすい。しかもその中心に奴がいることも丸わかりだ。形だけ真似ていい所どりしようとするから、そういう無駄ができる。さしづめ、契約は手をかけられた料理で、白い靄は具材をつぶしてくっつけただけの塊だな。同じ材料であっても味には雲泥の差があるってわけだ。」
「はん、貴様が料理を語るか。デジタルワールドで悪いものでも食べたようだな。」

　馬鹿にした目で草太を見るホーリーエンジェモンに、不敵な笑みを返す。

「デジタルワールドってのも美味いものがたくさんあるんだな。俺はおもちゃのまちで炭火で焼かれたデジマスを食ったなぁ。バーベキューもしたし、途中の街じゃうまいカレーもあった。ヘビーイチゴも旬だったみたいだし、雪割キノコの炒めたのはかなり気に入ったな。」

　指折り数えて美味しかった食事をあげていく。中にはホーリーエンジェモンの琴線に触れたものがあったらしい。ごくりとのどを鳴らす音が聞こえた。これは愉快だ。さっきはたかれたのも許してやることにする。それが気に食わなかったのか、苛立ち混じりの声で問題点が挙げられる。

「やつの力が私たちの劣化だとしても、問題はある。ゾンビタトゥーはパンドラモンを封印したところで消えないということだ。同様に白い靄が媒体になっている飢餓は、やつを封印しても消えまい。今苦しんでいる人間を癒す術がない。私の力でさえ消すことが出来んのだからな。」

「わかってる。お前の力でどうにもならないのは、飢餓が本能っていう人の本質に近い部分にまで入り込んでいるからだ。雑草を刈っても根は残る、それと一緒だ。人の心の深いところにまで根を伸ばして、腹が減ったっていう嘘の信号を流す。さらに、実際に食べた時の感覚を遮断している。だからいつまでも腹が減り続けるし、食べても効果がない。」

　人とデジモンでは体のつくりが違う。いかなるデジモンにも刻むことのできたゾンビタトゥーは、人に刻まれることはなかった。それは両者の体の成り立ちが決定的に違うからだろう。飢える苦しみは人であろうとなかろうと等しく同じものだが、そのメカニズムが違う。おそらく、パンドラモンは、少女を支配する中で人の仕組みを知ったのだ。人に特化した災いであるから、デジモンには効くことはないのだ。

「町中に運びる白い靄は、人を飢餓に落とすための武器であり、苦しみを増幅させるためのネットワークでもある。俺たちの使う共振励起と同じで、苦しみっていう一つの感覚を増幅している。そうやって膨れ上がった負の感情を啜っているんだ。」

　人の心のうちに入り込み、苦しみを与えるものでありながら、人の心に守られる。なんと悪質なウイルスか。しかし、だからこそとれる方法がある。

「ならばどうやってやつの飢餓を払う？」
「決まってるだろ。食事だ。うまいものを食べること。食事の喜びを伝えてやればいい。」

だからその方法を言えといら立つホーリーエンジェモン。ここからが重要なところだから、草太としては区切っただけなのだが、もったいぶっているように思ったようだ。

「いいから聞け。まず、パンドラモンの白い靄は、元は天使のパスと同じものだ。劣化とはいえコピーしたわけだからな。同じであるなら、俺たちにも使うことが出来るはずだ。直接食べても効果がないなら、食べたって事実を直接伝えればいい。俺が何か食べた時の味とか満足感を、白い靄が作ったネットワークで伝えてやるんだ。靄を通して人に飢餓を与えているなら、靄を通して満腹感を与えることもできるはずだろ。無理矢理空腹と思い込ませていたところに、うまいものの情報と満足感を流し込む。飢えと満腹感、どっちが勝つかなんて言うまでもないな。腹減ってりゃなんだってうまいし、たらふく食べた後の満足感ほど幸せな感覚はない。」

　元はエリートサッカー少年だ。空腹後の食事が齎す満足と幸福感の大きさはよく知っている。ニヤリと口角を上げて、横目でホーリーエンジェモンに問いかける。

「なあ、苦しみを食って力にするパンドラモンは、満腹の幸福感をどう受け止めるんだろうな？」
「くくく、それはそれは忘れられない体験になるだろうさ。」

　控えめに言って邪悪そのものの笑顔がホーリーエンジェモンの口元に浮かぶ。悪だくみに目を輝かせる草太の口元も大いにゆがんでいる。さっとこよりの目を覆う外させるテイルモン。うっかりトラウマになりかねない光景である。聖なる力を宿す大天使とその契約者なのだ、もう少し見た目にも気をつけてほしいものだとため息をつくテイルモンである。

　と、目隠しされたままでこよりが質問をする。

「あの、靄を使うのはわかったんですけど、どんな風に靄を使うんですか？」
「ああ、方法な。まず、俺がパンドラモンの白い靄を受ける。そうすればパンドラモンを介してこの街の人すべてと接続されることになる。当然飢餓が俺に来るはずだけど、俺にはホーリーエンジェモンの力が貯められているから、初めの衝撃さえ耐え抜けば、飢餓の力を破壊できるはずだ。そしたら、靄のネットワークを使って飯を食べている感覚を全体に伝える。パスと同じなら、俺の感覚は光に乗せて伝えられる。だから飢餓を与える能力を破壊しつつ、同時に味を伝えることができる。」
「……それは、長峰さんがすごく大変なんじゃないですか？もし靄が考えてたのと違ってたら……。」
「その時は別の方法を考えるさ。この作戦はネットとかで言うハッキングってやつだからな。パンドラモンの力を利用する以上、逆にやられる可能性だってある。だから気づかれる前に白い靄のネットワーク全体に光を届ける。そうやってパンドラモンの力の源を光で焼き尽くす。」
「ええっと、そういうのはハッキングというよりクラッキングに近いような……？」
「まあどっちでもいいさ。それよりホーリーエンジェモン。この作戦はパンドラモンに気が付かれたら終わりだ。もし気づかれて靄のネットワークを遮断されたら、一人でも助けられなかったら俺たちの負けなんだからな。出来る限りパンドラモンの気を引け。周りのことに目が向かないくらいにだ。……お前なら、出来るだろ？」

　草太が最後に放った一言は、ホーリーエンジェモンにとって確かな意味を持つ。今となっては究極体を遥かに超えた力を持つパンドラモンを相手に時間稼ぎをできるデジモンがどれだけいるだろうか。その難しさを知らないわけがない。だがそれでも、ホーリーエンジェモンなら出来るだろうと、そう言ったのだ。

「――いいだろう。ならば貴様もこの街を、苦しむものを救って見せろ。貴様はこの私の契約者であるのだからな。」

　初めて、この傲慢な天使と正面から向き合ったような気がする。
　ここまでいろいろと話しておきながらも、目線は一度も合わせていない。それはへそまがりでいじっぱりな二人の、最後の矜持であった。
　両手で口を覆い身を震わせるテイルモンに一発拳骨をみまいながら、ホーリーエンジェモンが懐を探る。

「おい草太。」

　ホーリーエンジェモンが草太に向けて手を出している。訝しげにしつつ草太も手を出す。手渡しとは珍しい。そう思いながら手のひらに乗せられたものを見る。
　それは1つの果実だった。見た目はリンゴに似ているが、ずっしりと重い。手のひらを介して伝わる感触は張りがありつつも柔らかく、みずみずしさを感じさせる。

「これは？」

「ケレスモンがおいていったカルポスヒューレだ。貴様に礼だとな。それを使え。デジタルワールド最高の水菓子だ。貴様の未熟な料理を伝えるよりは遥かにマシだろう。」
「カルポ？……そうか。ありがたく食べさせてもらう。悪いな、ホーリーエンジェモン。俺ばっかりうまいもの食って。」
「そう思うならもっと料理の腕を磨くんだな。」

　それなりに出来るようになってはいても、すぐにうまいものを作れるようになるわけではない。なかなか難しいことをいうやつだ。が、ふと思いついて言う。

「なあ、たまにはお前が飯作れよ。こないだ父さんのバーベキューセット見つけたからな、多少の料理なら外でできる。キッチンじゃ狭くても、庭でならお前も動けるだろ。お前が口だけのエアプ野郎なのかを確かめてやるよ。」
「貴様は頭の芯までアホなのだな。人にものを頼むときは額を地につけろ。まあいいだろう、私の研ぎ澄まされた調理を、料理の神髄を見せてやろう。」
「あの！それ私もご一緒していいですか？」
「もちろんいいですよ、こより。パンドラモンを無事倒したらみんなで打ち上げをしますからね。何かリクエストはありますか？」
「おいテイルモン。勝手な安請け合いをするな。私は旬のものしか使わんからな。ものによっては作らんぞ。」

　おそらくパンドラモンを倒すことができるのはこれが最後の機会だ。白い靄がこの街から溢れ出れば、この作戦はうまくいかない。どれだけこのカルポ――果実が衝撃的な美味しさだったとしても、伝えるための光――ホーリーエンジェモンとの共振が生み出す力の総量には限界がある。ただ一人であっても光が届かなければ、パンドラモンはその一人を起点に白い靄を作り替えていくだろう。そうなれば草太たちにもう打つ手はない。パンドラモンの不死性を保証する白い靄を処理しない限りは、たとえセラフィモン以上の強さを持つデジモンが現れたとしても勝ち目はない。それこそ人が一人もいなくならない限りは無限に力が供給され続けるのだから。

　だから、このタイミングで叩く。何とも間の抜けた表現だが、おいしいものを食べるという、喜びの光でパンドラモンを焼き尽くすのだ。

***

　街の状況は相変わらず。人の気配どころか、鳥の鳴き声さえしない。異様な雰囲気に街へと近寄るものさえいない。ただの地方都市であっても、1万人以上が突然活動を停止しているのだ、問題にならないわけがない。テレビをつけるとワイドショーで謎の音信不通だとか、疫病なのではとか好き勝手に言っている。実際白い靄に触れれば飢えで身動きが取れなくなるのだ。初めのうちは取材に来ていたマスコミだとか物好きな野次馬も、目に見えてわかる以上に近づくことも無くなったらしい。

***

7. 決戦

　作戦会議で各々の役割分担を確認した四人は、いよいよ決戦と草太の家を出る。夕暮れに4つの影が伸びる。正真正銘最後の戦いになる。地上は、特に黒い靄の塔付近はゾンビタトゥーに染まったデジモンたちが巡回し続けていて、とてもではないがまともに進むことはできない。草太はホーリーエンジェモンの金布に掴まり、街を飛び越えて一気にパンドラモンの元へと向かう。

　黒い靄で形成された塔の頂上に、パンドラモンがいる。塔のいたるところに白い靄が接続されており、人々の苦しみを吸い上げている。塔からはパンドラモンへ直結する黒い靄が伸びる。まずはパンドラモンをあの黒い塔から引き離さなければならない。少しでも白い靄のハッキングを優位に進めるために。

　草太とホーリーエンジェモン、そしてパンドラモンが相見える。それぞれでの戦いはあれど、草太とホーリーエンジェモンが揃っての戦いはこれが初めてである。街一つを沈めて一段と力を増したパンドラモン。両手に収まる程度の大きさでありながら、これまでのどのデジモンより強い圧がある。遅れて到着したエンジェウーモンとこよりが気圧されて身を硬くする。ゾウとアリ、鯨と鰯。比べるのも烏滸がましいほどの存在の差がある。
　だが、それでもなお、草太は普段のペースを貫く。ホーリーエンジェモンの金布に掴まったまま、塔とパンドラモンを珍しげに見下ろしている。ホーリーエンジェモンも先日の敗戦の屈辱をおくびにも出ず、悪態をつく。

「でかい塔の割には、安っぽい上にセンスがないな。」
「言ってやるな、ホーリーエンジェモン。パンドラモンにそういうセンスがないのは見て分かるだろ。いや、うーん、こりゃひどいな。黒くすりゃいいってモンじゃないだろうに。」

　二人ののんきさにエンジェウーモンも呆れている。

「草太さん？　あまり挑発しすぎるのもどうかと……。」
「ん？　あれ、お前もしかしてテイルモンか？」
「そうです！　テイルモンですから、パンドラモンを！」

　草太は今までテイルモンが進化したところを見ていない。今回も先行して飛び出したものだから進化シーンを見逃している。テイルモンが時折いう、元々天使という言葉をかなり疑っていたものだから、先ほどまでの戦意を忘れて驚きが顔に出ている。

　そんな気の抜けたやり取りを前にしても、パンドラモンは動くことなく草太を見ている。自身の災いのことごとくを退けた人間。どこかも分からぬ亜空間に飛ばされたはずの人間が戻ってきている。
　かつて支配した少女――女天使に抱えられている――とは比べ物にならない意思の強さを感じる。忌々しい天使どもも、格付けは済んだはずだが何故か自信を取り戻している。これもあの人間の仕業だろう。
　人を苦しめ続けてきた。デジモンを支配し続けてきた。だからパンドラモンと敵対したものは、

皆激しい敵意を向けてきた。天使であっても例外はなく、ホーリーエンジェモンも、セラフィモンであってもそれは同じだった。だが、この人間の目にはそれがない。パンドラモンを見ているようで、何か別のものを見ている。確かに戦意はあれども、戦いに添えられる負の感情がない。

　草太としては、当然パンドラモンへの怒りはある。だが、それは置いておくべきものなのだ。サッカーの試合に怒りなど持ち込んだところでパフォーマンスは落ちるだけだ。そして監督の雷も落ちる。いいことなど何もない。勝つために、余計なものは持ち込まない。
　パンドラモンとの戦いは、この街やこの世界の存続すら左右するような戦いである。だからこそ、怒りなどという感情は無用だ。草太からすればただそれだけのことだ。

　その、ただそれだけのことがパンドラモンにはわからない。自らを正面から見据えるその瞳が、その視線がパンドラモンに突き刺さる。理解できないからこそ、わかりたくなる。パンドラモンの限りない欲望が、初めて食以外へと向かう。
――ただ、その光が欲しいと思ったのだ。

　欲望に従い瞬時に生み出された黒い靄の腕が草太へ向かって伸びる。
　膨れ上がるその腕は、草太の身の丈ほどの手のひらを開き、捕らえようとする。人に避けられるような速度ではない。だが、握りしめた手のひらには何もない。

　金布を草太ごと持ち上げて攻撃を避けさせたホーリーエンジェモン。憮然とする草太。

「犬猫みたいに持ち上げられるのもなんか腹が立つな。バリアとかそういうので防ぐとかにしろよ。」
「犬猫の方がまだ分を弁えているぞ。助かっただけありがたいと思うのだな。」

　そして、眼下のパンドラモンへ嘲りの声を投げつける。

「ああ、こいつが欲しいのか？　大した価値のある人間ではないがな、貴様にくれてやるほど安くはない。人の苦悩も喜びも、貴様にはもったいない。そこらの雑草で満足しておけ。」

　とことんまでパンドラモンを見下しバカにしていく。
　怒りに駆られて爆発的にあふれ出した黒い腕が蛇のように絡み合いながらホーリーエンジェモンと草太へ飛びかかってくる。4対の翼を駆使して腕を避け続ける二人だが、網のように広がった腕――黒い靄から逃れる術はない。
　しかしすでに二人は全開である。青から黄金の輝きへと瞬時に切り替わった聖剣が邪な黒い腕のことごとくを断ち切る。ヘブンズナックルを正面から防ぐほどの黒い靄であっても、共振励起で高められた光の聖剣の前には、太陽に散らされるか細い朝霧に等しい。

　そして一気に上空高くまで飛び上がる二人を追うように、パンドラモンも靄を広げて上昇してくる。靄がまるで悪意の翼のようでもある。

「こより、私たちは、ゾンビタトゥーに操られたデジモンたちをやりますよ。準備はいいですね？

」
「うん。やろう、エンジェウーモン！」

　そのままエンジェウーモンは塔を取り囲むデジモンの群れに攻撃を加えていく。
ホーリーアローが黒く染まったデジモンたちを一匹ずつ撃ち抜いていく。射抜かれたデジモンは浄化され、元の体色を取り戻していく。しかし、パンドラモンが呼び出したデジモンの数は並大抵ではない。塔の元へと街中から集まってくるデジモンたちは、黒い津波のようにエンジェウーモンを追い詰めていく。できる限りデジモンたちを一箇所に集めること。それが二人の役割だ。ゾンビタトゥーは自然に治らない以上、この世界に一体でも残しておくことはできない。そのため、エンジェウーモンが囮となってデジモンを惹きつけ、ホーリーエンジェモンの全力で一気に浄化する。それが第一の作戦であった。

　上空でドッグファイトを繰り広げながら、草太は状況を把握している。金布へ体重をかけ、ホーリーエンジェモンの飛行軌道を無理矢理変更する。
　飛行中だと大声でなければ言葉は届かない。そうするとパンドラモンにこちらの行動を伝えることになる。だが、軌道を変えた理由は見れば伝わる。状況がわかれば意図が伝わる。
　激しい機動が一転、直下降で二人の元へと降り立つ。

「エクスキャリバー承認！　全力で振りぬけ！！」
「頭を下げろエンジェウーモン！」

　飛び込んだ力の余波でエンジェウーモンに飛びかかっていたデジモンが吹き飛んでいく。無理矢理こじ開けた空間から、聖剣が振るわれる。落下した勢いをそのままに、聖剣の軌跡が円を描く。逞しい肉体が体幹を軸として360度回転する。
　周囲のデジモンがエクスキャリバーの剣風に切り裂かれ、その身に刻まれたタトゥーを瞬時に焼き尽くす。

　吹き飛ばされたデジモンたちが浄化され横たわる中、パンドラモンだけが上空に浮かんでいる。灰色の雲が空を覆い隠し、黒い靄がまるで宙に空いた穴のようだ。ホーリーエンジェモンとの激しい空中戦にも傷一つなく、聖剣の輝きにも何の感動も示さない。ただ、二人を見ている。
　一つの街を丸々絶望に沈め、生まれた負の感情を際限なく取り込み続けている。すでにホーリーエンジェモンなど歯牙にかけぬほどの力を備え、共振した全開のホーリーエンジェモン相手に圧倒的な実力の差を見せた。それでも、この二人を捉えきれない。

　＊＊＊

　空に佇み動かなくなったパンドラモンを地上から草太が観察する。
　痛み、憎しみ、苦しみ、嘆き、嫉妬、怒り。世に生を受けた生き物が、生きるために避けられないもの。それを啜り力となすパンドラモンならば、無限に力を増していくことになる。

　――ならば、嬉しさ、心地よさ、楽しさ、友情、愛。この世を華やかに照らす喜びの感情ならば、どうなるのか。

　草太もパンドラの箱の寓話を聞いたことがある。苦しみの詰まった箱を開いたせいで、世界は苦しみにあふれたのだという。だが、最後に残った希望があったと。巻き散らかされるほどに詰め込まれていた苦しみに対して、箱に残る程度の希望じゃどうしようもないなと思ったのを覚えている。

　――今、希望はあるか。

　ただの地方都市。そのすべての住民が助けを求めている。消えることのない飢えが身体を蝕む。苦しみに心が蝕まれている。
　近所に住む穏やかなおじさん。毎日道を掃き清めてくれるおばあさん。少しずつ名前を覚え始めたクラスメイト。まだ名も知らぬ人々。誰もが苦しみにうずくまっている。届くことのない、弱々しくか細い声が、ホーリーエンジェモンのパスを通して草太にも聞こえている。どこを向いてもあるのは絶望だ。悲しみが靄に乗って幾重にも広がっていく。
　ならば、それを助けよう。邪悪な願いで歪められた人の本能を、あるべき形へと戻してやる。希望がないのなら、希望を作り出す。草太たち四人が、希望となればいい。それだけの話だ。

「じゃ、俺も準備にかかる。パンドラモンの相手は任せた。」
「ハッ、いつものことだろうが！」

　ホーリーエンジェモンが光を纏い、パンドラモンへと切り掛かっていく。

***

　パンドラモンには理解できない。

　自らを満たすためにパンドラモンはある。そのように生まれ、そうやって生きてきた。喜びも嬉しさも、悲しみも嘆きも何一つとして分かち合うことはない。
　喜びはノイズで、悲しみは心満たす供物。それがパンドラモンであり、世界のバグが生み出した化け物だ。
　人のため、弱いものを守ろうと剣を振るうホーリーエンジェモンを理解できない。少しこづかれるだけで死んでしまうようなひ弱な人間が、どうしてパンドラモンへと立ち向かってくるのか。全てがパンドラモンの理外にある。

8.光を示す

　ホーリーエンジェモンから離れ、地上で草太がエンジェウーモンとこよりの二人と合流する。ここからが本番だ。これから草太は白い靄を、飢餓を自ら受け入れることになる。1万人以上の人間が共振し合う苦しみがどれほどのものかは想像もつかない。
　意識をどれだけ保つことができるか、それが勝負だ。最悪の場合、こよりが無理矢理にでも草太の口にカルポスヒューレを突っ込むことになる。
　エンジェウーモンは草太とこよりの護衛だ。全てのデジモンを浄化しきれたとは限らない。作戦

の要となる草太を守り切る必要がある。

　静かに深呼吸を繰り返す。鼓動が落ち着いてくる。できなければ全滅。ならばやるしかないのだ。星も見えない曇天の夜空にはパンドラモンと切り結ぶホーリーエンジェモンがいる。聖剣の光が瞬き、黒い影が跋扈する。今でさえ押されているというのに、これから更なる苦難が天使を待っている。
　白い靄を草太が取り込むためには、ホーリーエンジェモンの力を一度完全に遮断する必要があるからだ。草太やこよりを飢餓から守り続けた聖なる力を、完全に閉ざさなければならない。　それはホーリーエンジェモンへの力の供給も完全に閉ざされることを意味する。共振励起によってかろうじて渡り合えている状況だというのに、力の増幅がなくなればどうなるかは日を見るより明らかだ。
　それでもホーリーエンジェモンは、何一つ文句をいうことなく、やると言った。普段あれだけ不平不満を撒き散らかしていると言うのに、肝心な時には決して弱さを見せることはない。

　一気に息を吸い込む。体に蓄えられて溢れる聖なる力を、意識して遮断する。
　体の守りが消え、白い靄が猛烈な勢いで草太の中へと入り込んでくる。カッと腹が焼けるような感覚を最後に、膝から崩れ落ちる。

「長峰さんッ！」

　慌てて草太を支えるこより。しかしその声は草太へ届かない。延々と共振を続ける苦しみが、激しい飢餓が草太を深い闇に引きずり込んでいく。　草太の肉体が悲鳴をあげる。何日もまともに食べられていないのだと、白い靄に騙された脳が空腹を訴える。人々の苦悶の声が、草太に絡みつくように響く。ただ、食べるものが欲しい。何者にも変え難い、生物としての本能が暴れだす。飢餓がもたらす苦しみは絶えることなく、肉体を、心を、蝕んでいく。
　これがパンドラモンの悪意。飢餓に苦しむ人々の嘆きが、苦しみが、無理矢理接続された白い靄によって増幅されている。誰もが膝を折り、空腹にあえぐ苦しみが、共振し続ける飢餓が草太の意識を吹き飛ばそうとする。

　"バサリ"と翼を打つ音が、かすかに耳に届く。
　自分の体が今どうなっているのかも分からない。空腹で頭が痺れたように働かない。だが、その音は確かに聞こえたのだ。大して長い付き合いではない。性格も行動も何一つ気が合うものがない。こんな状況でなければ言葉を交わすことすらない、正真正銘別世界の住民。
　だが、草太がその羽音を聞き逃すことはない。どれだけ嫌な存在であっても、そいつは草太にとっての唯一なのだ。ただ一つ、草太が憧れた光だ。だから草太には意地がある。だからこそ、他の誰よりも弱みを見せるわけにはいかないのだ。

　――ホーリーエンジェモンはまだ戦っているのだから！

　腹が減ったからなんだというのか。膝をやってしまった時の痛みだって、そのあとの絶望感だって、自分は知っているのだ。この程度のことで屈するようでは、あきれるほど高慢な天使の隣に立つことはできない。そんな弱い姿を見せることだけは、絶対に御免だった。

震えそうになる手に、必死に力を込める。崩れそうになる膝に鞭を入れるように足を支える。腹が減りすぎて逆に吐き気さえしてくる。それでも、腹に力を入れて笑う。パンドラモンの飢餓など大したものではないと、虚勢を張る。
不安の表情で草太を見つめるこよりにも気が付かない。かすかな力を振り絞る。奴が、自分を待っている。必ず戻ると、そう信じているのだ。だから、それ以外のことはいらないことだ。ただ一人のために、残る全ての力を振り絞る。

再び、草太に蓄えられていた聖なる光を解き放たれる。自らの身のうちに深く根を張った白い靄が、光に焼き尽くされる。白い靄に接続されたまま、草太が、再び立ち上がり叫ぶ。

「ホーリーエンジェモン、待たせた！！後は、好きにやれ……！！」

草太が飢餓に苦しんだのはわずかな時間だったろう。それでも草太はほとんど瀕死だし、ホーリーエンジェモンは全身がボロボロにやられている。
そんな仕打ちを、この街の人々は受けつづけていたのだ。今も苦しんでいる。それが許せるだろうか。許せるはずがない！

ブワッと光と風が吹き荒れる。パンドラモンの攻撃を凌ぎ続けて傷ついた身体が、力を取り戻す。

「好きにやれ？　あの阿呆は何を言っている？　貴様に言われるまでもない！　ここからは私の時間だ！！」

全身に満ち満ちる力が、ホーリーエンジェモンを高揚させる。そして高く響く笑い声。不遜なまでに笑う声が、夜空の元にどこまでも広がっていく。

草太からすればこの高笑いはただの阿呆の鳴き声に過ぎない。
だが、この街の人々にとっては違う。これまでこの街がデジモン、ひいてはパンドラモンによって受けた被害は相当なものである。直接的にデジモンに傷つけられた人、デジモンによって破壊された家屋やビルに住んでいる人々。
それらすべての災いを、このホーリーエンジェモンが祓ってきたのだ。
どこであろうと、誰であろうと、弱きものを守り続けてきた。ホーリーエンジェモンが現れたのなら、もうそれ以上傷つく人はいないのだ。だからホーリーエンジェモンの到来を告げる笑い声は、街の人にとって自分たちを救いに来る天使の福音なのだ。

草太はエクスキャリバーを振るうのが楽しくて仕方ないから笑っているだけだと思っているし、大部分はその通りである。
しかし何も知らない人々からすれば、見るからに神聖な天使が、人を安心させるように笑っているように見える。事実がそれを後押しする。正真正銘ホーリーエンジェモンはこの街を守り続けてきた。守り抜いてきた守護天使である。

　この高笑いこそが、作戦の要だった。草太の作戦はパンドラモンの靄をいわばハッキング、正確にはクラッキングすることだ。草太の感じるカルポスヒューレの味を届け、飢餓を焼き尽くすこと。
　だが、おびただしい苦しみと助けを求める声であふれる中、それを届けるのは困難極まる。苦しみに心が捉われている人に、かすかな光など届かないからだ。

　――だが、ホーリーエンジェモンの声は必ず届く。

　今までの実績が証明している。草太が口に出すことは絶対にないが、ホーリーエンジェモンはまぎれもなくこの街の希望である。だから、苦しみに喘ぐ人々は誰よりこの天使に救いを求める。
　この街の人々は、あの高笑いに希望を覚えないはずがないのだ。たとえわずかな時間にしかすぎなくても、その声は確かに飢餓を忘れさせる力を持つ。

　白い靄を通して、草太が聞いたこの高笑いを街の人々に届ける。それはなんの力もない、ただの声だ。
　パンドラモンがこの声の意味を理解することは、ない。この声がどれほど人に救いをもたらすのかを、決して理解できないのだ。

　指ひとつ動かせないほどの飢えに横たわるサラリーマンが、その笑い声を耳にする。成長期すら訪れていない幼い子供に、その声が届く。その手を握る女性は、その声の持ち主を知っている。いつも騒がしく井戸端会議を開く近所の主婦にも、かつて信号無視を詰められたタクシードライバーにも、ただ一度でもかの天使を知った人の全てに、たとえ知らない人であっても、その自信に満ちた笑い声が、その心に響く。
　どれほど耐え難い飢えであっても、全ての感情を止めることはできない。深い絶望にあるからこそ、希望はより強く輝くことだってある。

　ホーリーエンジェモンのその声が、わずかな希望を生み出す。その希望が、わずかでも空腹を忘れさせたその一瞬が、最初で最後のチャンスだ。その瞬間をとらえ、これからの声を届ける。

「いただきます、だ。」

　いつもの青いパーカーのポケットから、カルポスヒューレ――デジタルワールド随一のスイーツだ――を取り出す。高らかな笑い声にいら立つパンドラモンは、草太の行動を気にも留めず、少しずつ雲が薄れていく夜空を背景に、ひたすらに天使を追い回している。

　その果実は、デジタルワールドの生み出した至高の一品。かぐわしき香りに理性が飛びそうだ。柔らかで張りのある皮をむくこともなく、一気にかじりつく。
　かぶりついたその先から舌がとろけるような甘い蜜があふれ出る。脳がしびれるほどの甘みが口内を彩る。突き抜ける香りは上品ながらも甘みに負けない強さがある。シャクシャクと食感のいい果肉に、耳までもが心地よさを感じる。
　ただの一口。ただそれだけで、それまでの苦しみが吹き飛ばされる。わずかな時間ではあったが、草太は何もかも忘れて、その味わいに集中する。

パンドラモンによって飢餓の苦しみは靄を介してつなげられている。同じ苦しみが人と人の間で反射して増幅しあう苦しみのるつぼ。そこに一滴の甘露が齎される。
ホーリーエンジェモンがこじ開けた飢餓の隙間に、するりと入り込んだそれは、絶え間ない空腹にあるからこそ、劇的に人々に染み渡っていく。
わずかでも光が届けば、草太の味わったカルポスヒューレの感動が伝わる。光がその味、触感、香り、ありとあらゆる食の喜びを伝える。そのどれもが人の心を満たしていく。
からからに乾いた心が満たされるとき、人は誰も幸福を覚えるものだ。邪な闇をたやすく引き裂き、白い靄で作られたつながりは、幸福の光で塗り替えられていく。

人の苦しみを最大限に味わうために、パンドラモンは人と人との感覚をつなげて見せた。草太とホーリーエンジェモンの共振励起を模して、人の苦しみを増幅させることすらして見せた。たとえセラフィモンであっても、人の心を埋め尽くす飢えの苦しみを取り除くことはできないだろう。ゆえに人が人である限りパンドラモンは飢えることがない。
――だが、飢えの苦しみが本能に根差すものであるように、飢えを克服した時の喜びも耐えることはない。人の感情とは、隣りあわせであるがために。

天使の力を真似たくせに、それを利用されることなどかけらも考えていない。そのセキュリティホールを草太は
突いた。一口咀嚼するごとに、舌が受ける感覚が目まぐるしく移り変わる。濃厚な甘みの奥には深いうま味がある。スッと消えていくような爽やか酸味が口内を洗うようだ。カルポスヒューレの皮にはほんの僅かな苦みがあって、絶妙なバランスで甘さを引き立てる。舌の根はいつまでも滋味が残り、パンドラモンの飢餓によるものではない、純粋な食欲がその果肉を求める。
草太から伝わってくるカルポスヒューレへと、人々の意識は集中する。ただこの果実を味わいつくす。そのためだけに、ただ味わうということだけに人体のすべての感覚が費やされる。そこに飢餓の入り込む余地はない。

共振励起。パスをつないだもの同士は、同じ意識を持つことで、両者をつなぐ力が増幅される。今、この街の人々が持つ感情はただ一つだ。ゆえに、溢れかえるほどの共振が生まれている。パスを通じるわずかな光が、共振によって倍々に膨れ上がる。白い靄の中を光が幾重にも重なっていく。
草太はもぐもぐと、この恵みの果実を食べ続けている。言葉もなく、ただそのおいしさだけを感じている。その気持ちがこの街全てに広がって、まるで幸せに輝くように街に光が溢れる。

最後の一口を飲み込む。口にはわずかな甘みだけが残る。

「……ご馳走様でした。」

草太の心からの一言が、草太へつながるすべての人へ満足という気持ちを届けた。

苦しみを忘れ、ただただ食べることだけに夢中となる至福の時。誰もが幸福を感じる時間がそこにある。

　人々の心に巣食っていた邪悪な災い、飢餓はすでにない。忌々しい靄は、ただの満腹感に塗りつぶされ消えていったのだ。
　白い靄を流れる光が、黒い塔に溶け込み光の塔へ塗り替えていく。”負”だけを取り込み続けたパンドラモンへ、”正”の感情が、莫大な量の希望が注ぎ込まれる。最も効率よく力を吸い上げ味わうために、パンドラモンは白い靄を自身の本質そのものへと接続していた。ゆえに、一瞬でパンドラモンの全てが光にさらされる。

　黒い靄の翼が光に溶けて、災いの箱が地へ落ちる。

　消えることのない光に本体を焼かれながらも、パンドラモンの視線は草太とホーリーエンジェモンを捉え続ける。

　月夜を背に、4対8枚の翼を広げ、黄金の光を纏う。それは邪悪な意思を断つためにこの世界に遣わされた、ただ一人の大天使。弱きものの守護者――ホーリーエンジェモン。
　街中を染め上げるほどの光が、この街の希望が、この尊大で傲慢な、誰より弱さを知る天使へと集まっていく。
　そこに顕れるのは、あまねくすべての人々の弱さを守るための光だ。遥か銀河を流れる星のように、静かに瞬く光が聖剣となり顕現する。

　その刃は、絶望を切り裂き未来を開くための希望を宿す、ひとかけらの熱すら持たない光の剣。

　ホーリーエンジェモンが光剣を天へとかざす。

　パンドラモンは自らを逆流し周囲にあふだした光――自らが傷つけ続けた人々の希望の衝撃にしびれて動くことが出来ない。負を取り込み続けたからこそ、正しき人の意志にあらがうことが出来ない。ただ、二人へ向ける視線だけが動かない。
　悪意をまき散らし苦しみを食らう世界のバグ。進化も退化もなく、負を取り込んで災いを成すだけの存在。バグそのものであるが故に、このパンドラモンを倒したとしても必ず次のパンドラモンがあらわれる。だからセラフィモンや天使連は封印を選んだ。　だが、ここはデジタルワールドではない。リアルワールドに現れたパンドラモンは、すでに世界から切り離されている。
　そしてホーリーエンジェモンと草太による逆転の光は、パンドラモンをパンドラモンたらしめるそのバグを浮き彫りにした。

　もし、パンドラモンが、食というものを少しでも理解していたのならば、こうはならなかった。リアルワールドへと解放されたが故に食欲に歯止めがかからなくなった。人の持つ圧倒的な情報量に欲望を揺らされて、飢えを満たすことを止められなくなった。――つまり、何事も腹八分目ということだ。

　ホーリーエンジェモンには祈るべき神などいない。姿は天使であってもその本質はデジモンであるからだ。誇りによって立ち、矜持を恃みに進む。そこに祈りの入る余地などない。
　だからホーリーエンジェモンが告げるのは、同じく飢えを知りながらも、異なる道を歩んできた者の最後の情けだ。

「パンドラモン、お前の苦しみを、今祓ってやろう。」

　振るわれた聖剣が一瞬の輝きが、パンドラモンを両断する。世界に満ち満ちる幸福が、パンドラモンの体を打ち砕く。パンドラモンを災いたらしめていた、バグごとすべてが浄化されて、さらさらと、邪悪そのものであったことが嘘のように、穏やかに消えていく。白い靄を満たす光がゆらゆらと浮かび消えていく。まるで星屑のような、美しい光が街の空に広がっていき、やがて静かになる。

　そして、一つのデジタマだけが残った。

***

　全てを見届けていた草太が、ゆっくりとデジタマへと近づき、手を伸ばす。不思議な力で宙へと浮かんだままだったデジタマが、触れた瞬間に重力を思い出したように落ちて、草太の手の内に収まった。

　それが、パンドラモンによる災害の終幕だった。

***

街1つを丸々飲み込むほどの力。いつでもパンドラモンは最後の災い――支配、疫病、飢餓の次に来るならば、それは死だ――を作ることが出来たはずだ。
　それをしなかった理由がホーリーエンジェモンにはわかった。
　パンドラモンは飢えていたのだ。ただただ飢えていた。だから人間の負の感情を食べ続けることをやめられなくなった。ただ貪欲に食欲に溺れて勝ち筋を見失った。パンドラモンの勝ちは揺るがなかったはずだ。だというのに、パンドラモンは勝つためではなく、長引かせるように戦った。ホーリーエンジェモンと草太の感情すらごちそうに見えていたからだ。
　自身もそうだったからこそ、わかる。スラム街から助け出された当時のホーリーエンジェモンもそうだった。何もかもがごちそうだった。だが、ホーリーエンジェモンにはセラフィモンがいた。食事の作法から作り方、材料の選び方までを丁寧に教わることが出来た。口うるさいクソガキへ教えるくらいまで、食というものを知ったのだ。

　草太による白い靄のハッキングにより、パンドラモンを構築するデータの末端に至るまでが白き光で焼き尽くさた。そして、剥き出しとなったその本質を、パンドラモンを取り巻く因果の全てを輝く剣が断ち切った。ゆえに新たなデジタマには、忌まわしき災いなど何もない。
――そこにあるのは、何にでもなれるだろう、希望だけが詰まっているのだ。

9.答え合わせ
　昨日までの陰鬱な靄や苦しみの連鎖を感じさせることなく、さんさんと太陽が街中を照らしている。
　長峰家の庭には草太とホーリーエンジェモン、テイルモンに高間こよりの4人が集まっている。

草太の父が所有していたバーベキューセットを組み立てているところだ。決戦前の約束を果たすというわけである。
　とはいえキャンプ未体験のこよりに、そもそもキャンプなど知らないテイルモンは戦力外である。庭に面したリビングを開けているので、そこに腰掛けながら楽しみだねなどとほんわかするような会話をしている。パンドラモンが残したデジタマも一緒である。
　対して男性陣はといえば、最悪の空気の元に組み立てを続けている。キャンプ道具は大体が組み立て式なのだが、コンパクトになるようにと複雑な構造である。故に、椅子一つ組み上げるのにああだこうだと試行錯誤を繰り返す羽目になる。なかなかうまく進まない組み立てに苛立ちが募り、自然と罵詈雑言が飛ぶ。組み合わせる場所が違ったろうが馬鹿者めといえば、お前が気づかなかったのが悪いわ抜作と返す。手を動かしながらも言い合いがおさまることがない。一切合切を論う辛辣なやり取りと、ひだまりのような思いやりに満ちた会話。庭の内外で酷いコントラストである。こよりとデジタマには聞かせられない醜い争いだ。

　人に聞かせられない殺伐とした組み立てが終わり、ようやく料理を出来る状態となった。リアルワールドで初めて料理を出来るとあって、ホーリーエンジェモンは張り切っている。雑用は草太を顎で使う反面、食材の下拵えは非常に丁寧である。
　包丁とはこう使うのだと、草太との腕の違いを見せつけている。皮むき一つとっても均一で無駄がない。こよりもテイルモンも大喜びである。さすがに草太も包丁の腕は認めざるを得ない。そもそも料理に対して興味がなかったはずが、すっかり染められていることに気が付いていない。

　火を使う段階になってガスカートリッジが残り1本であることに草太は気が付いた。まだその1本は十分に残っているが、ホーリーエンジェモンがどのくらいコンロを使い続けるかはわからない。コンビニにでも売っているようなよくあるガス缶なので、三人へちょっと買いに行ってくると声をかける。が、そこでテイルモンとこよりが名乗りを上げる。さすがに何一つ手伝いをしていないことに罪悪感を覚えたらしい。ならばとお願いすることにして、草太も料理の手伝いに戻る。きゅうりの板摺でもしようかときゅうりのへたを落としている。スペースや安全性の問題から、二人は背中合わせだ。サク、と包丁をきゅうりに入れた時、ホーリーエンジェモンが振り向くこともなく、ぼそりと草太へ問いかける。

「一つ、聞きたいことがある。」
「……言ってみろ。」
「初めて、貴様がデジモンと遭遇した時、ミノタルモンの注意を自分に向けさせていたな。あれは、なぜだ？」
「は？……あの、牛のデジモンか。空き缶か何か投げたっけ。ん、何かおかしいことがあったか？」
「死に向かうような真似をなぜしたのかと聞いている。」
「ああそういうことか。死にたくてやったわけじゃねぇよ。それにいいだろ、なんだって。」
「いや、答えろ。どうせ貴様とはもう会うことはないからな。私の疑問を解消させろ。」
「……ま、確かに最後だしな。――お前と同じだよ。」
「は？」
「あの時、殺されかけてたおっさんと目があった。ぐちゃぐちゃな顔してさ、いい大人が暴力に従わされてる姿があまりに理不尽だなって思ったんだよ。ふざけんなって。嫌だって思ってるくせ

に、諦めた顔してるのも、俺じゃどうにもできないだろうって思っているのも腹が立った。正直足のけがで自暴自棄になってたせいもある。けど、理由なんてそんなもんだ。」
「ただのやつあたりだと？」
「ああ。お前だってそうだろ？」
「はっ、貴様の幼稚な感情と同じにするな。私は私の正義に基づいて戦うまでだ。」

　はぁ、と重いため息が出る。こいつは最後まで本当に知能の足りない鳥頭だ。いや、あえて目を逸らしているのかもしれない。いつもなら、これからも今まで通りに続くのなら、適当に濁してやってもいい。だが、こいつの言う通り、多分これが最後だ。もう会うことはないのだ。なら、この気の合わない、腹の立つことしかしない、誰より尊敬すべき相棒へ、本当の言葉を贈るのもいいか。

「お前、バカなんだな。」

　ビキリとホーリーエンジェモンの隠された額に青筋が立つ。付き合いの時間はともかく濃さは人一倍だ。見えなくてもそのくらいはわかる。

「正義が力だって言ってたな。じゃあ、お前がやってきたことはなんなんだよ。パンドラモンはお前より強かった。ならパンドラモンの方がもっと正義になるだろ。正義に刃向かう俺らは悪か？んなわけあるか。」

　一息に言った後、振り向いてホーリーエンジェモンと正対する。

「力の使い道から目を逸らすなよ。お前は今まで何やってきたんだ？弱いやつを理不尽から守ってきたんだろ？部屋の片付けもしないし料理も口だけで俺任せ。ものぐさなお前がそれでも絶対に譲らなかったのが、それだろうが。お前がいつもやってることだ。俺たちがやってきたことだ。人を傷つける。悪意を撒き散らす。悲しみを広げる。そういうのが許せなかったから力を欲しがったんだろ。ぐだぐだと言い訳並べやがって。弱いものいじめが嫌いなんだって正直に言え。悪い奴が楽しそうにしてるのが気に食わないって素直によ。何が力こそ正義だ。だからお前の言葉は薄っぺらいんだよ。本音で言え！　悪に泣くやつを少しでも減らしたいんだって言え！それがお前の正義だろうが！」

　まるでハトが豆鉄砲を食らったかのように、ホーリーエンジェモンが呆然としている。今まで一度たりとも見せなかった姿だ。自分の中身を当てられて動揺でもしてるんだろう。なら、ここで追撃する。

「お前がわざわざ半端にふるまう理由なんぞ知らん。けどな、俺はお前の口から出る言葉なんざ一切信用してないんだ。でもお前のやることは見てきた。本心ってのはな、行動に出るんだ。どんなに力だ正義だなんて言っても、行動を見ればお前がやりたいことなんてお見通しなんだよ。わかったら、さっさと料理に戻れバカタレが。」

　くるりと背を向けて、板摺に戻る。ええと、どこまでやったんだっけかとわざわざ口に出してみ

る。ホーリーエンジェモンはまだ、草太を見ている。そしてばさりと翼の音。料理に戻ったのだろう。鍋をかき混ぜるような音。

「――私は貴様が気に食わん。危険もなく穏やかに眠り、まともな食事を三食とることが出来る。にもかかわらずありもしない痛みに怯えて希望をあきらめる。そのちぐはぐさに腹が立つ。行動は本心が出たものだと言ったな？　なら貴様は何なんだ。ケレスモンの時も、貴様は死に行くようなまねをしたな。飢餓を受け入れさえした！　それは何のためだ……！」

　絞り出すようなその声は、草太の本心をも浮き彫りにする。

「……初めはただの八つ当たりだったさ。でも、惜しくなった。サッカーばっかりで全然他の人のこと知らないままだったけど、ようやく色んなことに目を向けられるようになったんだ。俺の知らないことが、知らない人が山ほどいるんだ、この街に。それをパンドラモンなんかに壊させたくなかった。俺のこれからを守りたくなった。それに、これからもサッカー、やることにしたからな。練習できないのは困る。つーか、ケレスモンも、パンドラモンも、お前がいたんだから、無茶ってほどじゃねぇだろ。」

　そのまま、沈黙が落ちる。外から、テイルモンのはしゃぐ声が近づいてきた。

「そうか。分かった。なら、貴様はそれを続ければいい。好きにしろ。ただ、口に出した以上、飲み込むことはできんぞ。貴様の契約者は私だ。私に恥をかかせるな。私の見る目の確かさを証明してみせろ。」
「――分かった。なら、お前も、俺が誇れるお前であれよ。」

　ギィと家の門が開き、テイルモンとこよりが入ってくる。ガス缶だけではなくいろいろ買いこんできたようで、袋が妙に膨らんでいる。

「ただいま戻りました！　せっかくですからスイーツも買いましたよ。後でみんなで食べましょうね。ってあれ？　二人ともどうかしたんですか？」
「いや、別に……。」
「何か文句があるのか？」
「え、いえ、何もないですけど……。ガス缶はここに置いておきますね。ほらこより、スイーツは冷蔵庫にしまっておきましょう。」

　靴を脱いでこよりとテイルモンが家に入っていく。
　草太とホーリーエンジェモンはもう、口を開かない。
　――あまりに黙りこくっているのをテイルモンにしこたま説教されるまでは、だったが。

10.遠い、別れ、友よ

　パンドラモンの封印、いや討伐が完了した以上、ホーリーエンジェモンとテイルモンがこのリアルワールドにいる理由はない。もともとデジモンという存在がリアルワールドに与える影響を最小

限に抑えること、そのために力の制限だとか、テイルモンまでの退化までしてきたのだ。影響云々をいうならそもそもいない方がいいのが道理である。

　パンドラモンが呼び出したデジモンがいないことが確認できたこともあり、ホーリーエンジェモンとテイルモンがデジタルワールドが戻る日がやってきた。
　見送りは当然草太とこよりの二人。人目につかない河川敷に4人が集まる。すでに泣きはらした目の女性陣は、これが最後とずっと抱き合ったままだ。草太とホーリーエンジェモンといえば、あれからも何も変わらず、絶えることのない口喧嘩をして過ごしてきた。ホーリーエンジェモンは別れ難さに泣いている二人をやや冷めた目で見てすらいる。
　ずっと行方不明になっていたこよりは、家に帰ると大騒動だったため、草太とホーリーエンジェモンと会うのも久しぶりである。テイルモンはずっとこよりにつきっきりだったので、相当仲良くなっていたらしい。とはいえいつまでも抱き合っているままではいられない。

　4人の前に幾何学的な模様が浮き上がり、機械仕掛けの門が開く。リアルワールドとは違う風が吹き込んでくる。門の先には10枚の翼と輝く鎧のデジモン、セラフィモンが待つ。

「久しぶりだね、長峰君。それに、ホーリーエンジェモン、テイルモン。ご苦労様だった。」
「ああ。約束通り、パンドラモンは何とかしたぞ。」
「テイルモン、ホーリーエンジェモンが無事任務を完了しました。」

　きちっとした返事はいいのだが、こよりに抱きしめられたままでは台無しだ。さすがのセラフィモンも対応に困ったらしい。しかしホーリーエンジェモンはいつも通りそっぽ向いたまま。草太は首をすくめるばかり。

「ふっ、強いきずなを結べたというなら何よりだ。」
「雑なコメントだな。それよりセラフィモン。俺たちはあんたたちのやらかしを解決した。だから俺たちの願いを一つ聞いてもらいたい。いいよな。」

　どうにもならず適当をかますセラフィモンへ、突っ込みと要求を告げる。つっこみは流しつつも、要求に対しては慎重さを以て答える。

「内容次第といったところだね。こちらの落ち度であることは認めるが、叶えられることには限界がある。それはわかってくれるだろうね。」
「別に大したことじゃない。このデジタマをちゃんとしたところで育ててほしいってだけだ。それくらいのことが出来ないなんて言わないよな。」
「――パンドラモンの、デジタマか。さすがにそれは　「私がそいつの面倒は見る。」」

　仮面がなければ驚きに見開いた目が見えただろう。それほどセラフィモンの驚き方はわかりやすかった。

「ちっ、その顔はやめろバケツ頭が。――もう、そのデジタマに特別なものは何もない。私たちがパンドラモンの特異なものはすべて焼き尽くしたからな。だが、天使連はこいつが怖くてたまらな

いのだろう？　すでにただのデジタマだということが信じられないんだろう。だから私が面倒を見てやると言っている。パンドラモンを倒した本人が面倒を見るというのだ。渡りに船というやつだ。さっさと許可を出せ。今ここで。」
「ホーリーエンジェモン……。あなたにも責任感ってものがあったんですね。」

　ふぅ、と大きく深呼吸の音がする。セラフィモンが息をつく。

「長峰君。ホーリーエンジェモン。君たちが成したこと、その全てに心からの賛辞を贈ろう。そして君たちの願いは確かに聞き届けた。ホーリーエンジェモンを保護観察官とする条件の下、私が知る限りもっとも信用のおける者のそばでこのデジタマを育てよう。……これでいいかな？」
「ああ。それでよろしく頼む。もんざえモンには面倒を押し付けて悪いって謝っておいてくれ。」
「ふふふ、いいとも。体のいい雑用係もできて逆に喜ぶかもしれないよ。」
「ならいいけどな。せいぜいこき使ってやってくれ。」
「まて、私は保護観察以外する気はないぞ。」
「まあまあホーリーエンジェモン、私もたまには手伝いに行きますから。ちょっとは働くのもいいものですよ？」
「すごい嫌そうな顔してるね……。」

　残った懸念はもうない。そして今更話すこともない。
　ホーリーエンジェモンとテイルモンがゲートを渡り、二つの世界が徐々に離れていく。泣きながらお互いの名前を呼び合うテイルモンとこより。だが、自分たちには、せいぜい一言あればいい。

「じゃあな、鳥頭。」
「さらばだ、唐変木。」

　それで終わりだった。静かに閉じていった門は、何もなかったように消え去った。テイルモンの名を呼び泣くこよりの背をポンポンと叩き、ゆっくりと歩き出す。こよりのことはテイルモンから頼まれている。これからもちょくちょく様子を見ることになるだろう。

　だから、いつまでも、あの尊大な天使に頭を使う時間などない。

　これから草太はもう一度プロを目指すのだ。こよりの様子を見つつも、サッカー選手となるべく自分を鍛えなおさなければならない。どこまでできるかなどは分からない。だが、奴のたわごとを証明するつもりはないが、できるところまでやると約束はしている。
　ダメだったならダメでその時だ。いくらでも目の前に道はある。

　あの天使が開いた未来の広さを、希望の輝きを、草太は知っているのだから。

おわり